

落穂の掻き寄せ

デデン

一月一日

七時起床（きしょう）。戸を開けば、霜如雪（しもゆきのごとし）。裏の井戸側（いどばた）に行き、素裸（すっぱだか）になり、釣瓶（つるべ）で三ばい頭から水を浴びる。不精者（ぶしょうもの）の癖（くせ）で、毎日の冷水浴をせぬかわり、一年分を元朝（がんちょう）に済（す）まそうと謂うのである。

戸、窓（まど）の限りを明（あ）け、それから鶏小屋（とりごや）の開闢（かいびやく）。

畑（はたけ）に出て紅（あか）い実付（みつき）の野苺（のぼら）一枝（ひとえだ）を剪（き）って廊下の釣花瓶（つりはなはいけ）に活（い）け、蕾付（つぼみつき）の白菜（はくさい）一株（ひとかぶ）を採（と）って、旅順（りょじゅん）の記念にもらった砲弾（ほうだん）信管（しんかん）のカラを内筒（ないとう）にした竹の花立（はなたて）に挿（さ）し、食堂の六畳に飾（かざ）る。旧臘（きゅうろう）珍らしく暖（あたたか）だったので、霜よけもせぬ白菜に蕾がついたのである。

十時過ぎ、右の食堂で家族打寄り、梅干茶（うめぼしちゃ）一碗（わん）、枯露柿（ころがき）一個（こ）。今日（きょう）此家（ここ）で正月を迎えた者は、主人夫妻、養女、旧臘から逗留中（とうりゅうちゅう）の秋田の小娘（こむすめ）、毎日仕事に来る片眼のかみさん。猫のトラ、犬のデカ、ピン、小犬のチョン、クマ、鶏が十五羽。

十一時雑煮（ぞうじ）。東京仕入の種物（たねもの）沢山で、頗（すこぶ）るうまい。長者気（ちょうじゃき）どりで三碗代（か）える。尤も餅（もち）は唯三個。

*

朝は晴、やがて薄曇（うすぐも）って寒かったが、正午頃（しょうごころ）からまた日が出て暖（あたたか）になった。

自家（うち）は正月元日でも、四圍（あたり）が十二月一日なので、一向正月らしい気もちがせぬ。年賀に往く所もなく、来る者も無い。

デデンがぶらりと遊びに来た。デデンは唾の巳代吉（みよきち）が事である。唾で口が利けぬが、挨拶（あいさつ）をする場合には、デデンと云う声を出す。彼は姦淫（かんいん）の子である。戸籍面（こせきめん）の父は痴（おろか）で、母は莫連者（ばくれんもの）、実父は父の義弟（ぎてい）で実は此村の櫟林（くぬぎばやし）で拾（ひろ）われた捨子（すてご）である。捨てた父母は何者か知らぬが、巳代吉が唾ながら心霊（しんれい）手巧（しゅこう）職人風のイナセな容子を見れば、祖父母の何者かが想像されぬでもない。巳代吉は三歳（みつ）までは口をきいた。ある日「おっかあ、お湯が呑みてえ」と呼んだきり唾となった。何ものが彼の舌を縛

(しば) ったか。同じ胤 (たね) と云う彼の弟も盲であるのを見れば、梅毒 (ばいどく) の遺伝もあろう。父母の心の咎 (とがめ) も与 (あずか) って力あるかも知れぬ。兎に角彼は唾 (つば) になった。

「イエス行く時、生来 (うまれつき) なる瞽 (めくら) を見しが、其弟子彼に問ふて曰ひけるは、ラビ、此人の瞽に生れしは誰の罪なるや、己に由るか、又二親に由るか。イエス答へけるは、此人の罪に非ず、亦其二親の罪にもあらず、彼に由て神の作為 (わざ) の顕はれん為也。此事を言ひて地に唾 (つば) きし、唾にて土を和 (と) き、其泥を瞽者 (めしひ) の目に塗 (ぬ) り、彼に曰ひけるは、シロアムの池に往きて洗 (あら) へ。彼則ち往きて洗ひ、目見ることを得て帰れり。」

耶蘇 (やそ) 程 (ほど) の靈力 (れいりよく) があるなら、巳代吉の唾は屹度 (きつと) 癒 (なお) る。年来 (ねんらい) 眼の前に日々此巳代吉に現 (あら) わるゝ謎 (なぞ) を見ながら、哀 (かな) しいかな不信 (ふしん) 輕薄 (けいはく) の余には、其謎を解 (と) き其舌の縛 (しばり) を解く能力 (ちから) が無い。彼がデデンと呼んで来れば、デデンと応ずるまでゝある。

*

淋 (さび) しい元日であった。

あまり淋しいので、夜 (よる) 隣家 (となり) の人々を案内にやったら、皆浪花節 (なにわぶし) に出かけて留守だった。

(明治四十四年)

芝生の上

正月に入って、連日 (れんじつ) 美晴 (びせい)。

庭を歩くと、吹くともない風が冷やり冷やり顔を撫 (な) でる。日はほかほかと暖かい。杉 (すぎ) は鳶色 (とびいろ) になり、松は微黄 (びこう) を帯 (お) び、裸 (はだか) になった楓 (かえで) の枝 (えだ) には、四十雀 (しじゅうから) が五六羽 (ぱ)、白頬 (しろほ) の黒頭 (くろあたま) を傾 (かし) げて見たり、ヒョイヒョイと枝から枝に飛んだりして居る。地蔵様 (じぞうさま) の影が薄 (うっ) すら地に落ちて居る。

デカとピンとチョンが、白茶 (しらちゃ) のフラシ天 (てん) の敷物 (しきもの) を敷きつめた様な枯れて乾 (かわ) いた芝生 (しばふ) に悠々 (ゆうゆう) と寝 (ね) そべり、満身に日を浴 (あ) びながら、遊んで居る。過去は知らず、将来は知らず、現在の彼等は幸福 (こうふく) である。幸福な彼等を眺 (なが) めて楽 (たのし) む主人 (あるじ) も、不幸な者とは云われない。

勝手の方で、飯 (めし) をやる合図 (あいず) の口笛 (くちぶえ) が鳴ったので、犬の家族は匆 (は) ね起きて先を争うて走って往った。主人はやおら下駄 (げた) をぬいで、芝生の真中 (まんなか) に大の字に仰臥 (ぎょうが) した。而して一鳥過 (よ) ぎらず片雲 (へんうん) 駐 (とど) ま

らぬ浅碧（あさみどり）の空（そら）を、何時までも何時までも眺めた。
（明治四十五年 一月十日）

小鳥

芝生を焼く。

水島生（みずしませい）が来た。社会主義（しゃかいしゅぎ）神髓（しんずい）を返えし、大英遊記（だいえいゆうき）を借りて往った。林の中で拾（ひろ）ったと云って、弾痕（だんこん）ある鷓（つぐみ）を一羽（わ）持て来た。食う気になれぬので、楓の下に埋葬（まいそう）。

銃獵（じゅうりょう）は面白いものであろう。小鳥はうまいものである。此村にはあまり銃獵に来る都人士もないので、小鳥は可なり多い。ある日庭を歩いて居ると、突然東の方から嵐（あらし）の様な羽音（はおと）を立て、夥（おびただ）しい小鳥の群（むれ）が悲鳴（ひめい）をあげつゝ裏の雑木林（ぞうきばやし）に飛んで来た。と思うと、やがて銃声（じゅうせい）がした。小鳥はうまいものである。銃獵は面白いものであろう。然しあの遽（あわたた）しい羽音と、小さな心臓（しんぞう）も破裂（はれつ）せんばかり驚きおびえた悲鳴を聞いては……

午後鳥打（とりうち）帽子（ぼうし）をかぶった丁稚風（でっちふう）の少年が、やゝ久しく門口に立って居たが、思切ったと云う風で土間に入って来た。年は十六、弟子にして呉れと云う。縁（えん）の方へ廻れと云うたら、障子をあけてズンズン入って来たから、縁から突落して馬鹿と叱った。もと谷中村（やなかむら）の者で、父は今深川（ふかがわ）で石工（いしく）、自身はボール箱造って、向う賄（まかない）で月（つき）六円とるそうだ。小説家なぞになるものでない、と云って聞かして、干柿（ほしがき）を三つくれて帰えす。

（明治四十二年 一月十七日）

炬燵

雪がまだ融（と）けぬ。

夜、二畳の炬燵（こたつ）に入って、架上（かじょう）の一冊を抽（ぬ）いたら、「多情多恨（たじょうたこん）」であった。器械的（きかいてき）に頁（ページ）を翻（ひるがえ）して居ると、ついつり込まれて読み入った。ふっと眼を上げると、向うには鶴子が櫓（やぐら）に突伏（つっぷ）して好い気もちにスヤスヤ寝て居る。炬燵の上には、猫が咽（のど）も鳴（な）らさず巴形（ともえなり）に眠って居る。九時近い時計がカチカチ鳴る。台所では細君が皿（さら）の音をさして居る。

茫々（ぼうぼう）たる過去と、漠々（ばくばく）たる未来の間に、斯（この）一瞬（いっしゅん）の現今は楽しい実在（じつざい）であろう。

またさらさらと雪になった。

余は多情多恨を読みつゞける。何と云うても名筆である。柳之助（りゅうのすけ）が亡妻（ぼうさい）の墓に雨がしよぼしよぼ降って居たと葉山（はやま）に語る条（くだり）を読むと、青山（あおやま）墓地（ぼち）にある春日（かすが）燈籠（とうろう）の立った紅葉山人（こうようさんじん）の墓が、突（つ）と眼の前に現（あら）われた。忽ち其墓の前に名刺（めいし）を置いて落涙（らくるい）する一青年（せいねん）士官（しかん）の姿（すがた）が現われる。それは寄生木（やどりぎ）の原著者（げんちょしゃ）である。あゝ其青年士官——彼自身最早（もう）故山の墓になって居るのだ。

皆さっさと過ぎて行く。

「御徐（おしずか）に！」斯く云いたい。

何故（なぜ）人生は斯（こ）うさっさと過ぎて往って了（しま）うのであろう？

（明治四十二年 一月二十二日）

蓄音器

あまり淋（さび）しいので、昔は嫌いなものゝ一にして居た蓄音器（ちくおんき）を買った。無喇叭（むらっぱ）の小さなもので、肉声（にくせい）をよく明瞭（めいりょう）に伝える。呂昇（ろしょう）、大隈（おおすみ）、加賀（かが）、宝生（ほうじょう）、哥沢（うたざわ）、追分（おいわけ）、磯節（いそぶし）、雑多（ざった）なものが時々余等の耳に刹那（せつな）の妙音（みょうおん）を伝える。

あたりが静（しずか）なので、戸をしめきっても、四方に余音（よいん）が伝（つた）わる。蓄音器があると云う事を皆知ってうた。そこで正月には村の若者四十余名を招待（しょうだい）して、蓄音器を興行（こうぎょう）した。次ぎには平生世話になる耶蘇教（やそきょう）信者（しんじゃ）の家族を招待した。次ぎには畑仕事で始終厄介（やっかい）になる隣字（となりあざ）の若者等を案内した。今夜は村の婦人連を招（まね）いた。生憎（あいにく）前日来の雨で、到底来者（きて）はあるまいと思うて居ると、それでも傘（かさ）をさして夕刻（ゆうこく）から十数人の来客（らいきゃく）。

妻と鶴子と逗留中（とうりゅうちゅう）の娘とが席に出て取持つ。

余は母屋（おもや）の炉（ろ）を擁（よう）して、書（ほん）を見ながら時々書院のさゞめきに耳傾ける。一曲終る毎に、入り乱れたほめ言葉が聞こえる。曲中ながら笑声が起る。二時間ばかりも過ぎた。茶菓が運ばれた。やがて誰やらクドクド言う様子であったが、音譜（おんぷ）の中には聞き覚えのない肉声が高々と響き出した。

余は窃（そ）と廊下（ろうか）伝（づた）いに書院に往って、障子の外に停（たたず）んだ。蓄音器が歌うのではない。田圃向（たんぼむこ）うのお琴婆さんが歌うのである。

田圃向うの浜田の源（げん）さんの母者（ははじゃ）は、余の字（あざ）で特色ある人物の一人である。彼女は神道（しんどう）大成教（たいせいきょう）の熱心な信者で、あまり大きくもない屋敷の隅には小さな祠（ほこら）が祭ってあって、今でも水垢離（みずごり）とって、天下泰平（てんかたいへい）、国土安穩（こくどあんのん）、五穀成就（ごこくじょうじゅ）、息災延命（そくさいえんめい）を朝々祈るのである。彼女は村の生れでなく、噂（うわさ）によればさる士（さむらい）の芸妓（げいしゃ）に生ませた女らしい。其信心は何時から始まったか知らぬが、其夫が激烈（げきれつ）な脚気（かっけ）にかゝって已に衝心（しょうしん）した時、彼女は身命（しんめい）を擲（なげう）って祈ったれば、神のお告に九年余命（よめい）を授（さず）くるとあった。果然（はたして）夫の病氣は暈（たたみ）の目一つずつ漸々快方に向って、九年の後死んだ。顔の蒼白い、頬骨（ほおぼね）の高い、眼の凄（すご）い、義太夫語りの様な錆声（さびごえ）をした婆さんである。「折目高（おりめだか）なる武家（ぶけ）挨拶（あいさつ）」と云う様な切口上で挨拶をするのが癖である。今日も朝方（あさがた）蓄音器招待の礼（れい）に、季節には珍しい筍（たけのこ）二本持て来てくれた。

琴婆さんは蓄音器の返礼（へんれい）にと云って、文句（もんく）は自作の寿（ことぶき）を唄うて居る。

「福富サンが、皆を集めて遊ばせて下さるウ……（如何（どう）も声が出ないものですから、エヘン、エヘン—ウーイ、ウーイ、ウーイ）……御親切な福富さんの（ウーイ、ウーイ）ますます御繁昌（ごはんじょう）で（ウーイ、ウーイ）表（おもて）の方から千両箱、右の方から宝船（たからぶね）（ウーイ、ウーイ）……

障子の外に立聞く主人は、冷汗が流れた。彼は窃（そっ）とぬき足して母屋に帰った。唄（うた）はまだつゞいて、（ウーイ、ウーイ）が Refrain の様に響いて来る。

（明治四十五年 二月六日）

春七日

（一）雛節句

三月三日。別に買った雛も無いから、細君が鶴子を相手に紙雛を折ったり、色紙（いろがみ）の鶴、香箱（こうばこ）、三方（さんぼう）、四方（しほう）を折ったり、あらん限りの可愛いものを集めて、雛壇（ひなだん）を飾（かざ）った。

草餅（くさもち）が出来た。蓬（よもぎ）は昨日鶴子が夏やと田圃（たんぼ）に往って摘（つ）んだのである。東京の草餅は、染料（せんりょう）を使うから、色は美しいが、肝腎（かんじん）の香が薄（うす）い。

今朝は非常の霜だった。午（ひる）の前後はまた無闇（むやみ）と暖（あ

たたか)で、急に梅が咲き、雪柳(ゆきやなぎ)が青く芽をふいた。山菜蕨(さんしい)は黄色の花ざかり。赤い蕾(つぼみ)の沈丁花(ちんちょうげ)も一つ白い口を切(き)った。春蘭(しゅんらん)、水仙(すいせん)の蕾が出て来た。

雲雀(ひばり)が頻(しきり)に鳴く。麦畑(むぎばた)に陽炎(かげろう)が立つ。

唾の巳代吉が裸馬(はだかうま)に乗って来た。女子供がキャッキョウ騒(さわ)ぎながら麦畑の向うを通る。若い者が大勢(おおぜい)大師様の参詣(さんけい)に出かける。

春だ。

恋猫(こいねこ)、恋犬(こいいぬ)、鶏(にわとり)は出しても出しても巢(す)につき、雀(すずめ)は夫婦で無暗(むやみ)に人の家(うち)の家根(やね)に穴をつくり、木々は芽を吐き、花をさかす。犬のピンの腹(はら)ははりきれそうである。

夜は松の心芽(しんめ)程(ほど)の小さな蠟燭(ろうそく)をともして、雛壇(ひなだん)が美(うつく)しかった。

(二) 春雨

三月六日。

尽日(じんじつ)雨、山陽(さんよう)の所謂(いわゆる)「春雨(はるさめ)さびしく候」と云う日。

書窓(しょそう)から眺めると、灰色(はいいろ)をした小雨(こさめ)が、噴霧器(ふんむき)で噴(ふ)く様に、弗(ふっ)――弗(ふっ)と北から中(なか)ッ原(ばら)の杉の森を掠(かす)めて斜(はす)に幾(いく)しきりもしぶいて通る。

つくづく見て居る内に、英国の発狂(はつきょう)詩人(しじん)ワットソンの God comes down in the rain 神は雨にて降(くだ)り玉う、と云う句を不凶(ふと)憶(おも)い出した。其れは「田舎(いなか)の信心(しんじん)」と云う短詩の一句である。全詩(ぜんし)は忘れたが、右の句と、「此処(ここ)田舎の村にては、神を信賴(しんらい)の一念今も尚存し」と云う句と、結句の「此れぞ田舎の信心なる、此れに越すものあらめやも」と云う句を覚えて居る。

農村(のうそん)に天道様(てんとうさま)の信心が無くなったら、農村の破滅(はめつ)である。然るに此信心は日に日に消亡(しょうもう)して、人智人巧唯我唯利の風が日々農村人心の分解(ぶんかい)を促(うなが)しつつあるのだ。少しでも農村の実情を見知る者は、前途を懸念(けんねん)せずには居られぬ。

(三) 雨後

三月七日。

近来よく降る。降らなければ曇（くも）る。所謂養花（ようか）の天。

今日は日が出た。朝から暖（あたたか）だ。鶏の声が殊に長閑（のどか）に聞こえる。昨日終日終夜の雨で、畑も土も真黒に潤うた。麦の緑が目立って濃（こ）うなった。緑の麦は、見る眼の驩喜（よろこび）である。其れが嫩（やわ）らかな日光に笑（え）み、若くは面を吹いて寒からぬ程の微風（びふう）にソヨグ時、或は夕雲（ゆうぐも）の翳（かげ）に青黒く黙（もた）す時、花何ものぞと云いたい程美しい。

隣家では最早（もう）馬鈴薯（じゃがいも）を植えた。

午後少し高井戸の方を歩く。米俵を積んだ荷馬車が来る。行きすりに不
目にとまった馬子（まご）の風流（ふうりゅう）、俵（たわら）に白い梅の枝が插（さ）してある。白い蝶が一つ、黒に青紋（あおもん）のある蝶が一つ、花にもつれて何処までもひらひら飛んで跟（つ）いて行く。馬子は知らずに好い声を張り上げて、「飲めよ、ネエ、騒げよ、三十がア止（と）
ウめエヨウ。三十過（す）ぎればア、たゞの人（ひいと）ウ。コラコラ」

朝の模様で、今日は美晴と思われたが、矢張気の定まらぬ日であった。時々ざあと時雨（しぐれ）の様に降っては止み、東に虹（にじ）が出たり、西に日が現（あら）われて遠方の屋根が白く光ったり、北風が来て田圃（たんぼ）の小川の縁（ふち）とる女竹（めたけ）の藪（やぶ）をざわざわ鳴らしてはきらきら日光を跳（おど）らせたりした。空（そら）の一部は印度藍色（いんどあいいろ）に濃（こ）く片曇（かたくも）りし、村と緑の麦の一部は眩（まぶ）しい片明（かたあか）りして、ミレーの「春」を活かして見る様であった。

(四) 摘草

三月八日。

今日も雲雀（ひばり）が頻に鳴く。

午食前（ひるめしまえ）に、夫妻鶴子ピンを連れて田圃に摘草（つみくさ）に出た。田の畔（くろ）の猫柳が絹毛（きぬげ）の被（かつぎ）を脱いで黄（きい）ろい花になった。路傍（みちばた）の草木瓜（くさぼけ）の蕾（つぼみ）が朱（あけ）にふくれた。花は兎に角、吾儕（われら）の附近（あたり）は自然の食物には極めて貧しい処である。芹（せり）少々、嫁菜（よめな）少々、蒲公英（たんぽぽ）少々、野蒜（のびる）少々、蒨（ふき）の薑（とう）が唯三つ四つ、穫物（えもの）は此れっきりであった。

午後本（ほん）を読んで居ると、空中（くうちゅう）に大きな物の唸（うな）り声が響く。縁から見上げると、夏に見る様な白銅色の卷雲（けんうん）を背（うしろ）にして、南の空（そら）に赤い大紙鳶（おおだこ）が一つ颯（あが）って居る。ブラ下げた長い長い二本の縄（なわ）の脚（あし）を軟（やわ）らかに空中に波うたして、紙鳶（たこ）は心（こころ）

長閑（のどか）に虚空（こくう）の海に立泳（たちおよ）ぎをして居る。
ブーンと云うウナリが、武蔵野一ぱいに響き渡る。

春だ。

晩食に摘草の馳走。野蒜の酢味噌（すみそ）は可（か）、ひたし物の嫁菜
は苦（にが）かった。

（五）彼岸入り

三月十八日。彼岸の入り。

風はまだ冷（つめ）たいが、雲雀の歌にも心なしか力（ちから）がついて、富士も鉛色（なまりいろ）に淡（あわ）く霞（かす）む。

庭には沈丁花（ちんちょうげ）の甘（あま）い香（か）が日も夜も溢（あふ）れる。梅は赤い萼（がく）になって、晚咲（おそざき）紅梅（こうばい）の蕾（つぼみ）がふくれた。犬が母子（おやこ）で芝生（しばふ）にトチ狂（くる）う。猫が小犬の様に駈（か）け廻（まわ）る。

春だ。

彼岸入りで、団子（だんご）が出来た。
墓参が多い。

夕方、静（しずか）になった墓地に往って見る。沈丁花（ちんちょうげ）、赤椿（あかつばき）の枝が墓前（ぼぜん）の竹筒（たけつつ）や土に插（さ）してある。線香（せんこう）の烟（けむり）が徐（しず）かに颯（あが）って居る。不図見ると、地蔵様の一人（ひとり）が紅木綿（べにもめん）の着物を被（き）て居られる。先月幼（おさ）な娘を亡（な）くした松さんとここで被（き）せ申したのであろう。

（六）蛇出穴

三月二十八日。

近来の美晴。朝飯後高井戸に行って、石を買う。武蔵野に石は無い。砂利（じゃり）や玉石（たまいし）は玉川最寄（もより）から来るが、沢庵（たくあん）の重石（おもし）以上は上流青梅（あおめ）方角から来る。一貫目一錢五厘の相場（そうば）だ。扱（えら）んだ石を衡（はかり）にかけさせて居たら、土方体（どかたてい）の男が通りかゝって眼を瞪（み）はり、「石を衡にかける——驚いたな」と云った。

午後は田圃（たんぼ）伝いに船橋（ふなばし）の方に出かける。門を出ると、墓地で蛇を見た。田圃の小川の槭（いび）の下では、子供が鮒（ふな）を釣（つ）って居る。十丁そこら往って見かえると、吾家も香爐（こうろ）の家（いえ）程に小さく霞（かす）んで居る。

今日は夕日の富士が、画にかいた「理想（りそう）」の様に遠くて美しか

った。

(七) 仲春

四月十七日。

戸を開（あ）けて、海——かと思うた。家を繞（めぐ）って鉛色（なまりいろ）の朝霞（あさがすみ）。村々の森の梢（こずえ）が、幽霊（ゆうれい）の様に空（そら）に浮いて居る。雨かと舌鼓（したつづみ）をうったら、霞（かすみ）の中からぼんやりと日輪（にちりん）が出て来た。見る見る日の威力は加わって、光は白く霞に咽（むせ）ぶ。

庭の桜の真盛りである。落葉松（らくようしょう）、海棠（かいどう）は十五六の少年と十四五の少女を見る様。紫の箱根つゝじ、雪柳（ゆきやなぎ）、紅白の椿、皆真盛り。一重山吹も咲き出した。セイゲン、ヤシオなど云う血紅色（けっこうしよく）、紅褐色（こうかつしよく）の春モミジはもとより、槭（もみじ）、楓（かえで）、檜（なら）、欒（けやき）、ソロなどの新芽（しんめ）は、とりどりに花より美しい。

畑に出て見る。唯（ただ）一叢（ひとむら）の黄なる菜花（なのはな）に、白い蝶が面白そうに飛んで居る。南の方を見ると、中っ原、廻沢（めぐりさわ）のあたり、桃の紅（くれない）は淡く、李は白く、北を見ると仁左衛門の大欒（おおけやき）が春の空を摩（な）でつゝ褐色（かつしよく）に煙（けぶ）って居る。

春の日も午近くなれば、大分青んで来た芝生に新楓（しんふう）の影繁（しげ）く、遊びくたびれて二（ふた）つ巴（ともえ）に寝て居る小さな母子（おやこ）の犬の黒光（くろびか）りする膚（はだ）の上に、桜（さくら）の花片（はなびら）が二つ三つほろほろとこぼれる。風が吹く。木影（こかげ）が揺（うご）く。蛙が鳴く。一寸（ちよっと）耳をびちっと動かした母犬（おやいぬ）は、またスヤスヤと夢をつゞける。

夕方は、まんまるな紅（あか）い日が、まんじりともせず悠々（ゆうゆう）と西に落ちて行く。横雲（よこぐも）が一寸一刷毛（ひとはけ）日の真中を横に抹（なす）って、画にして見せる。最早（もう）穂（ほ）を孕（はら）んだ青麦（あおむぎ）が夕風にそよぐ。

夜は蛙の声の白い月夜。

（明治四十三年）

ある夜

梅に晩（おそ）く桜に早い四月一日の事。

余は三時過ぎから、ある事の為にある若い婦人を伴うて、粕谷から高輪（たかなわ）に往った。午後の六時から十一時過ぎまで、ある家の主人を訪うてある事を弁じつゞけ、要領を得ずして其家を辞した時は、最早十二時近かった。それでも終電車に乗るを得て、婦人は三宅坂（みやげさか）

で下りて所縁（しょえん）の家へ、余は青山で下りて兄の家に往った。

寝入り端（ばな）と見えて、門を敲（たた）けど呼べど叫べど醒めてくれぬ。つい近所に姪（めい）の家があるが、臨月近い彼女を驚かすのも面白くない。余は青山の通を御所（ごしょ）の方へあるいて、交番に巡查を見出し、其指図で北町裏の宿屋を一二軒敲き起した。寤めは寤たが、満員と体の好い嘘（うそ）を云って謝絶された。

電車はとくに寝に往って了った。夜が明けたら築地の病院に腫物（しゅもつ）を病（や）んで入院して居る父を見舞うつもりで、其れ迄新橋停車場の待合室にでも往って寝ようと、月明りと電燈瓦斯の光を踏んで、ぶらぶら溜池の通を歩いて新橋に往った。往って見ると此は不覚（ふかく）、扉（と）がしまつて居る。駅夫（えきふ）に聞くと、睡むそうな声して、四時半まではあけぬと云う。まだ二時前である。

電燈ばかり明るくてポンペイの廢墟（はいきょ）の様に寂（さび）しい銀座の通りを歩いて東へ折れ、歌舞伎座前を築地の方へ往った。万年橋の袂（たもと）に黙阿弥の芝居に出て来そうな夜啼（よなき）饅頭（うどん）が居る。夜は丑満（うしみつ）頃（ごろ）で、薄寒くもあり、腹も減（へ）った。

「おい、饅頭を一つくれんか」「へえ」

灯（ひ）の蔭から六十近い爺（おやじ）が顔を出して一寸余を見たが、直ぐ団扇（うちわ）でばたばたやりはじめた。後の方には車が二台居る。車夫の一人は軒（いびき）をかいて居る。一人は蹴込（けこみ）に腰を据（す）えて、膝かけを頭からかぶって黙って居る。

「へえ、出来ました」

割箸（わりばし）を添えて爺が手渡す丼（どんぶり）を受取って、一口（ひとくち）啜（すす）ると、腥（なまぐさ）いダシでむかッと来たが、それでも二杯食った。「おい、もう二つこさえて呉れ」

余は代を払い、「ドウモ御馳走様！おい、旦那が下さるとよ」と車夫が他の一人を呼びさます声を聞きすて、万年橋を渡った。つい其処の歌舞伎座の書割（かきわり）にある様な紅味（あかみ）を帯びた十一日の月が電線（でんせん）にぶら下って居る。

築地外科病院の鉄扉（てっぴ）は勿論しまつて居た。父のと思わるゝ二階の一室に、ひいた窓帷（まどかけ）越（ご）しに樺色（かばいろ）の光がさして居る。余は耳を澄ました。人のうめき声がしたかと思うたが、其は僻耳（ひがみみ）であつたかも知れぬ。父は熟睡（じゅくすい）して居るのであろう。其子の一人が今病室の光（あかり）を眺（なが）めて、此（この）深夜（よふけ）に窓の下を徘徊して居るとは夢にも知らぬであらう。

睡（ねむ）くなつた。頭がしびれて来た。何処でもよい、此重い頭を横たえたくなつた。余はうつらうつらと夢心地に本願寺の近辺をぶらついた。体で余は歩かなかつた。幽霊のようにふらふらとさまようた。不図墓地に入った。此処は余も知つて居る。曾て一葉（いちよう）女史（じょし）の

墓を見に来た時歩き廻った墓地である。余は月あかりに墓と墓の間を縫（ぬ）うて歩いた。誰やらの墓の台石（だいいし）に腰かけて見た。然し此処は永く眠るべき場所である。一夜の死を享（う）く可き場所ではない。余は墓地から追い出されて、また本願寺前の広場に出た。

不図本願寺の門があいて居るのを見つけた。門口には巡查か門番かの小屋（こや）があって、あかりがついて居る。然し誰咎（とが）むる者も無いので、突々（つつ）と入って、本堂の縁（えん）に上った。大分西に傾いた月の光は地を這（は）うて、本堂の縁は闇（くら）い蔭（かげ）になって居る。やっと安息の場所を獲（え）て、広縁（ひろえん）に風呂敷を敷き、手枕（たまくら）をして横になった。少しウトウトするかと思うと、直ぐ頭の上で何やらばさばさと云う響がした。余は眼を開（あ）いて頭上（ずじょう）の闇（やみ）を見た。同時に闇の中に「クク」と云う囁（ささ）やきを聞いた。「あ、鳩（はと）だ」

余はまたウトウトとなった。

月は次第に落ちて行く。
(明治四十二年 四月一日)

与右衛門さん

村の三月節句で、皆が遊んであるく。家は潰（つぶ）され、法律上の妻には出て往かれ、今は実家の厄介（やっかい）になって居る久（ひさ）さんが、何（なに）発心（ほっしん）してか今日はまるまるの青坊主（あおぼうず）に剃（そ）って、手拭肩に独ぶらぶら歩いて居る。

甲州街道の小間物屋のおかみが荷を背負（せお）って来た。「ドウもねえあなた、天道様（てんとうさま）に可愛がられまして、此通り真黒でございます」と頬（ほお）を撫（な）でる。気の利いた口のきゝぶり、前半生に面白い話を持って居そうな女だ。負ってあるく荷は十貫目からあると云う。細君が鬢櫛（びんぐし）と鶴子の花簪（はなかんざし）を買うた。

小間物屋のおかみが帰ると、与右衛門（よえもん）さんが地所を買わぬかと云うて来た。少しばかりの地面を買って古い家を建てたりしたので、やれ地面を買わぬかの、古い天水桶用（てんすいおけよう）の釜（かま）を買わぬかの、植木の売物があるのと、蟻（あり）の砂糖（さとう）につく如くたかってくる。金が無いと云っても、中々本当（ほんと）にしてくれぬ。与右衛門さんも其一人である。

与右衛門さんは、村内（そんない）切（き）っての吾儘者（わがままもの）剛愎者（ごうよくもの）としてのけものにさるゝ男である。村内でも工面（くめん）のよい方で、齡（とし）もまだ五十左右（さう）、がっしりした岩畳（がんじょう）の体格、濃い眉の下に開（あ）いた蛇（じゃ）の目の様な二つの眼は鋭く見つめて容易に動かず、頭の頂辺（てっぺん）から足の爪先（つまさき）まで慾気（よくけ）満々（まんまん）として寸分のタルミも無い。岩畳な彼を容（い）るゝその家は、基礎（どだい）を切

石（きりいし）にし、柱（はしら）の数を多くし、屋根をトタンで包（つつ）み、縁（えん）を樑（げやき）で張り、木造の鬼（おに）の窟（いわや）の如く岩畳である。彼に属する一切のものは、其堅牢（けんろう）な意志の発現（はつげん）である。彼が家の子女は何処の子女よりも岩畳である。彼の家の黒猫は、小さな犬より大きく、村内の如何なる猫も其威（い）に恐れぬものは無い。彼が家の麦からの束（たば）は、他家（よそ）の二倍もある。彼が家の夜具（よるのもの）は、宇都宮（うつのみや）の釣天井（つりてんじょう）程に重く大きなものだ。彼が家の婆さんは、七十過ぎて元気おさおさ若者を凌（しの）ぐ婆さんである。婆さんの曰く、私（わたし）の家（うち）は信心なんざしませんや。正に其通り、与右衛門さんは神仏（かみほとけ）なんか信ずる様な事はせぬ、徹頭徹尾自力宗（じりきしゅう）の信者である。遠い神仏（しんぶつ）を信心するでもなければ、近所隣の思惑（おもわく）や評判を気にするでもなく、流行（はやり）とか外聞（がいぶん）とかつき合（あい）とか云うことは、一切禁物で、恃（たの）む所は自家の頭と腕、目ざすものは金である。与右衛門さんには道楽（どうらく）と云うものが無いが、金と酒は生命（いのち）にかけて好きである。家（うち）で晩酌（ばんしゃく）に飲み、村の集会で飲み、有権者だけに衆議院議員の選挙（せんきょ）振舞（ぶるまい）で飲み、どうやらすると昼日中（ひるひなか）おかず媪（ばあ）さんの小店（こみせ）で一人で飲んで真赤（まっか）な上機嫌（じょうきげん）になって、笑って無暗（むやみ）にお辞儀をしたり、管（くだ）を巻いたり、気焰（きえん）を吐（は）いたりして居ることがある。皆が店を覗（のぞ）いて、与右衛門さんのお株（かぶ）梅ヶ谷の独相撲（ひとりずもう）がはじまりだ、と笑う。与右衛門さんは何処までも自己中心である。人が与右衛門さんの地所を世話すれば、世話人は差措（さしお）いて必直談（じきだん）に来る。自身の世話しかけた地所を人が直談にすれば、一盃機嫌で怒鳴（どなり）込んで来る。

然し与右衛門さんは強慾（ごうよく）であるかわり、彼は詐（うそ）を云わぬ。詐は貨幣（かね）同様（どうよう）天下の通（とお）り物である。都でも、田舎でも、皆それぞれに詐をつく。多くの商売は詐に築（つ）かれた蜃気楼（しんきろう）と云ってもよい。此辺の田舎でも、些（ちっ）とまとまった買物を頼めば、売主は頼まれた人に、受取（うけとり）は幾何金（いくら）と書きましようか、ときく。コムミッションの天引（てんびき）は殆（ほとんど）不文律（ふぶんりつ）になって居る。人を見て値（ね）を云う位は、世にも自然な事共である。東京から越して来た人に薪（まき）を売った者がある。他の村人が、あまり値段（ねだん）が高いじゃないかと注意したら、売り主の曰く、そりゃ些（ちった）ア高いかも知（し）んねえが、何某（なにがし）さんは金持（かねもち）だもの、此様な時にでも些（ちった）ア儲（も）うけさして貰（もら）わにゃ、と。而（そう）して薪の売主は、衆議院議員選挙権を有って居る、新聞位は読んで居る男である。売る葺萱（ふきがや）の中に屑（くず）をつめ込んで束（たば）を多くする位は何でも無い。

誰も平気に詐（うそ）をつく。然し看板（かんばん）を出した慾張り屋の与右衛門さんは、詐を云わぬ、いかさまをせぬ。それから彼は作代（さ

ください)に妻をもたせて一家を立てゝやったり、義弟が脚部に負傷(ふしょう)したりすると、荷車にのせて自身挽(ひ)いて一里余の道を何十度も医者へ通ったり、よく縁者の面倒(めんどう)を見る。与右衛門さんに自慢話(じまんばなし)がある。東京者が杉山か何か買って木を伐(き)らした時、其木が倒れて誤(あやま)って隣合(となりあ)って居る彼与右衛門が所有林(しよゆうりん)の雑木(ぞうき)の一本を折った。最初無断(むだん)で杉を伐りはじめたのであった。与右衛門さんは例(れい)の毛虫眉(けむしまゆ)をぴりりとさせて苦情(くじょう)を持込んだ。御自分に御買いになった木を御伐(おき)りになるに申分は無いが、何故(なぜ)此方の山の木まで御折りになったか、金が欲しくて苦情を申すでは無い、金は入りません、折れた木を元(もと)の様に戴(いただ)きたい。思いがけない剛敵(ごうてき)に出会(でっくわ)して、東京者も弱った。与右衛門さんは散々並べて先方(せんぼう)を困(こま)らせぬいた揚句(あげく)、多分の賠償金(ばいしょうきん)と詫言(わびごと)をせしめて、やっと不承(ふしょう)した。右は東京者に打勝った与右衛門さんの手柄話の一節である。与右衛門さんは、東京者に此手で行くばかりでなく、近所隣までも此の筆法で行く。そこで与右衛門さんを憚(はば)か)って、其の地所の隣地に一寸した事をするにも、屹度(きつと)わたりをつける。

与右衛門さんは評判の長話家(ながばなしや)である。鍬を肩にして野ら仕事の出がけに鉢巻(はちまき)として「今日(こんにち)は」の挨拶(あいさつ)からはじめて、三十分一時間の立話(たちばなし)は、珍らしくもない。今日も煙管(きせる)をしまつては出し、しまつては出し、到頭二時間と云うものぶっ通しに話された。与右衛門さんは中々の精力家である。「どうもダイ産(さん)としては地所程好いダイ産はありませんからナ」の百万遍(べん)を聞かされた。「でも斯様(こん)な時代もあったですよ」と云って、与右衛門さんは九度目(ここのたびめ)に抽(ぬ)き出した煙管(きせる)に煙草をつめながら、斯様(こん)な話をした。

此辺はもと徳川様の天領(てんりょう)で、納(おさ)め物の米や何かは八王子(はちおうじ)の代官所(だいかんしょ)まで一々持って往ったものだ。八王子まではざっと六里、余り面倒なので、田はうっちゃってしまえと云う気になり、粕谷では田を一切烏山(からすやま)にやるから貰(もら)ってくれぬかと相談をかけた。烏山では、タバでは貰えぬ、と言う。到頭馬式駄に酒樽(さかだる)をつけて、やっと厄介な田を譲った。「嘘(うそ)の様な話でさ。惜しい事さね、今ならば……」と云って、与右衛門さんは煙管(きせる)の雁管(がんくび)をポンと火鉢にはたいて、今にも水が垂(た)りそうな口もとをした。

(明治四十四年 四月三日)

五月五日

五月五日。日曜。節句。余等が結婚十九年の記念日。例によって赤の飯、若芽(わかめ)の味噌汁(みそしる)。

朝飯すまして一家買物に東京行。東京には招魂祭、府中には大国魂(お

おくにたま) 神社 (じんしゃ) の祭礼があるので、甲州街道も東へ往ったり西へ来たり人通りが賑 (にぎ) やかだ。新宿、九段、上野、青山と廻 (まわ) って、帰途に就いたのが、午後四時過ぎ。東京は賑やかで面白い。賑やかで面白い東京から帰って来ると、田舎も中々悪くない。西日 (にしび) に光る若葉の村々には、赭 (あか) い鯉が緑の中からふわりと浮いて居る。麦の穂は一面白金色 (はくきんしょく) に光り、蛙 (かわず) 鳴く田は紫雲英 (れんげそう) の紅 (くれない) を敷き、短冊形 (たんざくがた) の苗代 (なわしろ) には最早嫩緑 (どんりょく) の針 (はり) がぽつぽつ芽ぐんで居る。夕雲雀 (ゆうひばり) が鳴く。日の入る甲州の山の方から塵 (ちり) のまじらぬ風がソヨソヨ顔を吹く。府中の方から大国魂神社の大太鼓 (おおたいこ) がドンドンと遙 (はるか) に響 (ひび) いて来る。

帰宅したのが六時過ぎ。正面 (まとも) に見て眩 (まぶ) しくない大きな黄銅色 (しんちゅういろ) の日輪 (にちりん) が、今しも橋場 (はしば) の杉木立 (すぎこだち) に沈みかけた所である。

本当に日が永い。

留守に隣から今年 (ことし) も榊餅 (かしわもち) をもらった。

留守に今一つの出来事があった。橋本のいさちゃんが、浜田の婆 (ばあ) さんに連れられ、高島田 (たかしまだ)、紋付 (もんつき)、真白に塗 (ぬ) って、婚礼 (こんれい) の挨拶 (あいさつ) に来たそうだ。美 (うつく) しゅうごさんした、と婢 (おんな) が云う。

いさちゃんは此辺でのハイカラ娘である。東京のさる身分ある人の女で、里子に来て、貰 (もら) われて橋本の女になった。橋本の嗣子 (あととり) が亡くなったので、実弟の谷さんを順養子 (じゅんようし) にして、いさちゃんを妻 (めあ) わしたのである。余等が千歳村に越 (こ) して程なく、時々遊びに来る村の娘の中に、垢 (あか) ぬけした娘が居た。それがいさちゃんであった。彼女は高等小学を卒 (お) え、裁縫 (さいほう) の稽古 (けいこ) に通った。正月なんか、庇髪 (ひさし) に結 (ゆ) ってリボンをかけて着物を更 (か) えた所は、争われぬ都の娘であったが、それでも平生 (ふだん) は平気に村の娘同様の仕事をして、路の悪い時は肥車 (こやしぐるま) の後押 (あとお) しもし、目籠 (めかご) 背負 (せお) って茄子 (なす) 隠元 (いんげん) の収穫 (しゅうかく) にも往った。実家の母やマアガレットに結って居る姉妹等が遊びに来ても、いさちゃんはさして恥じらう風情 (ふぜい) も無かった。

田舎は淋 (さび) しい。人が殖 (ふ) え家が殖えるのは、田舎の歓喜 (よろこび) である。人が喰合 (くいあ) う都会では、人口の増加は苦痛 (くつう) の問題だが、自然を相手に人間の戦 (たたか) う田舎の村では、味方の人数が多い事は何よりも力で強味 (つよみ) である。小人数 (こにんず) の家は、田舎では惨 (みじめ) なものだ。何 (ど) の家でも、五人六人子供の無い家 (うち) は無い。この部落 (ぶらく) でも、嶋田 (しぎだ) や寺本の様に屈強 (くつきょう) な男子 (おとこのこ) の五人三人持て居る家 (うち) は、家 (いえ) も栄 (さかえ) るし、何かにつけて威勢 (い

せい) がよい。養蚕 (ようさん) が重 (おも) な副業 (ふくぎょう) の此地方では、女の子も大切 (だいじ) にされる。貧しい家 (うち) が扶持 (ふち) とりに里子をとるばかりでなく、有福 (ゆうふく) な家 (うち) でも里子をとる、それなりに貰ってしまうのが少なくない。其まゝに大きくして、内の媳 (よめ) にするのが多い。所謂 (いわゆる)「蓄 (つぼみ) からとる花嫁御 (はなよめご)」である。一家総労働の農家では、主僕 (しゆべ) の間に隔 (へだて) が無い様に、実の娘と養女 (やしや) の間に格別 (かくべつ) の差等 (さとう) はない。養われた子女 (こども) が大きくなっても、別に東京恋 (とうきょうこい) しとも思わず、東京 (とうきょう) に往 (ゆ) っても直 (ただ) ぐ田舎 (いんか) に帰 (かえ) って来る。

都会 (たいかい) に近い田舎 (いんか) の事で、何 (ど) の家 (うち) も多少 (たうしやう) の親類 (しんるい) を東京 (とうきょう) に有 (も) って居 (ゐ) る。村 (むら) の祭 (まつり) には東京 (とうきょう) から遊び (あそび) に来 (き) る。農閑 (のうかん) の季節 (きせう) には、田舎 (いんか) から東京 (とうきょう) に遊び (あそび) に行く。辰 (たつ) 爺 (じい) さんは浅草 (あさくさ) に親類 (しんるい) がある。時々 (ときどき) 遊び (あそび) に行くが、帰 (かえ) ると溜息 (ためいき) ついて曰 (い) く、全く (まった) 田舎 (いんか) が好 (え) えナ、浅草 (あさくさ) なンか裏 (うら) が狭 (せま) くて、雪隠 (せっちん) に往 (ゆ) っても鼻 (はな) ア突 (つ) つく、田舎 (いんか) に帰 (かえ) ると爽々 (せいせい) するだ、親類 (しんるい) のやつが百姓 (ひやくしや) は一日 (いちにち) にいくら儲 (もう) かるってきくから、こち (こ) とらは帳面 (ちやうめん) なンかつけやしねえ、年の暮 (としのくれ) になりゃ足り (たり) ない時は足り (たり) ない、剩 (あま) らねえ時は剩 (あま) らねえンだ、って左様 (さやう) 云 (い) ってやりましたよ、と。

東京 (とうきょう) に往 (ゆ) けば、人間 (にんげん) に負 (ま) けます、と皆 (みな) が云 (い) う。麦 (むぎ) の穂 (ほ) 程 (ほど) 人間 (にんげん) の顔 (かほ) がある東京 (とうきょう) では、人間 (にんげん) の顔 (かほ) 見る (み) るばかりでも田舎 (いんか) 者はくたびれて了 (しま) う。其処 (そこ) に電話 (でんわ) の鈴 (りん) が鳴 (な) る。電車 (でんしゃ) が通 (とお) る。自動車 (じどうしゃ) が走 (は) る。号外 (ごうがい) が飛 (と) ぶ。何か (なに) は知ら (し) らず滅多 (めった) 無性 (むしやう) に忙 (せわ) しそうだ。斯様 (こん) な渦 (うず) の中 (なか) に捲 (ま) き込 (こ) まれると、壱兵衛 (いちべゑ) 太五作 (たごさく) も足 (あし) の下 (した) が妙 (たぎ) にこそばゆくなって、宛無 (あてな) しの電話 (でんわ) でもかけ、要 (い) もないに電車 (でんしゃ) に飛 (と) び乗 (の) りでもせねば済 (す) まぬ気 (き) になる。ゆっくりした田舎 (いんか) の時間 (じかん) 空間 (くうかん) の中 (なか) に住 (す) み慣 (な) れては、東京 (とうきょう) 好 (こ) しといえど、久恋 (きゅうれん) の住家 (すみか) では無 (な) い。だから皆 (みな) 帰 (かえ) りには欣々 (きんげん) として帰 (かえ) って来る。

田舎 (いんか) では、豊 (ゆた) かな生計 (くらし) の家 (うち) でも、女 (むすめ) を東京 (とうきょう) に奉公 (ほうこう) に出 (い) 出す。女の奉公 (ほうこう) と、男 (おとこ) の兵役 (へいやく) とは、村 (むら) の両遊学 (りやうゆうがく) である。勿論 (もちろん) 弊害 (へいがい) もあるが、軍隊 (ぐんたい) に出 (い) した男 (おとこ) は概 (がい) して話 (わ) せる男 (おとこ) になって帰 (かえ) って来る。いさちゃんのお婿 (むこ) さんなども、日露戦争 (にっろせんそう) にも出 (い) 出て、何処 (どこ) やら垢 (あか) ぬけのした在郷 (ざいごう) 軍人 (ぐんじん) である。奉公 (ほうこう) に出 (い) した女 (むすめ) にも、東京 (とうきょう) に嫁入 (よめい) る者 (もの) もあるが、田舎 (いんか) に帰 (かえ) って嫁 (よめ) とつぐ者 (もの) が多い。何を云 (い) うても田舎 (いんか) は豊 (ゆた) かである。田舎 (いんか) に生 (う) れた者 (もの) が田舎 (いんか) を恋 (こ) うばかりでなく、都 (みやこ) に生 (う) れた者 (もの) でも田舎 (いんか) に育 (そだ) てば矢張 (やば) 田舎 (いんか) が恋 (こ) しくなる。

いさちゃんも好 (こ) い生涯 (しょうがい) (しょうがい) を与 (たま) へられた。
(明治四十五年)

紫雲英

午後の散歩に一家打連（うちつ）れて八幡山（はちまんやま）、北沢間（きたざわかん）の田圃（たんぼ）に往った。紫雲英（れんげそう）の花盛りである。

此処は西鬱々（うつうつ）とした杉山（すぎやま）と、東若々（わかわか）とした雑木山（ぞうきやま）の緑（みどり）に囲（かこ）まれた田圃で、遙（はるか）北手（きたて）に甲州街道が見えるが、豆人（とうじん）寸馬（すんば）遠く人生行路（じんせいこうろ）の凶（ず）を見る様で、却（かえっ）てあたりの静（しず）けさを添（そ）える。主人と妻と女兒（むすめ）と、田の畔（くろ）の鬼芝（おにしば）に腰を下ろして、持参（じさん）の林檎（りんご）を嚙（かじ）った。背後（うしろ）には生温（なまぬる）い田川（たがわ）の水がちょろちょろ流れて居る。前は畝（うね）から畝へ花毛氈（はなもうせん）を敷いた紫雲英の上に、春もやゝ暮近（くれちか）い五月の午後の日がゆたかに匂（にお）うて居る。ソヨソヨと西から風が来る。見るかぎり桃色（ももいろ）の漣（さざなみ）が立つ。白い蝶が二つもつれ合うてヒラヒラと舞うて居る。跟（つ）いて来た大きな犬のデカと小さなピンが、蛙（かえる）を追ったり、何かフッフッ嗅（か）いだりして、面白そうに花の海を踏（ふ）み分けて、淡紅（とき）の中に凹（なかくぼ）い緑の線（すじ）をつける。熟々（つくづく）と見て居ると、紅（くれない）の歡樂（かんらく）の世に独（ひとり）聖者（せいじゃ）の寂（さび）しげな白い紫雲英が、彼所（かしこ）に一本、此処（ここ）に一株（かぶ）、眼に立って見える。主人はやおら立って、野に置くべきを我庭に移（うつ）さんと白きを掘る。白い胸掛（むねかけ）をした鶴子は、寧（むしろ）其美しきを撰（えら）んで摘（つ）み且摘み、小さな手に持ち切れぬ程になったのを母の手に預（あず）けて、また盛に摘んで居る。

主人は田川の生温（なまぬる）い水で泥手（どろて）を洗って、鬼芝の畔に腰かけつゝ、紫雲英を摘む女兒を眺めて居る。ぽかぽかした暮春（ぼしゅん）の日光（ひざし）と、目に映（うつ）る紫雲英の温（あたた）かい色は、何時しか彼をうっとりと三十余年の昔に連れ帰るのであった。

時は明治十年である。彼は十歳の子供である。彼の郷里は西郷戦争の中心になった。父は祖父を護（ご）して遠方に避難（ひなん）し、兄は京都の英学校に居り、家族の中で唯一人（ただひとり）の男の彼は、母と三人の姉と熊本を東南に距（さ）る四里の山中の伯父（おじ）の家に避難した。山桜（やまざくら）も散って筍（たけのこ）が出る四月の末、熊本城の囲（かこみ）が解（と）けたので、避難の一家は急いで帰途に就いた。伯父の家から川に添（そ）うて一里下れば木山町、二里下ると沼山津（ぬやまづ）村。今夜は沼山津泊（とまり）の予定であった。皆徒歩（かち）だった。木山まで下ると、山から野に出る。彼等は川堤（かわつつみ）を水と共に下って往った。堤の北は藻隠（もがく）れに鮒（ふな）の住む川で、堤の南は一面の田、紫雲英が花毛氈（はなもうせん）を敷き、其の絶間（たえま）絶間（たえま）には水錆（みずさび）が茜色（あかねいろ）の水蓋

(みずぶた) をして居た。行く程に馬上の士官が来た。母が日傘(ひがさ)を横にして会釈(えしゃく)し、最早(もう)熊本に帰っても宜しゅうございましょうかと云うた。宜(よ)いとも宜いとも、皆(みんな)ひどい目に会(あ)った喃(なあ)。と士官が馬上から挨拶(あいさつ)した。其処(そこ)に土俵(どひょう)で築(きず)いた台場(だいば)——堡壘(ほるい)があった。木山の本営(ほんえい)を引揚(ひきあ)げる前、薩軍(さつぐん)が抛(よ)って官軍を拒(ふせ)いだした処である。今は附(つ)け剣(けん)の兵士が番して居た。会釈して一同其処を通りかゝると、蛇が一足のたくって居る。蛇嫌(へびぎら)いの彼は、色を変えて立どまった。兵士が笑って、銃剣(じゅうけん)の先(さき)で蛇をつっかけて、堤外(ていがい)に抛(ほう)り出した。無事に此(この)関所(せきしょ)も越して、彼は母と姉と嬉々(きき)として堤を歩んだ。春の日はばかりばかり春の水はのたりのたり、堤外は一面の紫雲英で、空には雲雀(ひばり)、田には蛙(かわず)が鳴いて居る。明日(あす)家(うち)に帰る前に今夜泊(とま)る沼山津の村は、一里向うに霞んで居る。……

「阿父(おとうさん)、ほら此様(こんな)に摘んでよ」

吾に復(か)えった彼の眼の前に、両手(りょうて)につまんで立った鶴子の白(しろ)胸掛(むねかけ)から、花の臙脂(えんじ)がこぼれそうになって居る。

(明治四十四年 五月八日)

印度洋

夜、新聞で見ると、長谷川(はせがわ)二葉亭(ふたばてい)氏が肺病で露西亞から帰国の船中、コロムボと新嘉坡(シンガポール)の間で死んだとある。去十日の事。

馬琴物(ばきんもの)から雪中梅型(せっちゅうばいがた)のガラクタ小説に耽溺(たんでき)して居た余に、「浮雲(うきぐも)」は何たる驚駭(おどろき)であったろう。余ははじめて人間の解剖室(かいぼうしつ)に引ずり込まれたかの如く、メスの様な其筆尖(ふでさき)が唯恐ろしかった。それからツルゲーネフの翻訳「あひゞき」を国民の友で、「めぐりあひ」を都の花で見た時、余は世にも斯様(こん)な美しい世界があるかと嘆息した。繰(く)り返えし読んで足らず、手ずから写(うつ)したものだ。其後「血笑記(けっしょうき)」を除く外、翻訳物は大抵見た。「其(その)面影(おもかげ)」はあまり面白いとも思わなかった。「平凡(へいぼん)」は新聞で半分から先きを見た。浮雲の筆は枯(か)れきって、ぱっちり眼を開いた五十男の皮肉(ひにく)と鋭利(えいり)と、醒(さ)めきった人のさびしさが犇々(ひしひし)と胸に迫(せま)るものがあった。朝日から露西亞へ派遣(はけん)された時、余は其通信の一行(ぎょう)も見落さなかった。通信の筆は数回ではたと絶えた。而(そう)して帰朝中途の死!

印度洋はよく人の死ぬ所である。昔から船艦(せんかん)の中で死んで印度洋の水底に葬(ほうむ)られた人は数知れぬ。印度洋で死んだ日本人

も一人や二人では無い。知人（ちじん）柳房生（りゅうぼうせい）の親戚某神学士（ぼうしんがくし）も、病を得て英国から帰途印度洋で死んで、新嘉坡（シンガポール）に葬られた。二葉亭氏も印度洋で死んで新嘉坡で火葬され、骨になって日本に帰るのである。

高山（こうざん）の麓（ふもと）の谷は深い。世界第一の高峻（こうしゅん）雪山（せつさん）を有（も）つ印度の洋（うみ）は、幾千（いくばく）の人の死体を埋めても埋めても埋めきれぬ。其陸（りく）の菩提樹（ぼだいじゅ）の蔭に「死の宗教」の花が咲いた印度の洋（うみ）は、餌（え）を求めて鑿（あ）くことを知らぬ死の海である。烈しい暑（あつ）さのせいもあろうが、印度洋は人の気を変にする。日本郵船のある水夫は、コロムボで気が変になり、春画（しゅんが）など水夫部屋に飾（かざ）って拝（おが）んだりして居たが、到頭印度洋の波を分けて水底深く沈（しず）んで了うた、と其船の人が余に語り聞かせた。印度洋の彼（かの）不可思議（ふかしぎ）な色をして千劫（せんごう）万劫（まんごう）已（や）む時もなくゆらめく謎（なぞ）の様な水面（すいめん）を熟々（つくづく）と見て居れば、引き入れられる様で、吾れ知らず飛び込みたくなる。

三年前余は印度洋を東から西へと渡った。日々海を眺（なが）めて暮らした。海の魔力（まりよく）が次第に及ぶを感じた。三等船客の中に、眼が悪（わる）いので歐洲（おうしゅう）廻（まわ）りで渡米する一青年があつて「思出（おもいで）の記（き）」を持って居た。ペナンからコロムボの中間（ちゅうかん）で、余は其思出の記を甲板（かんぱん）から印度洋へ抛（ほう）り込んだ。思出の記は一瞬（いっしゅん）の水煙（みずけむり）を立て、印度洋の底深（そこふか）く沈んで往ったようであつたが、彼小人菊池慎太郎が果して往生（おうじょう）したや否は疑問である。印度洋は妙に人を死に誘（さそ）う処だ。

（明治四十二年 五月十二日）

自動車

九十一歳の父と、八十四歳の母と逗留（とうりゅう）に来ると云う。青山から人力車では、一時間半はかゝる。去年までは車にしたが、今年（ことし）は今少し楽（らく）なものをと考えて、到頭以前睥睨（へいげい）して居た自動車をとることにした。実は自身乗って見たかったのである。

自動車は余の嫌いなものゝ一（ひとつ）である。曾て溜池（ためいけ）の演技座前（えんぎざまえ）で、微速力（びそくりよく）で駈（か）けて来た自動車を避（さ）けおくれて、田舎者の婆さんが洋傘（こうもり）を引かけられて転（ころ）んだ。幸に大した怪我（けが）はなかつたが、其時自動車の内から若い西洋人がやおら立上り、小雨（こさめ）を厭（いと）うて悠々（ゆうゆう）と洋傘（こうもり）をひらいて下り立った容子のあまりに落つき払ったのを、眼前に見た余は、其西洋人を合せて自動車に対する憎悪（ぞうお）を抑（おさ）えかねた。自動車は其後余の嫌いなものゝ一（ひとつ）であつた。

然るに自身乗って見れば、案外乗心地が好い。青山から余の村まで三十

分で来た。父が「一家鶏犬一車上、器機妙用瞬間行」なぞ悪詩（あくし）を作った。工合（ぐあい）が好いので、帰りも自動車にした。今度のは些（ちと）大きく、宅の傍（そば）までは来ぬと云う。五丁程歩いて、乗った。栗梅色（くりうめいろ）に塗（ぬ）った真新（まあたり）しい箱馬車式（はこばしゃしき）の立派なものだ。米国から一昨日着いたばかり、全速（ぜんそく）五十哩（まいる）、六千円出たそうだ。父、母、姉、妻、女は硝子戸（がらすど）の内に、余は運転手（うんてんしゅ）と並んで運転手台に腰かけた。

運転手の手にハンドルが一寸振（ねじ）られると、物珍らしさにたかる村の子供の群（むれ）を離（はな）れて、自動車はふわりと滑（すべ）り出した。村路（そんろ）を出ぬけて青山街道に出る。識（し）る顔の右から左から見る中を、余は少しは得意に、多くは羞明（まぶ）しそうに、眼を開けたりつぶったりして馳（は）せて行く。坂を下って、田圃（たんぼ）を通過して、坂を上って、車は次第に速力を出した。荷車が驚いて道側（みちばた）の草中（くさなか）に避（よ）ける。鶏（にわとり）が刮々（くわっくわっ）叫んで忙（あわ）てゝ遁（に）げる。小児（こども）の肩（かた）を捉（とら）え、女が眼を円（まる）くして見送る。轟々（ごうごう）、機関（きかん）が鳴（な）る。弗々々（ふっふっふっ）、屁（へ）の如く放（ひ）り散（ち）らすガソリンの余煙（よえん）。後（あと）には塵も雲と立とうが、車上の者には何でもない。あたり構わず突進する現代精神を具象（ぐしょう）した車である。但人通りが少ないので、此街道は自動車には理想的な道路と云ってよい。

豪徳寺（ごうとくじ）附近に来ると、自動車は一（ひと）かく入れた馬の如く、決勝点（けっしょうてん）を眼の前に見る走者（そうしゃ）の如く、宛（さ）ながら眼を睜（みは）り、呷（うん）と口を結んで、疾風の如く駛（は）せ出した。余は帽子に手を添（そ）えた。麦畑や、地蔵や、眼と口を一緒（いっしょ）にあけた女の顔や、人の声や、眼（め）まぐるしく駈（か）けて来ては後（うしろ）へ飛ぶ。機関の響は心臓の乱拍子（らんぴょうし）、車は一の砲弾（ほうだん）の如く飄（ひゅう）、倏（しゅっ）と唸（うな）って飛ぶ。「今三十五哩（まいる）の速力です」と運転手が云う。

余は痛快であった。自動車の意志は、さながら余に乗り移（うつ）って、臆病者（おくびょうもの）も一種の恍惚（エクスタシー）に入った。余は次第に大胆（だいたん）になった。自動車が余を載せて駈けるのではなく、余自身が自動車を駆（か）って斯（か）く駛（は）せて居るのだ。余は興（きょう）に乗（じょう）じた。運転手台に前途を睥睨（へいげい）して傲然（ごうぜん）として腰かけた。道があろうと、無かろうと、斯速力で世界の果まで驀地（まっしぐら）に駈けて見たくなかった。山となく、野となく、人でも獣（けもの）でもあらゆるものを乗り越え踏みつけ、唯真直に一文字に存分に駈けて駈けて駈けぬいて見たくなかった。硝子戸（がらすど）の内を見かえれば、母は眼を閉じ、父は口を開き、姉と妻児（さいじ）は愉快そうに笑って話して居る。

「何（ど）の位でとめられるのですかね」またそろそろ臆病風（おくびょうかぜ）が吹いて来た余は、右手にかけて居る運転手に問うた。「三間前（げんまえ）ならトメます。運転手は中々頭がなければ出来ません」

「随分神経を使うですね」

「エ、然し愉快です——力（ちから）ですから」

忽（たちまち）世田ヶ谷村役場の十字路に来た。南に折れて、狭い路を田圃に下り、坂を上って世田ヶ谷街道に出るまで、荷車が来はせぬか、荷馬車が来はせぬか、と余はびくびくものであった。

世田ヶ谷に出て、三軒茶屋以往は、最早東京の場末である。電車、人力車、荷車、荷馬車、馬、さまざまの人間の間を、伶俐（りこう）な自動車は巧に縫うて、家を出て三十分、まさに青山に着いた。

余は老人子供を扶（たす）け下ろして、ホット一息ついた。
(明治四十五年 五月十八日)

デカの死

昨日隣字（となりあざ）に知辺（しるべ）の結婚があった。余は「みづのたはこと」の校正を差措（さしお）いて、鶴子を連れて其席に連（つら）なり、日暮れて帰ると、提灯（ちょうちん）ともして迎えに来た女中は、デカが先刻（せんこく）甲州街道で自動車に轢（ひ）かれたことを告げた。今朝も奥の雨戸を開（あ）けると、芝生（しばふ）に腹這（はらば）いながら、主人の顔を見て尻尾（しっぽ）振（ふ）り振りした。書院の雨戸を開けると、起きて来て縁（えん）に両手をつき、主人に頭（あたま）撫（な）でられて嬉（うれ）しそうに尾を振って居た。正午の頃までは、裏の櫟林（くぬぎばやし）で吠（ほ）えたりして居た。何時の間にか甲州街道に遊びに往って無惨（むざん）の最後（さいご）を遂（と）げたのか。

尤も彼は此頃ひどく弱って居た。彼は年来ピンの押入婿（おしいりむこ）であったが、昨秋新に村人の家に飼われた勇猛（ゆうもう）の白犬の為に一度噛み伏せられてピンをとられて以来、俄に弱って著（いちじる）しく老衰して見えた。彼は其の腹慰（はらい）せであるかの如く、何処からかまだ子供々々した牝犬（めいぬ）を主人の家に連れ込んだ。如何に犬好きの家でも、牝犬二匹は厄介である。主人は度々牝犬を捨てたが、直ぐ舞戻（まいもど）って来た。到頭近所の人を頼み、わざわざ汽車で八王子まで連れて往って捨てゝもろうた。二週間前の事である。其後デカが夜毎に帰っては来たが、昼（ひる）は其牝犬を探（さ）がしあるいて居るらしかった。探がし探がして探がし得ず、がっかりした容子（ようす）は、主人の眼にも笑止（しょうし）に見えた。其様（そん）な事で弱って居る矢先（やさき）、自動車に轢（ひ）かるゝ様なことになったのだろう。春秋（しんじゅう）の筆法（ひっぽう）を以てすれば、取りも直さず牝犬を捨てた主人の余の手にかゝって死んだのである。

彼は幡（はた）ヶ谷（や）の阪川牛乳店に生れて、其処（そこ）此処（こ

こ)に飼われた。名もポチと云い、マルと云い、色々の名をもって居た。ある大家では、籍まで入れて飼って居たが、交尾期(こうびき)にあまり家をあけるので、到頭離籍(りせき)してうた。其様(そん)な事で彼は甲州街道の浮浪犬(ふろういぬ)になり、可愛がられもし窘(いじ)められもした。最後に主従の縁を結んだのが、粕谷の犬好きの家だった。デカは粕谷の犬になって二年経(へ)た。渡り者のくせで、子飼(こがい)から育てたピンの如くはあり得なかった。主人に跟(つ)いて出ても、中途から気が変って道草を喰(く)ったりしては、水臭(みずくさ)いやつだと主人に怒(おこ)られた。雄犬の癖(くせ)でもあるが、よく家をあけた。先(せん)の主(ぬし)、先々の主、其外一飯(いっぱん)の恩(おん)ある家(うち)をも必訪(たず)ねた。悪戯(いたずら)でもして叱(おこ)られると、直ぐ甲州街道に逃げて往った。然し彼はよく主人をはじめ一家の者にならずいて、仮令余が彼を撲(ぶ)ちたゝくことがあっても、彼は手足をちゝめて横になり、神妙(しんみょう)に頭をのべて鞭(むち)を受けた。其為め余が鞭の手は自然に鈍(にぶ)るのであった。彼は長い間浮浪犬として飢(ひも)じい目をした故(せい)である、食物を見ると意地汚(いじきた)なく涎(よだれ)を流した。文豪(ぶんごう)ジョンソンが若い時非常の貧苦を経た結果、位置が出来ても、物を食えば額(ひたい)に太(ふと)い筋(すじ)現(あら)われ、汗(あせ)を流し、犬の如くむしゃむしゃ喰うた、と云う逸話を思い浮(うか)べて、甚可哀想(かあいそう)になった。其れから彼は餅(もち)でもやると容易(ようい)に食わず、熟(じっ)と主人の顔を見て、其れ切りですか、まだありますかと云う貌(かお)をした。三つも投げて、両手を開(ひら)いて見せると、彼は納得(なっとく)して、三個ながら口に啣(くわ)えて、芝生に行つてゆるゆる食うのが癖であった。彼は浮浪の癖が中々脱(ぬ)けなかった。先(せん)の白も彼に色々の厄介をかけたが、デカも近所の鶏(とり)を捕ったりして一再(いっさい)ならず迷惑(めいわく)をかけた。去年の秋の頃は、あまりに家をあけるので、煩惱(ぼんのう)も消え失せ、既に離籍(りせき)しようかとした程であった。其れがまた以前の如く居付(いつ)く様になり、到頭余が家のデカで死んだ。

今朝懇意(こんい)の車屋がデカの死骸(しがい)を連れて来た。死骸は冷たくなって、少し眼をあいて居たが、一点の血痕(けっこん)もなく、唯鼻先(はなさき)に土がついて居た。其死を目撃(もくげき)した人の話に、デカは昨日甲州街道の給田(きゅうでん)に遊びに往つて、夕方玉川から帰る自動車目がけて吠(ほ)え付いた。と思うたら、自動車のタイヤに鼻づらを衝(つ)かれたのであろう、ひよろひよろと二度ばかり顛(ころ)んだ。自動車は見かえりもせず東京の方に奔つて往つてうた。其容子を見て居た人は、デカを可愛がる人であったので、デカを連れ込んで、水天宮(すいてんぐう)の御符(おふだ)など飲ましたが、駄目であった。

余は鶏柵内(けいさくない)のミズクサの木の根を深く掘つて、薦(こも)に包(つつ)んだまゝ眠つた様なデカの死骸を葬(ほうむ)つた。
(大正二年 二月十七日)

ハムレット

帝国劇場で文芸協会のハムレットがある。芝居と云うものを久しく見ず、評判の帝国座もまだ覗（のぞ）いたことが無いので、見物に出かける。

劇場の外観は白っぽく冷（つめ）たく、あまり好い感じがせぬ。内は流石に綺羅（きら）びやかなものであった。二階の正面に陣取（じんど）って、舞台や天井（てんじょう）、土間、貴顕（きけん）のボックスと、ずっと見渡した時、吾着物の中で土臭（つちくさ）い体（からだ）が萎縮（いしゆく）するように感じた。

幕が上った。十五六世紀の西洋の甲冑（かっちゅう）着（つ）けた士卒が出て、鎌倉武士（かまくらぶし）の白（せりふ）を使う。亡霊（ぼうれい）の出になる。やがて丁抹（でんまるく）王城（おうじょう）の場になる。道具立（どうぐだて）は淋（さび）しいが、国王は眼がぎろりとして、如何にも悪党（あくとう）らしい。ガアツルード妃（ひ）は血色が好過ぎ若過ぎ強過ぎた。緑の上衣の若者を一寸ハムレットかと思うたら、そうではなくて、少し傍見（わきみ）をして居た内に、黒い喪服（もふく）のハムレットが出て来て、低い腰掛（こしかけ）にかけて居た。余は熟々（つくづく）とハムレットの顔を見た。成程違わぬ。舞台のハムレットには、幼（おさ）な顔の土肥（どい）君が残って居る。

土肥君は余の同郷、小学校の同窓（どうそう）である。色の浅黒い、顴（あご）の四角な、鼠（ねずみ）の様な可愛い、黒い眼をした温厚（おんこう）な子供であった。阿父（おとっさん）が書家（しょか）樵石（しょうせき）先生だけに、土肥君も子供の時から手跡（しゅせき）見事に、よく学校の先生に褒（ほ）められるのと、阿父が使いふるしの払子（ほっす）の毛先を剪（はさ）み切った様な大文字筆を持って居たのを、余は内々ひどく羨（うらや）んだものだ。其れは西郷戦争前であった。余等の仲間（なかま）では、仲の好い同志遊びに往ったり来たり泊（とま）ったりしたものだ。ある時余は学校の帰りに土肥君と他の二三人を「遊びに来（こ）らし」と引張って、学校から小一里もある余の家に伴（とも）のうた。遊んで居る内日が暮れたので、皆泊ることにした。土肥君は彼（あの）鼠（ねずみ）の様な眼を見据（みす）えて、やゝ不安な寂（さび）しそうな面地をして居たが、皆に説破されて到頭泊った。枕を並べて一寝入（ひとねい）りしたと思うと、余等は起された。土肥君の宅から迎えの使者が来たと云うのである。土肥君はいそいそ起きて一人帰って往った。為めに余等は甚（はなはだ）興を失ったが、子供の事だ、其まゝ寝ついた。翌日はみやげにすると云うて父が秘蔵（ひぞう）のシャボテンの芽（め）をかいで、一同土肥君の宅に押しかける途中、小川で水泳して、枯れてはいけぬと云うて砂の中にシャボテンの芽を仮植（かりう）えしたりしたことがある。其頃の土肥君は、色は黒いが少女（おとめ）の様なつゝましい子であった。余は西郷戦争の翌年京都に往った。其れからかけ違（ちが）って君に逢わざること三十三年。三十四年目に帝国座の舞台で丁抹（でんまるく）の王子として君を見るのである。

興味は一幕毎に加わって行く。オフィリヤは可憐（かれん）であった。

劇中劇の幕の終、ハムレットの狂喜（きょうき）が殊（こと）に好かった。諫言の場もハムレットの出来は好かった。矢張王妃（おうひ）が強過ぎた。ポロニアスは手に入ったもの。ホラシオは間（ま）がぬけた。オフィリヤの狂態（きょうたい）になっての出は凄（すご）く好かった。墓場（はかば）で墓掘（はかほり）の歌う声が実に好く、仕ぐさも軽妙であった。

要するに帝国劇場は荘麗なもの、沙翁劇（さおうげき）は真面目（まじめ）で案外面白いものであった。

大詰（おおづめ）の幕がひかれたのが、九時過ぎ。新宿から車で帰る。提灯（ちょうちん）の火が映（うつ）る程、街道（かいどう）は水が溜（たま）って居る。「降ったね」「えゝえゝ。ひどい降りでした。上（かみ）では雹（ひょう）が降ってます」

余等が帝劇のハムレットに喜憂（きゆう）を注（そそ）いで居る間に、北多摩（きたたま）では地が真白になる程雹が降った。余が畑の小麦（こむぎ）も大分こぼれた。隣字（となりあざ）では、麦は種（たね）がなくなり、桑（くわ）も蔬菜（そさい）も青い物全滅（ぜんめつ）の惨状（さんじょう）に会（あ）うた。

（明治四十四年 五月二十四日）

春の暮

庭石菖（にわせきしょう）、またの名は草あやめの真盛りである。茜（あかね）がかつた紫と白と、一本二本はさしてめでたい花でもないが、午（ご）の日を受けて何万となく庭一面に咲く時は、緑の地（じ）に紫と白の浮き模様（もよう）、花毛氈（はなもうせん）を敷いた様に美しい。見てくれる人がないから、日傭（ひよう）のおかみを引張って来て見せる。

草あやめの外には、芍薬（しゃくやく）、紫と白と黄の溪蓀（あやめ）、薔薇（ばら）、石竹（せきちく）、瞿麦（とこなつ）、虞美人草（ぐびじんそう）、花芥子（はなげし）、紅白（こうはく）除虫菊（じょちゅうぎく）、皆存分に咲いて、庭も園も色々に明（あか）るくなった。

畑では麦が日に日に照って、周囲（あたり）の黯（くら）い緑に競（きそ）う。春蟬（はるぜみ）が鳴（な）く。割葦（よしきり）が鳴く。蛙（かわず）が鳴く。青い風が吹く。夕方は月見草（つきみそう）が庭一ぱいに咲いて香（かお）る。

今日（きょう）は雨が欲しく、風が恋（こい）しく、蔭（かげ）がなつかしい五月下旬の日であった。蟬（せみ）の音（ね）、色づいた麦、耳にも眼にもじりじりと暑（あつ）く、光（ひか）る緑に眼は痛（いた）い様であった。果然（かぜん）寒暖計（かんだんけい）は途方（とほう）もない八十度を指（さ）した。

落葉木（らくようぼく）が悉皆（すっかり）若葉から青葉になった処で、檜（かし）、松（まつ）、杉（すぎ）、樅（もみ）、椎（しい）等の常緑樹（と

きわぎ) や竹 (たけ) の類 (るい) が、日に日に古葉 (ふるは) を落しては若々しい若葉をつけ出した。此頃は毎日掃 (は) いても掃いても櫛の古葉が落ちる。

気軽 (きがる) な落葉木の若葉も美しいが、重々しい常緑樹の柄 (がら) にない嫩 (やわら) かな若葉をつけた処も中々好い。ゆさゆさと嫩 (やわ) らかな食 (く) えそうな若葉をかぶった白櫛 (しらかし) の瑞枝 (みずえ)、杉は灰緑 (かいりよく) の海藻 (かいそう) めいた新芽 (しんめ) を簇立 (むらだ) て、赤松 (あかまつ) は赭 (あか) く黒松 (くろまつ) は白っぽい小蠟燭 (ころうそく) の様な心芽 (しんめ) をついついと枝の梢毎 (うらごと) に立て、竹はまた「暮春には春服已に成る」と云った様に譬 (たと) え様もない鮮 (あざ) やかな明るい緑の簑 (みの) をふっさりとかぶって、何れを見ても眼の喜 (よろこび) である。

今夜はじめて蚊 (か) が一つぶんと唸 (うな) った。

「蚊一つに寝 (ね) られぬ宵 (よひ) や春の暮」

春は最早 (もう) 暮るゝのである。

(明治四十五年 五月二十六日)

首夏

先日七の家 (うち) から茄子苗 (なすなえ) を買ったら、今朝七の母者 (ははじゃ) がわざわざ茄子の安否 (あんぴ) を見に来た。

此頃の馳走 (ちそう) は豌豆 (えんどう) めした。だが、豌豆にたかる黒虫、青虫の数は、実に際限がない。今日も夫婦で二時間ばかり虫征伐 (むしせいばつ) をやった。虫と食を争 (あらし) い、蠅 (はえ) と住居 (すまい) を争い、人の子もこゝさんざんの体 (てい) たらくだ。

午後筍買 (たけのこか) いに隣村まで出かける。筍も末だ。其筍である、新竹 (しんちく) 伸 (の) びて親竹 (おやだけ) より早一丈も高くなって居る。往復に田圃 (たんぼ) を通った。萌黄 (もえぎ) に萌 (も) え出した苗代 (なわしろ) が、最早 (もう) 悉皆 (すっかり) 緑 (みどり) になった。南風 (みなみ) がソヨソヨ吹く。苗代の水に映 (うつ) る青空 (あおぞら) に漣 (さざなみ) が立ち、二寸ばかりの緑秧 (なえ) が一本一本涼 (すず) しく靡 (なび) いて居る。

両三日来夜になると雷様 (かみなりさま) が太鼓 (たいこ) をたゝき、夕雲 (ゆうぐも) の間から稲妻 (いなずま) がパッと射 (さ) したりして居たが、五時過ぎ到頭大雷雨 (だいらいう) になり、一時間ばかりして霽 (は) れた。

裕 (あわせ) では少し冷 (ひや) つくので、羅紗 (らしゃ) の道行 (みちゆき) を引かけて、出て見る。門外の路には水溜 (みずたま) りが出来、熟 (う) れた麦は俯 (うつむ) き、櫟 (くぬぎ) や檜 (なら) はまだ緑の

雫（しずく）を滴（た）らして居る。西は明るい、東京の空は紺色（こんいろ）に曇って、まだごろごろ遠雷（えんらい）が鳴って居る。武太（ぶた）さんと伊太（いた）さんが、胡瓜（きゅうり）の苗を入れた大きな塵取（ごみとり）をかゝえて、跣足（はだし）でやって来る。

最早夏に移るのだ。

（明治四十四年 五月二十七日）

憎むと枯れる

戸を開（あ）けると、露一白（つゆいっぱく）。芝生（しばふ）には吉野紙（よしのがみ）を広げた様な蜘蛛（くものあみ）が張って居る。小さな露の玉を瓔珞（ようらく）と貫（つらぬ）いた蜘蛛（くも）の糸が、枝から枝にだらりと下（さが）って居る。

門の入口に甘（あま）い香（かおり）がすると思うたら、籬根（かきね）にすいかずらの花が何時の間にか咲いて居る。

生々（せいせい）又生々。営々（えいえい）且（かつ）営々。何処（どこ）を向いても凄（すさま）じい自然の活気（かっき）に威圧（いあつ）される。田圃（たんぼ）には泥声（だみごえ）あげて蛙（かわず）が「生（う）めよ殖（ふ）えん」とわめく。雀や燕（つばめ）は出産（しゅっさん）を気がまえて、新巢（しんす）の経営（けいえい）に忙（せわ）しく、昨日も今日も書院（しよいん）の戸袋（とぶくろ）に巢（す）をつくると、チュッチュッチュッチュツ喧（やかま）しく囀（さえず）りながら、さまざまの芥（あくた）をくわえ込む。蠅（はえ）がうるさい。蚊（か）がうるさい。薔薇（ばら）にも豌豆（えんどう）にも数限りもなく虫が湧く。地は限りなく草を生（は）やす。四圍（あたり）の自然に攻め立てられて、万物（ばんぶつ）の靈殿（れいどの）も小さくなってしま（しま）いそうだ。

隣の金（かね）さんが苗をくれた南瓜（とうなす）の成長を見に来たついでに、斯様（こん）な話をした。金さんの家に、もと非常によく実（な）る葡萄（ぶどう）があった。一年（あるとし）家の新ちゃんが葡萄をちぎると棚（たな）から落ち、大分の怪我をした。それからと云うものは、家の者一同深く其葡萄の木を憎んだ。すると、葡萄は何時となく枯れて了うた。憎むと枯れる。面白い話。新約聖書に、耶蘇（やそ）が実（みの）らぬ無花果（いちじく）を通りかゝりに咀（のろ）うたら、夕方帰る時最早枯れて居たと云う記事がある。耶蘇程の心力の強い人には出来そうな事だ。

夕方真紅（まっか）な提灯（ちょうちん）の様な月が上った。雨になるかと思うたら、水の様な月夜になった。此の頃は宵毎（よいごと）に月が好い。夜もすがら蛙が鳴く。割葦（よしきり）が鳴く。月に浸（ひた）されて生活する我儕（われら）も、さながら深い静かな水の底（そこ）に住んで居る心地がする。

（明治四十五年 六月一日）

麦愁

机に向うて、終日兀座（こつざ）。

外は今にも降りそうな空の下に、一村（ひとむら）総出の麦収納（むぎしゅうのう）。此方（こち）では鎌の音簾々（さくさく）。彼方（あち）では昨日蒞ったのを山の様に荷車に積んで行く。時々賑（にぎ）やかな笑声が響（ひび）く。皆欣々として居る。労働の報酬（むくい）が今来るのだ。嬉（うれ）しい筈。

例年麦秋になると、美的百姓先生の煩悶（はんもん）がはじまる。余は之を自家の麦愁（ばくしゅう）と名づける。先生の家（うち）にも、大麦小麦を合わせて一反そこの麦の収納をするが、其れは人を傭（やと）うたりして直ぐ片づいてしまう。慰（なぐさ）みにくるり棒を取った処で、大した事も無い。買った米を食う先生には、大麦の二俵三俵取れたところで、何でも無いのだ。単純な充実（じゅうじつ）した生活をする農家が今勝誇（かちほこ）る麦秋の賑合（にぎわい）の中に、気が多い美的百姓は肩身狭く、憊（つか）れた心と焦々（いらいら）した気分で自ら己を咀（のろ）うて居る。さっぱりと身を捨て、真実の農にはなれず。さりとも思う様に書けもせず。彼方（あち）を羨（うらや）んで見たり、自ら憐んで見たり。中途半端（はんぱ）な吾儘（わがまま）生活をする罰（ばち）だ。致方は無い。もとより見物人も役者の一人ではある。然し離（はな）れて独り見物は矢張寂（さび）しい。

終日懊惱（おうのう）。夕方庭をぶらぶら歩いた後、今にも降り出しそうな空の下に縁台（えんだい）に腰かけて、庭一ぱいに寂寥（さびしさ）を咲（さ）く月見草の冷たい黄色の花をや、久しく見入った。

（明治四十五年 六月五日）

堀川

一

新聞を見たら、今夜本郷中央会堂で呂昇の堀川がある。蓄音器では、耳にタコの出来る程鳥辺山（とりべやま）も聞いて居る。生（しょう）の声で呂昇の堀川は未だ聞かぬ。咽喉（のど）が悪いとて療治をして居ると云うが如何だろう、と好奇心も手伝うて、午後独歩（どっぽ）荻窪（おぎくぼ）停車場（すてえしょん）さして出かける。

デカが跟（つ）いて来る。ピンは一昨夜子を生んだので、隣家（となり）の前まで見送って、御免を蒙（こうむ）った。朝来の雨は止んで、日が出たが、田圃はまだ路が悪い。田植時（たうえどき）も近いので、何（ど）の田も生温（なまぬる）い水滴々と湛（た）え、短冊形（たんざくがた）の苗代は緑の嫩葉（わかば）の勢揃（せいぞろ）い美しく、一寸其上にころげて見たい様だ。泥（どろ）の楽人（がくじん）蛙の歌が両耳に溢（あふ）れる。甲州街道を北へ突切（つっき）って行く。大麦は蒞られ、小麦は少し色づき、馬鈴薯や甘藷（さつまいも）、草簞（くさほうき）などが黒

い土を彩（いろ）どって居る。其間を太（ふと）いはりがねを背負って二本ずつ並んで西から北東へ無作法（ぶさほう）に走って居るのが、東京電燈の電柱である。一部を赤く塗（ぬ）って、大きな黒文字で危険と書き、注意と書いてある。其様（そん）な危険なものなら、百姓の頭の上を引張（ひっぱ）らずと、地下でも通したらよさそうなものだ。

よく身投（みなげ）があるので其袂（たもと）に供養（くよう）の卒塔婆（そとば）が立って居る玉川上水の橋を渡って、田圃に下り、また坂を上って松友（しょうゆう）の杉林の間に行く。此処の杉林は見ものである。檣（ぼばしら）、電柱、五月鯉（さつきのこい）の棹（さお）などになるのが、奇麗に下枝を下（お）ろされ、殆んど本末の太さの差もなく、轟々（すくすく）と天を刺して居る。電燈会社は、此杉林を横断（おうだん）して更に電線を引きたがって居るが、松友の財産家が一万円出すと云う会社の提議（ていぎ）を刎（は）ねつけて応ぜぬので、手古摺（てこず）って居るそうである。

雨がはらはらと来た。ステッキ一本の余は、降ったり止んだりする危（あぶな）げな空を眺め眺め行く。田無街道を突切って、荻窪停車場に来た。

中野まで汽車。中野から電車。お茶の水で下りて、本郷中央会堂に往った。

二

何の為の慈善演芸会か知らぬが、中央会堂はほゞ一ぱいになって居た。演壇では、筒袖（つつそで）の少年が薩摩（さつま）琵琶（びわ）を弾（ひ）いて居た。凜々（りり）しくて好い。次ぎは呂昇の弟子の朝顔日記浜松小屋。まだ根から子供だ。其れから三曲（さんきょく）合奏（がっそう）の熊野（ゆや）。椅子にかけての琴、三絃（さみせん）は、見るにあぶなく、弾きにくくはあるまいかと思われた。三曲済（す）んで休憩（きゅうけい）になった。

九時二十分頃、呂昇が出て来て金屏風（きんびょうぶ）の前の見台（けんたい）に低頭（ていとう）した。連（つ）れ弾（びき）は弟子の昇華（しょうか）。二人共時候にふさわしい白地に太い黒横縞（くろよこしま）段だらの肩衣（かたぎぬ）を着て居る。有楽座で初めて中将姫を聞いた時よりヨリ若く今宵（こよい）は見えた。場内は一ぱいになった。頭の禿（は）げた相場師らしいのや、瀟洒（しょうしゃ）とした服装（なり）の若い紳士や、涼（すず）しく装うた庇髪（ひさしがみ）、皆呂昇の聴者（ききて）である。場所柄に頓着（とんじゃく）なく、しっかり頼みますぞ、など声をかける者がある。それを笑う声も起った。

呂昇は無頓着に三絃取って斜（しゃ）に構え、さっさと語り出した。咽喉（のど）をいためて療治（りょうじ）中だと云うに、相変らず美しい声である。少しは加減して居る様だが、調子に乗ると吾を忘れて声帯（せいたい）が震（ふる）うらしい。語り出しは、今少しだ。鳥辺山（とりべやま）は矢張好かった。灯影（ほかげ）明るい祇園町の夜、線香の煙（けぶり）絶々（たえだえ）の鳥辺山、二十一と十七、黒と紫とに包まれた美し

い若い男女が、美しい呂昇の声に乗ってさながら眼の前に踊（おど）った。お俊（しゅん）のさわりはますます好い。呂昇が堀川のお俊や、酒屋のお園や、壺坂（つぼさか）のお里を語るは、自己を其人に托（たく）するのだ。同じ様な上方女（かみがたおんな）、同じ様な気質（きだて）の女、芸と人とがピッタリ合うて居るのだ。悪かろう筈がない。呂昇が彼美しい声で語り出す美しい女性（によしょう）の魂（たましい）は、舞台のノラを見たり机の上の青鞥（せいとう）を読んだりする娘達に、如何様（どん）な印象（いんしょう）を与うるであろうか。余は見廻わした。直ぐ隣の腰かけに、水際立（みずぎわた）ってすっきりとした装（なり）をした十八九の庇髪（ひさしがみ）が三人並んで居る。二人は心を空（そら）にして呂昇の方を見入って居る。一人の金縁眼鏡には露が光って居る。日の若い単純（たんじゅん）な代（よ）も、複雑な今日も、根本（こんぽん）の人情に差違はない。唯真故新（ただしんゆえにしん）、古い芸術も新しい耳によく解せられるのである。

猿廻（さるまわ）しに来た。此は呂昇の柄（がら）にも無いし、連れ弾もまずいし、大隈（おおすみ）を聞いた耳には、無論物足らぬ。と思いつゝ、十数年前の歌舞伎座（かぶきざ）が不図眼の前に浮んだ。ぽっと鬢（かつら）をかぶった故人菊五郎の与次郎が、本物の猿を廻わしあぐんで、長い杖（つえ）で、それ立つのだ、それ辞義（じぎ）だと、己（わ）が物好きから舞台面の大切（たいせつ）な情味を散々に打壊（ぶちこわ）して居る。今の梅幸の栄三郎のお俊が、美しい顔に涙はなくて今にも吹き出しそうにして居る。故人片市の婆（ばあ）さんと、故人菊之助の伝兵衛が独（ひとり）神妙（しんみょう）にお婆さんになり伝兵衛になって舞台を締（し）めて居る。余は菊之助が好きだった。彼が真面目（まじめ）な努力の芸術は、若いながらも立派なものであった。彼は自身がする程の役には、何様（どん）な役でも身を入れて勤めた。養父（ようふ）も義弟も菊五郎や栄三郎寧（いっそ）寺島父子になって了（しも）うた堀川の芝居の此猿廻わしの切（きり）にも、菊之助のみは立派（りっぱ）な伝兵衛であった。最早彼は此世に居ない。片市も、菊五郎も居ない。

夥（おびただ）しい拍手が起った。吾に復（かえ）ると呂昇と昇華が演壇の上に平伏（ひれふ）して居た。

三

堀川は十時十五分に終わった。外に出ると、雨がぼとぼと落ちて居る。雨傘（あまがさ）と、懐中電燈の電池（でんち）を買って、電車で新宿に往った。追分（おいわけ）で下りて、停車場前の陸橋を渡ると、一台居合わせた車に乗った。若い車夫はさっさと挽（ひ）き出す。新町を出はなれると、甲州街道は真暗で、四辺（あたり）はひっそりして居た。余程降ったと見えて、道が大分悪い。「旦那は重うございますね。二十貫（かん）から御ありでしょう」「なまけるからね」「エ、如何（どう）しても体を烈（はげ）しく使（つか）うと、ふとりませんな。私ですか、私は十四貫しかありません」

車夫は市川の者、両親は果て、郷里の家は兄がもち、自身は今十二社（じ

ゆうにそう)に住んで、十三の男児(むすこ)を頭に子供が四人、六畳と二畳を三円五十銭で借り、かみさんは麻(あさ)つなぎの内職をして居る。「だから中々遊んで居られませんや」

烏山(からすやま)の口(くち)で下りて、代を払い、南へ切れ込んだ。

雨は止んで居る。懐中電燈の光を便(たよ)りに、真黒い藪蔭(やぶかげ)の路を通って、田圃(たんぼ)に下りた。夜目にも白い田の水。蛙(かわず)の音が雨の様だ。不凶東の空(そら)を見ると、大火事の様に空が焼けて居る。空に映(うつ)る東京の火光(あかり)である。見る見るすうと縮(ちぢ)み、またふっと伸びる。二百万の生霊(せいらい)が吐(つ)く息(いき)ひく息が焰(ほのお)になるのかと物凄(ものすご)い。田圃の行き止まりに小さな流れがある。其処(そこ)に一つ碧(あお)い光が居る。はっと思うと、ついと流れた。螢(ほたる)であった。田圃を上りきると、今度は南の空の根方(ねかた)が赤く焼けて居る。東京程にもないが、此は横浜の火光(あかり)であろう。村々は死んだ様に真黒(まっくろ)に寝て居る。都は魘(おそ)われた様に深夜(しんや)に火の息を吐いて居る。

(明治四十五年 六月十日)

ムロのおかみ

目籠(めかご)を背負(せお)って、ムロのおかみが自然薯(じねんじょ)を売りに来た。一本三銭宛で六本買う。十五銭に負(ま)けろと云うたら、それではこれが飲(の)めぬと、左の手で猪口(ちょこ)をこさえ、口にあてがって見せた。

ムロのおかみは酒が好きである。

ムロのおかみは近村(きんそん)の者である。夫婦はもと兄の家のムロに住んで居たので、今も「ムロ」さん「ムロ」さんと呼ばれて居る。夫婦して一(ひと)つコップから好きな酒を飲み合い、暫時(しばし)も離れぬので、一名鴛鴦(おし)の称がある。夫婦は農家の出だが、別に耕(たがや)す可き田畑も有(も)たぬ。自然薯でも、田螺(たにし)でも、鱒(どじょう)でも、終始他人(ひと)の山林田畑からとって来ては金に換(か)え、飯(めし)に換え、酒に換える。門松すら剪(き)って売ると云う評判がある。村に行わるゝ自然(しぜん)の不文律(ふぶんりつ)で、相応な家計(くらし)を立てゝ居る者が他人の櫟(くぬぎ)の枝一つ折っても由々敷(ゆゆしい)咎(とが)になるが、貧しい者は些(ちっと)やそとのものをとっても、大目に見られる。ムロの鴛鴦夫婦は、此(この)寛典(かんでん)の中に其理想的享樂生活(きょうらくせいかつ)を楽しんで居るのである。

午後到頭雨になった。蛙(かわず)の音が劣(おと)らじと雨に競(きそ)うてわめく。

夜皆寝て了うたあとで、母屋(おもや)の段落(だんおち)で二葉亭訳

「うき草」を読んだ。此処（ここ）は引越した年の秋、無理に北側（きたがわ）につぎ足した長五畳の板張（いたばり）で、一尺程段落になって居る。勾配（こうばい）がつかぬので、屋根は海鼠板（なまこいた）のトタンにし、爪立（つまだ）てば頭が間（つか）える天井（てんじょう）を張った。先には食堂にして居たので、此狭い船房（カビン）の様な棺の中の様な室（しつ）で、色々の人が余等と食を共にした。今は世に亡（な）き人々の記憶が、少なからず此処（ここ）に籠（こも）って居る。

夜は更（ふ）けた。余は「うき草」の巻を開（あ）けたまゝ、読むともなく、想うともなく、テェブルに凭（もた）れて居る。雨がほとほと頭上（ずじょう）のトタンをたゞく。ランプが「虫/慈」（じ）々ともえる。

うき草の訳者二葉亭は印度洋で死んだ。原著者のツルゲーネフは夙（とう）に死んだ。然しルヂンは生きて居る。ナタリーも生きて居る。アレキサンドラも、ビカソーフも、バンタレフスキーもワルインツオフも生きて居る。

人生短、芸術千古。

（明治四十二年 六月十五日）

田圃の簞笠

朝から驟雨性（しゅうせい）の雨がざあと降って来たり、緋（ほそ）い雨が煙ったり、蛞蝓（なめくじ）が縁に上り、井戸縁（ぶち）に黄な菌（きのこ）が生（は）えて、畳の上に居ても腹の底まで滲（し）み通りそうな湿（しめ）っぽい日。

今日も庭の百日紅（さるすべり）の梢に蛇が居る。何処かの杉の森で梟（ふくろ）がごろごろ咽（のど）を鳴らして居る。麦が収められて、緑暗い村々に、微（すこ）しの明るさを見せるのは卵色の栗の花である。

蛙の声の間々（あいあい）に、たぶたぶ、じゃぶじゃぶ田圃に響（おと）がする。見れば簞笠（みのかさ）がいくつも田に働いて居る。遠く見れば水戸様の饌（ぜん）にのりそうな農人形が、膝まで泥に踏み込んで、柄の長い馬鍬（まが）を泥に打込んで曳（えい）やっとな、また打込んで曳やっとなひく。他所では馬に引かす犁（すき）を重そうに人間が引張って、牛か馬の様に泥水（どろみず）の中を踏み込み踏み込みひいて行く。労力（ろうりょく）其ものゝ画姿を見る様で、気の毒すぎて馬鹿馬鹿しく、腹が立つ。労働は好いが、何故（なぜ）牛馬の働（はたらき）までせねばならぬ乎。

然し千歳村は約千町歩の面積（めんせき）の内、田はやっと六十町歩に過ぎぬ。田の労（ろう）は多くない。馬を使う程でもない、と皆が云う。此れでも昔は馬も居たそうだが、今は馬を飼（か）うも不経済（ふけいざい）で、馬を使うより人力がまだまだましと皆が云う。共同して馬を飼うたらと云ったこともあるが共同が中々行われぬ。

馬も一利一害である。余の字（あざ）には、二三年來二十七戸の内馬

を飼う家が三軒出来た。内二軒は男の子が不足なので、東京からの下肥（しもごえ）ひきに馬を飼う事を思い立ったのである。然し石山の馬は、口綱をとって行く主人と調子が合わなかった為、一寸した阪路を下る車に主人は脾腹（ひばら）と太腿（ふともも）をうたせ、二月も寝る程の怪我をした。寺本の馬は、新宿で電車で驚いて、盲目の按摩（あんま）を二人轢（ひ）き倒し、大分の面倒を惹起（ひきおこ）した。其隣の馬は、節句の遊びに乗った親類の村蔵と云う男を刎（は）ね落して、肩骨（かたぼね）を挫（くじ）き、接骨医（せっこつゐ）に二月も通わねばならぬ様の怪我をさせ、其為一家の予算に狂いが来て、予定の結婚が半歳も延ばされた。

だから馬も考えものだ、と皆が言う。
(明治四十五年 六月十七日)

つゆ霽れ

梅雨中とは云いながら、此十日余思わしい日の目も見ず、畳（たたみ）を拭くと新しい雑巾（ぞうきん）が黴（かび）で真黒になった。今日はからりと霽れて、歓（よろこ）ばしい日光の代（よ）になった。待ちかねた様に蟬（せみ）が高音（たかね）をあげる。ほやりほやり水蒸気立つ土には樹影（こかげ）黒々と落ち、処女（おとめ）の袖（そで）の様に青々と晴れた空には、夏雲が白く光る。戸、障子、窓の限りを開放（あけはな）して存分に日光と風とを容（い）れる。

今日の晴を待ちつけた農家は、小踊（こおど）りして、麦うちをはじめた。東でもばたばた、西でもばたばた。東の辰さんの家では、形（なり）は小さいが気前の好い男振りの好い岩公が音頭とりで、「人里（ひとざと）はなれた三軒屋でも、ソレ、住めば都の風が吹（ふ）うくう、ドッコイ」歌声（うたごえ）賑（にぎ）やかにばたばた。北の金（かね）さん宅（とこ）は口の重い人達ばかり、家族中で歌の一つも歌おうと云う稻公（いねこう）は砲兵に、春っ子は小学校に往って居るので、爺（おやじ）、長男長女、三男の四人（よったり）、歌は歌わぬかわり長男の音公が時々「ヨウ」と懸声に勢（いきおい）をつけて、規則正しくばたばた。西も東も南も北も勇ましい歓喜の勝鬨（かちどき）。聞くからに心（むね）が躍（おど）る。

つゆ霽（は）れやたうたうたうと麦（むぎ）を撲（う）つ
(明治四十三年 六月二十九日)

有たぬ者

新宿八王子間の電車線路工事が始まって、大勢の土方（どかた）が入り込み、村は連日（れんじつ）戒厳令の下（もと）にでも住む様に競々（きょうきょう）として居る。

天下無敵の強者と云えば、土方人足は其一であろう。彼等は頂天（ちやうてん）立地（りっち）何の恐るゝ処もない赤裸（あかはだか）の英雄である、原人（げんじん）である。彼等は元来裸である。何ものも有（も）たない。有たないから失うことが出来ない。失うものがないから、彼等は

恐るゝことを知らぬ。生存競争の戦闘（たたかい）に於て、彼等は常に寄手（よせて）である。唯進んで撃（う）ち而して取ればよいのである。守ると云うは、有つ者の事である。守ると云うは、已に其第一歩に於て敗北（はいぼく）である。

世には有たぬ程強い事はない。有たぬ者は、すべてのものを有つのである。彼等には明日は無い。昨日も無い。唯今日がある、刹那（せつな）がある。彼等は神を恐れぬ。王者（おうしゃ）を恐れぬ。名聞（みょうもん）を思わぬ。彼等は失うべき富もない。愛（おし）む可き家族も無い。彼等は其れより以下に落つ可き何等の位置も有たない。国家か、何ものぞ。法律か、何の關係ぞ。習慣（しゅうかん）、何の束縛（そくばく）ぞ。彼等は胃の命令と、腸（ちょう）の法律と、皮膚（ひふ）の要求と、舌頭の指揮と、生殖器の催促（さいそく）の外、何の縛（しば）らるゝ処がない。彼等は自然力其ものである。一触（いっしょく）してタイタニックを沈めた冰山である。華麗（かれい）な羅馬の文明を鉄蹄（てつてい）に蹂躪（じゅうりん）した北狄（ほくてき）蛮人である。一切の作為（さくい）文明（ぶんめい）は、彼等の前に灰の如く消えて了う。

土を穿ち、土を移し、土を平（な）らし、土を積む。彼等は工兵の蟻（あり）である。同じ土に仕事する者でも、農は蚯蚓（みみず）である。蚯蚓は蟻を恐れる。

有つ者にとっては、有たぬ者程恐ろしい者は無い。土方人足の村で恐れられるも尤（もつとも）である。然しながら何ものも有たぬ彼等も、まだ生命（いのち）と云うものを有って居る。彼等は生命を惜（おし）む。此れが彼等の弱点である。有たずに強い彼等も、有てば弱くなる虞（おそれ）がある。世にも恐ろしい者は、其生命さえも惜まぬのみか、如何なる条件をもって往っても妥協（だきょう）の望がない人々である。彼等は何ものを有っても満足せぬ。彼等は全宇宙（ぜんうちゅう）を吾有（わがもの）にしなければ満足せぬ。寧（むしろ）吾を全宇宙に与えなければ満足せぬ。其一切を獲ん為には、有てる一切を捨（す）てゝ了う位は何でもない。耶蘇も仏陀（ぶつだ）も斯恐ろしい人達である。

（明治四十五年 七月十三日）

食われるもの

奥の座敷で日課を書いて居ると、縁に蹲（うづくま）って居た猫のトラがひらりと地に飛び下りた。またひらり縁に飛び上ったのを見ると、蜥蜴（とかげ）を啣（くわ）えて居る。窃（そ）と下ろした。蜥蜴は死んだのか、気絶したのか、少しも動かぬ。トラはわんぐりと喰（く）いはじめた。まだ生きて居ると見えて、蜥蜴の尾（お）が右左に揺（うご）いた。トラは遽（あわ）てず、眼を閉（と）じ、頭を傾（かし）げて、悠々（ゆうゆう）と味わい味わい食って居る。小さな豹（ひょう）か虎かを見て居る様で、凄（すご）い。蜥蜴の体は最早トラの胃の中にあるに、切れて落ちた鋼鉄色（こうてついろ）の尾の一片は、小さな一疋の虫かなんぞの様にぐるっと巻（ま）いたりほどけたりして居る。トラめは其れも鶉呑（うのみ）にして了うた。蜥蜴のカタミは何も無い。日は相変らず昭々（しょうしよ

う)と照らして居る。地球は平気で駛(はし)って居る。木の葉一つソヨがぬ。トラは蜥蜴を食ってしまって、世にも無邪氣(むじゃき)な顔をして、眼を閉じて眠って了うた。

昨日は庭で青白い螟蛉(あおむし)を褐色(かちいろ)のフウ虫二疋で螫(さ)し殺して吸うて居るのを見た。

一昨日(おととい)は畑を歩いて、苦しい蛙(かわず)の鳴き声を聞いた。ドウしても蛇(へび)にかゝった蛙の鳴き声と思って見まわすと、果然(はたして)二尺ばかりの山かゞしが小さな蛙の足を啣(くわ)えて居る。余は土塊(つちくれ)を投げつけた。山かゞしは蛇の中でも精悍(せいかん)なやつである。蛙の腿(もも)を啣えながら鎌首(かまくび)をたてゝ逃げて行く。竹ぎれを取って戻(もど)ると、玉蜀黍(とうもろこし)の畑に見えなくなつた了うた。

優勝(ゆうしょう)劣敗(れっぱい)は天理である。弱肉強食は自然である。宇宙は生命(いのち)のとりやりである。然し強いものゝ上に尚強いものがあり、弱いものゝ下に尚弱いものがある。而して一番弱いものが一番強いものに勝つ場合もある。顕微鏡下(けんびきょうか)に辛(かろ)うじて見得る一細菌(さいきん)が、神の子だイヤ神だと傲(おご)る人間を容易に殺して了うではないか。畢竟(ひっきょう)宇宙は大円(だいえん)。生命は共通。強い者も弱い。弱い者も強い。死ぬるものが生き、生きるものが死に、勝つ者が負け、負ける者が勝ち、食う者が食われ、食われるものも却て食う。般若心経(はんになしんきょう)に所謂、不増不減不生不滅不垢不浄、宇宙の本体は正に此である。

然し我等は人間である。差別界(しゃべつかい)に住んで居る。煩惱(ぼんのう)もある。愚痴(ぐち)もある。我等は精神的に生きんと欲する如く、肉体の命も惜しい。吾情を以て他を推す時、犠牲(ぎせい)の叫(さけ)びは聞きづらい。

ダァキンの兄弟分ワレース博士は、蛇にのまるゝ蛙(かわず)は苦しい処ではない、一種の温味(おんみ)にうっとりとなつて快感(かいかん)を以て蛇の喉(のど)を下るのだ、と云うた。大役(たいえき)小志(しょうし)の志賀氏は、旅順戦役を描(か)いて、決死の兵士は精神的(せいしんてき)高調(こうちょう)に入つて、所謂苦痛なるものを大(たい)して感じない、と云つて居る。如何にも道理で、また事実さもあると思つゝ。

然し我々は人間である。犠牲の声は聞きづらい。

(明治四十五年 七月二十日)

蝸

今年の自家(うち)の麦は、大麦も小麦も言語道断の不作だ。仔細は斯様(こう)である。昨秋の麦蒔(むぎまき)に馬糞(ばふん)を基肥(もとごえ)に使つた。其れが世田ヶ谷騎兵聯隊から持って来た新しい馬糞で、官馬の事だから馬が食つてまだよく消化(しょうか)しない燕麦(えんば)

く)が多量に雑(まじ)って居た。総じて新しい肥料はよくないものだが、自家(うち)には堆肥(たいひ)の用意がない為に、抛所(よんどころ)なく新しい馬糞に過燐酸(かりんさん)を混じて使った。麦が生(は)えると同時に、馬糞の中の燕麦が生えた。麦が伸(の)びると、燕麦も伸びた。燕麦は麦より強い。麦に追肥(おいごえ)をやると、燕麦が勝手に吸(す)ってしまってドンドン生長する。麦畑(むぎばた)が一面燕麦の畑の様になった。非常な手数をかけて一々燕麦をぬいたが、最早(もう)肝腎(かんじん)の麦は燕麦に負けて其(その)穂(ほ)は瘦(や)せこけたものになって居た。肥料が肥料を食ってしまったのである。世には斯様(こん)な事が沢山ある。

トルストイの遺著(いちょ)の中、英訳になった劇「生(い)ける屍(しかばね)」を読む。トルストイ化した「イナック、ア、デン」と云う様なものだ。「暗黒(あんこく)の力(ちから)」程の力は無いが、捨てられぬ作である。

縁の籐椅子(とういす)に腰かけて右のドラマを読んで居ると、トルストイ翁の顔やら家族の人々の顔やらが眼の前に浮ぶ。今日(きょう)は七月一日、丁度六年前ヤスナヤ、ポリヤナに居た頃である。曇(くも)ったり晴(は)れたりする空(そら)、上(のぼ)ったり下(おさ)ったりする丘(おか)、緑が茂って、小麦が熟(う)れて、余の今の周囲も其時に似(に)て居る。

最早はつきりとは文字の見えぬ本を膝(ひざ)にのせて、先刻(さっき)から音もなく降って居た織(ほそ)い雨の其まゝ融(と)けた蒼(あお)い夕靄(ゆうもや)を眺めて居ると、忽ち向うの蒼い杉の森から、「リン、――リン、リン」

白銀(はくぎん)の鈴(りん)を振る様な鋭い蝸(ひぐらし)の音が響いた。

(明治四十五年 七月一日)

夏の一日

眼をさますと、真裸(まっぱだか)で寝て居る。外では最早蝸(ひぐらし)が鳴いて居る。蚊帳外(かやそと)の暗い隅では、蚊が呟々(うんうん)唸(うな)って居る。匆(は)ね起きて時計を見れば、五時に十分前。戸をくると、櫟林(くぬぎばやし)から朝日の金光線が射(さ)して居る。

顔を洗うと、真裸で芝生に飛び下り、磨(と)ぎ立ての鎌(かま)で芝を刈りはじめる。雨の様な露だ。草苺(くさかり)は露の間(ま)の事。ざくり、ざくり、ザク、ザク。面白い様に刈れる。

足を洗(あら)って、体(からだ)を拭いて、上ると八時。近来朝飯ぬきで、十時に牛乳(ちち)一合。

今日は少し日課を書いた。

朝食(あさめし)の午餐は赤の飯だ。今日は細君の誕生日(たんじょう

び)である。昨日何か手に隠して持って来たのを、開けて見たら白髪(しらが)が三本だった。彼女にも白髪が生(は)えたのだ。余は十四五から五本や十本の白髪はあった。兎に角部分的には最早(もう)偕白髪(ともしらが)と云う域(いき)に達した訳である。

主婦(しゅふ)の誕生日だが、赤の飯に豆腐汁で、鰯(いわし)の一尾も無い。午前(午前)に果樹園(かじゅえん)を歩いて居たら、水蜜(みづみつ)の早生(わせ)が五つばかり熟(じゅく)して居るのを見つけた。取りあえず午餐(ランチ)の食卓(しょくたく)に上(のぼ)す。時(とき)にとっての好(よ)いお祝(いわ)い。

今日は夏(なつ)になって以来(いらい)の暑(あつ)い日(ひ)だ。午後(ごご)は到頭(とうとう)室内(しやうない)九十度(こじゅうど)に上(あ)った。千歳村(せんざいむら)の生活(せいかつ)をはじめて六年(ろくにん)、九十度(こじゅうど)は今日(けふ)が初(はじ)めである。戸(と)と云(い)う戸(と)、障子(しょうじ)と云(い)う障子(しょうじ)、窓(まど)と云(い)う窓(まど)を残(のこ)らず開放(あけはな)し、母屋(おもや)は仕切(しきり)の唐紙(からかみ)障子(しょうじ)を一切(いっけい)取(と)り払(は)いて、六畳(むさむ)二室板(にむろ)の間(ま)ぶつ通(と)しの一(ひと)間(ま)にした。飲(の)むと汗(あせ)になると知(し)りつゝ、たまりかね(かね)て冷(つめ)たい麦湯(むぎゆ)を飲(の)む、サイダ(サイダ)を飲(の)む。飲(の)む片端(かたはし)からぼろぼろ汗(あせ)にな(な)って流(なが)れる。犬(いぬ)のデカ(デカ)もピン(ピン)も、猫(ねこ)のトラ(トラ)も、櫨(かき)の木蔭(こかげ)にぐったり寝(ね)て居(い)た。

あまり暑(あつ)いから髪(かみ)でも苴(く)ろうかと、座敷(ざしき)の縁(えり)に胡踞(あぐら)か(か)く。バリカン(バリカン)が駄目(だめ)なので、剪(は)さみで細君(こずみ)が三分(さんぶん)に苴(く)ってくれ(くれ)た。今朝(けさ)苴(く)った芝(しば)が、最早(もう)枯(か)れて白(しろ)く乾(かわ)いて居(い)る。北海道(ほくかいど)の牧場(ぼくじやう)の様(よう)です(す)ね、と細君(こずみ)が曰(い)う。主人(あるじ)は芝(しば)を苴(く)り、妻(つま)は主人(あるじ)の髪(かみ)を苴(く)る。芝(しば)の心(こゝろ)は知らぬ(しらない)が主人(あるじ)は好(よ)い心地(こゝろ)にな(な)った。

建具(たてぐ)取(と)り払(は)いて食堂(しょくどう)が濶(ひろ)くな(な)った上(かみ)に、風(かぜ)が立(た)ったので、晚餐(ばんぱん)の卓(た)くは涼(すず)しか(しか)った。飯(い)を食(た)いなが(なが)ら、唯(と)見(み)ると、夕日(ゆふひ)の残(のこ)る葭簀(よしず)の二枚(ふたまい)屏風(びやうぶ)に南天(なんてん)の黒(くろ)い影(かげ)が躍(おど)って居(い)る。而(そう)して其(その)葭簀(よしず)を透(す)か(か)して大(おほ)きな芭蕉(ばしやう)の緑(ろく)の葉(は)がはたはた揺(うご)いて居(い)る。

自動車(自動車)の響(おと)が青山(あおやま)街(まち)道(みち)にしたか(か)と思う(おも)うと、東京(とうきやう)のN君(にんくん)外(ほか)三名(さんめい)が甲斐(かい)の山(やま)の写(しゃ)真(しん)を撮(と)り(り)に来(き)たのだ(のだ)。時刻(じこく)が晚(おそ)くて駄目(だめ)だ(だ)ったが、無理(無理)に二枚(ふたまい)程(ほど)撮(と)って帰(かえ)った。

日(ひ)が傾(かたむ)くとソヨ吹(ふ)きそめた南風(みなみ)が、夜(よ)に入(い)ると共(とも)に水(みづ)の流(なが)るゝ如(ごと)く吹(ふ)き入(い)るので、ランプ(ランプ)をつ(つ)けて置(お)くのが骨(こ)だ(だ)った。母屋(おもや)の縁(えり)に胡座(あぐら)か(か)いて、身(み)も魂(たま)も空(から)虚(こ)にして涼風(すずかぜ)に浸(ひた)る。ランプ(ランプ)の光射(あかりさ)す程(ほど)は、櫨(かき)、ふさ(ふさ)もじ、小(こ)さな孟宗竹(もうそうちく)の葉(は)が一(ひと)々(つ)々(つ)緑玉(ろくぎよ)に光(あ)って、ヒラヒラキラキラ躍(おど)って居(い)る。光(あかり)の及(およ)ばぬ(ぬ)あたり(あたり)は、墨画(すみえ)にか(か)いた様(よう)な黒(くろ)い葉(は)が、千(ち)も万(ま)も躍(おど)って居(い)る。木立(こだち)の間(ま)には白(しろ)けた夏(なつ)の夜(よ)の空(そら)が流(なが)れ、其(その)処(そこ)にはまた数限(かずかぎ)も無(な)い星(ほし)がチラチラ瞬(またた)いて居(い)る。庭(にわ)の暗(くら)い方(かた)から、甘(あま)い香(か)や強(つよ)い刺戟性(しげきせい)の香(か)が弗(ふ)々(ふつ)と流(なが)れて来(き)る。山梔子(くちなし)、山百合(やまひら)の香(か)である。「夏(なつ)の夜(よ)や蚊(か)を疵(きず)に(に)して五百両(ごひゃくりやう)」これ(これ)で蚊(か)さえ居(い)な(な)かつたら(たら)。

今日誤ってもいだ烏瓜（からすうり）を刳（く）って細君が鶴子の為に瓜燈籠（うりどうろう）をつくり、帆かけ舟を彫（ほ）って縁につり下げ、しばしば風に吹き消（け）されながら、小さな蠟燭をともした。緑色に透（す）き徹（とお）った小天地、白い帆かけ舟が一つ中にともした生命（いのち）の火のつゞく限りいつまでもと其表（おもて）を駛（はし）って居る。

（明治四十五年 七月十八日）

明治天皇崩御の前後

一

明治四十五年七月二十一日。

日曜だが、起きぬけに二時間の芝苳（しばかり）。

天皇陛下御不例（ごふれい）の発表があった。わざわざ発表がある程だ。御重態（ごじゅうたい）の程も察せられる。

真黒い雲が今我等の頭上（ずじょう）を覆（おお）うて居る。

*

午後二時過ぎ、雷鳴、電光、沛然（はいぜん）と降雨があった。少し雹（ひょう）が雑（まじ）って居た。

月番から回章（かいしょう）で、二十七日から二十九日まで、「総郷上（あがり正月）のふれが来た。中日が総出で道路の草苳りだ。回章の月番の名に、見馴（みな）れた寺本の七蔵の名はなくて、息子（むすこ）の喜三郎の名が見える。七蔵さんは此六日に亡（な）くなったのである。変った月番の名を見て、一寸（ちよっと）哀愁（あいしゅう）を覚えた。

二

七月二十二日。

土用三郎と云うに、昨日の夕立以来、今日も曇（くも）って涼しいことである。

白桔梗（しろききょう）、桔梗の花が五つ六つ。白っぽけた撫子（なでしこ）の花が二つ三つ。芝生（しばふ）の何処かで、「虫+慈」（じじじ）と虫が鳴いて居る。

寂（さび）しい。

見る見る小さな雨がほとほと落ちて来た。

寂しい。

夏さびし桔梗（きちかう）の花五つ六つ小雨（こさめ）まじりに虫の声して

三

七月三十日。

例（れい）によって芝苳り。終って、桃の木の下で水蜜桃（すいみつとう）の立喰（たちぐい）。

大きなプリマウス種の雄鶏（おんどり）が、鶏舎の外で死んで居た。羽毛が其処（そこ）此処（ここ）にちらかって居る。昨夜鶏舎の戸をしめる時誤（あやま）って雄鶏をしめ出したので、夜中鼬（いたち）に襲（おそ）われたのである。随分死の苦しみをしたであろうに、家の者はぐっすり寝込（ねこ）んで些（ちっと）も知らなかった。昨秋以来鼬の難（なん）にかゝることこゝに五たびだ。前度に懲（こ）りて、鶏舎の締（しま）りを嚴重にしたが、外にしめ出しては詮方（しかた）が無い。梨（なし）の木の下に埋葬。

午後東京から来た学生の一人が、天皇陛下今暁（こんぎょう）一時四十三分崩御（ほうぎょ）あらせられたと云う事を告げた。

陛下崩御——其れは御重態（ごじゅうたい）の報伝わって以来万更（まんざら）思い掛けぬ事ではなかったが。

園内（えんない）を歩いて陛下の御一生を思うた。

東の方を見ると、空も喪装（もそう）をしたのかと思われて、墨色（すみいろ）の雲が東京の空をうち覆（おお）うて居る。暮れ方になって降り出した。

四

七月三十一日。

鬱陶（うつとう）しく、物悲しい日。

新聞は皆黒縁（くろぶち）だ。不図新聞の一面に「睦仁（むつひと）」の二字を見つけた。下に「先帝御手跡」とある。孝明天皇の御筆かと思うたのは一瞬時（いっしゅんじ）、陛下は已に先帝とならせられたのであった。新帝陛下の御踐祚（ごせんそ）があった。明治と云う年号（ねんごう）は、昨日限り「大正（たいしょう）」と改められる、と云う事である。

陛下が崩御になれば年号も更（かわ）る。其れを知らぬではないが、余は明治と云う年号は永久につゞくものであるかの様に感じて居た。余は明治元年十月の生れである。即ち明治天皇陛下が即位式（そくいしき）を挙げ玉うた年、初めて京都から東京に行幸（みゆき）あった其月東京を西南に距（さ）る三百里、薩摩に近い肥後葦北（あしきた）の水俣（みなまた）と云う村に生れたのである。余は明治の齡（よわい）を吾齡（ごれい）と思い馴（な）れ、明治と同年だと誇（ほこ）りもし、恥じもして居た。

陛下の崩御（ほうぎょ）は明治史の巻を閉（と）じた。明治が大正となって、余は吾生涯が中断（ちゅうだん）されたかの様に感じた。明治天皇が余の半生（はんせい）を持って往（い）っておしまいになったかの様に感じた。

物哀（ものかな）しい日。田圃向うに飴屋（あめや）が吹く笛の一声（ひとこえ）長く響いて、腸（はらわた）にしみ入る様だ。

五

八月一日。

月の朔（ついたち）で、八幡様に神官が来て、お神酒（みき）が上（あ）がる。諒闇（りょうあん）中の御遠慮で、今日は太鼓（たいこ）も鳴らなかった。

今日から五日間お経（きょう）をたてる、と云う言いつぎが来た。先帝の御冥福（ごめいふく）の為。

鶏小屋（とりごや）に大きな青大将が入って、模型卵（もけいらん）をのんだ、と日傭（ひよう）のおかみが知らして来た。往って見ると、五尺もある青大将が喉元（のどもと）を膨（ふく）らして、そこらをのたうち廻（まわ）って居る。卵の積りで陶物（やきもの）の模型卵を呑んで、苦しがつて居るのだ。折から来合わして居たT君が、尻尾（しっぽ）をつまんで鶏小屋から引ずり出すと、余が竹竿（たけざお）でたゞき殺した。竹で死体を扱（こ）いたら、ペロリと血だらけの模型卵を吐（は）いた。此頃一向卵が出来ぬと思ったら、此先生が毎日召上（めしあが）ってお出でたのだ。青大将の死骸（しがい）は芥溜（ごみため）に捨てた。少し経（た）って見たら、如何（どう）したのか見えなかった。復活（ふっかつ）して逃げたのかも知れぬ。

六

八月二日。

紅蜀葵（こうしょくき）の花が咲いた。

甲州玉蜀黍（とうもろこし）をもぎ、煮（に）たり焼いたりして食う。世の中に斯様（こん）なうまいものがあるかと思う。田園生活も此では中々やめられぬ。

今日は土用中ながら薄寒（うすさむ）い日であった。朝は六十二三度しかなかった。尽日（じんじつ）北の風が吹いて、時々冷（つめ）たい織（ほそ）い雨がほとほと落ちて、見ゆる限りの青葉が白い裏（うら）をかえして南に靡（なび）き、寂（さび）しいうら哀（かな）しい日であった。

今日は鶏小屋にほゞ鼯（いたち）と見まごうばかりの大鼠が居た。

七

八月八日。

八月に入って四五日、フランネルを着（き）る様な日が続いた。小雨（こさめ）が降る。雲がかぶさる。北から冷たい風が吹く。例年九月に鳴く百舌鳥（もず）が無暗に鳴いたりした。薄い搔卷（かいまき）一つでは足らず、毛布を出す夜もあった。

今日は久し振（ぶ）りに晴れた。空には一片の雲なく、日は晶々（あかあか）として美しく照りながら、寒暖計は八十二三度を越（こ）えず、涼しい南風（みなみ）が朝から晩まで水の流るゝ様に小止（おやみ）なく吹いた。颯々（さっさつ）と鳴る庭の松。かさかさ鳴る畑の玉蜀黍（とうもろこし）。ざわざわと鳴る田川の畔（くろ）の青萱（あおかや）。見れば、眼に入る緑は皆動いて居る。庭の桔梗（ききょう）の紫揺（うご）き、雁来紅（けいとう）の葉の紅戦（そよ）ぎ、撫子（なでしこ）の淡紅靡（なび）き、向日葵（ひまわり）の黄頷（うなず）き、夏萩の臙脂（えんじ）

乱れ、蝉の声、虫の音（ね）も風につれて震（ふる）えた。夕日傾く頃となれば、風はますます涼しく、樹影（こかげ）は黒く芝生に跳（おど）った。

「秋来ぬと眼にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」。風の音に驚くばかりかは、さやかに眼に見えて立つ秋の姿（すがた）である。

昨夜は雁声（がんせい）を聞いた。

今朝向うの杉の森に「ツクツクウシ、ツクツクウシ」と云うほのかな秋蝉（せみ）の声を聞いた。

暦（こよみ）を見たら、今日が立秋である。

八

八月十五日。

此頃のくせで、起き出る頃は、毎（いつ）も満目（まんもく）の霧（きり）。雨だなどと思うと、朝飯食ってしまう頃からからりと霽（は）れて、申分なき秋暑（しゅうしょ）になる。

隣の大豆畑に群（むら）がったカナブンの大軍が、大豆の葉をば食い尽（つく）して、今度は自家（うち）の畑に侵入（しんにゅう）した。起きぬけに、夫婦して蕈（むしろ）を畑にひろげ、枝豆や苺（いちご）や果樹に群がるカナブンを其上に振（ふる）い落して、石油の空罐（あきかん）にぶちあげ、五時から八時過ぎまでかゝって、カナブンの約五升を擒（とりこ）にし、熱湯を浴（あび）せて殺した。でもまだ十分の一もとれない。

あまり美事（みごと）の出来だからと云うて、廻沢（めぐりさわ）から大きな水瓜（すいか）唯一個かついで売りに来た。緑地に黒縞（くろしま）のある洋種の丸水瓜（まるすいか）である。重量三貫五百目、三十五銭は高くない。井戸に冷（ひ）やして、午後切って食う。味も好かった。

一月おくれの盆で、墓地が賑（にぎ）やかである。細君が鶴子の為に母屋（おもや）の小さな床に茄子馬（なすうま）をかざり、黒い喪章（もしょう）をつけたおもちゃの国旗をかざり、ほおずきやら烏瓜（からすうり）やら小さな栗やら色々供物（くもつ）をならべて、于蘭盆（うらぼん）の遊びをさせた。

風鈴（ふうりん）の短冊（たんざく）が先日の風に飛ばされたので、先帝の「星のとぶ影のみ見えて夏の夜も更け行く空はさびしかりけり」の歌を書いて下げた。西行（さいぎょう）でも詠（よ）みそうな歌だ。

九

八月十六日。

隣の家鴨（あひる）が二羽迷い込んだ。雌（めす）は捕えて渡したが、雄が床（ゆか）の下深く逃げ込んで、ドウしてもつかまらない。隣の息子（むすこ）が雌を連れて来て、刮々（くわくくわく）云わしたら、雄はひとりでに床の下から出て来て、難なく捉（つか）まった。今更の様だが女の力。

夕方縁（えん）の籐椅子（とういす）に腰かけて、静に夕景色を味う。芍（かり）あと青い芝生も、庭中の花と云う花も蔭（かげ）に入り、月下香の香が高く一庭に薫（くん）ずる。金の鎌の様な月が、時々雲に入ったり出たり。南方に淡（あわ）い銀河が流れる。星もちらほら出て居る。村々は最早（もう）黒う暮れて、時々眩（まぶ）しい火光（あかり）がぱつと射す。船橋の方には、先帝（せんてい）の御為に上げるのか、哀々（あいあい）とした念仏の音が長く曳（ひ）いて聞こえる。庭ではスイッチョが鳴く。蟋蟀（きりぎりす）が鳴く。夜と云うに、蟬の一種が鳴く。隣の林にはガチャガチャが鳴く。

寂（さび）しい涼しい初秋の夜。

御大葬の夜

明治天皇大葬（たいそう）の夜である。

七時五十分、母屋（おもや）の六畳を掃（は）いて、清（きよ）い白布をかけた長方形の大きな低い卓子（つくえ）を東向きに直した。上には、秋草の花を活（い）けた小花瓶を右左に置き、正面には楕円形（だえんけい）の小さな鏡を立て、其前に火を入れた青磁（せいじ）の香炉、紫の香包を傍（そば）に置いた。いさゝかランプの心を捻（ねじ）ると、卓子の上の物皆明るく、心も自（おの）ずからあらたまる。家族一同手を膝（ひざ）に、息をのんで控（ひか）えた。

柱時計の短針（たんしん）が八時を指（さ）すか指さぬに、ドオ………ン！

待ち設（もう）けても今更人の心魂を駭（おどろ）かす大砲の音が、家をも我等の全身をも揺（ゆ）り撼（うご）かして響いた。

今靈輜（れいじゆ）宮城を出でさせられるのだ。

主人（あるじ）は東に向い一拝して香を焚（た）き、再拝して退（さが）った。妻がつゞいて再拝して香を焚き、三拝して退いた。七歳（ななつ）の鶴子も焼香（しょうこう）した。最後に婢（おんな）も香を焚いて、東を拝した。

余が家の奉送（ほうそう）は終わった。

*

余は提灯（ちょうちん）ともして、妻と唯二人門を出た。曇った暗（くら）い夜である。

八幡下の田圃まで往って東を見る。田圃向うの黒い村を鮮（あざ）やかに劃（しき）って、東の空は月の出の様に明るい。何千何万の電燈（でんとう）、瓦斯（がす）、松明（たいまつ）が、彼夜の中の昼を作（な）して居るのであろう。見て居ると、其夥（おびただ）しい明光（あかり）が、さす息引く息であるかの様に伸（の）びたり縮んだりする。其明りの中から時々電（いなずま）の様な光（ひかり）がぴかりと騰（あが）る。

「何の光だろう？」

「写真を撮（と）るマグネシウムの光でしょうか」
「否（いや）、弔砲の閃光（ひかり）かも知れん」

先程から引つゞいて、大きな心臓（しんぞう）の鼓動の如く、正（ただ）しい時を隔（へだ）て、弔砲が響（ひび）いて居る。――あゝ鐘が鳴って居る。南のは東覚院（とうがくいん）、宝性寺（ほうしょうじ）、安穩寺（あんのおんじ）、北のは――寺、――寺、東にも、西にも、おのがじし然も申合わせた様に、我君眠（ねむ）りませ、永久（とこしえ）に眠りませ、と哀音長く鳴り連れて居る。二つの響はあたかも余等の胸（むね）の響に通うた、砲声の雄叫（おたけ）び、鐘声の悲泣（ひきゅう）。

都も鄙（ひな）も押並（おしな）べて黒きを被（き）る斯大なる哀（かなしみ）の夜に、余等は茫然（ぼうぜん）と東の方を眺めて立った。生温（なまあた）かい夜風がそよぐ。稻の香（か）がする。

「行（い）きなさるかね」半丁ばかり北の方で突然人声（ひとごえ）がした。「エ、些（ちっと）ンべ行って見べいと思（も）って」

田圃道（たんぼみち）を東の方へ人の足音がした。やがてパチパチと拍手（かしわで）の音が闇（やみ）に響く。

轎車（じゅしゃ）は今何（ど）の辺を過ぎさせられるのであろう？
（大正元年 九月十三日）

東の京西の京 （明治天皇の御始終）

西なる京（きやう）に君は生（あ）れましき。

西なる京に生れ玉へる君はしも、東に覇府（はふ）ありてより幾百年、唯東へ東へと代々（よよ）の帝（みかど）父祖（ふそ）の帝の念じ玉ひし東征の矢竹心（やたけごころ）を心として、白羽二重に緋（ひ）の袴（はかま）、五歳（いつつ）六歳（むつつ）の御遊（ぎよいう）にも、侍女（つかへをみな）を馬にして、東下（あづまくた）りと宣（の）らしつゝ、御所の廊下を駈（か）り玉ひき。

御父祖の夢（ゆめ）は、君が代（よ）に現（うつつ）となりつ。君は維新のおん帝、御十七の若帝（わかみかど）、御東帯に御冠（みかんむり）、御板輿（おんいたごし）に打乗らせ、天下取ったる公卿（くげ）将卒に前後左右を護（まも）らして、錦の御旗を五十三駅（つぐ）の雄風に翻（ひるが）へし、東下りを果（はた）し玉ひぬ。

西の京より移り来て、東の京に君はしも四十五年住み玉ひぬ。東の京に住む君は、西なる京なつかしと思（おぼ）さぬにてはあらざりき。父の帝の眠ります西の京、其処（そこ）に生（あ）れまし十六まで育（そだ）ち玉ひし西の京、君に忘れぬ西の京。せめて暑中（しよちう）は西の京へでも、侍臣斯く申せば、御気色（みけしき）かはり、宣（のたま）ひけら

く「朕（ちん）西京を嫌（きら）ふと思ふか。否（いな）、朕は西の京が大好きなり。さりながら、朕、東の京を去らば、誰か日本の政（まつりごと）を見むものぞ？」

大政（おほまつりごと）しげくして、西なる京へ君はしも、御夢（みゆめ）ならでは御幸（みゆき）なく、比叡（ひえい）の朝は霞（かす）む共、鴨（かも）の夕風涼しくも、禁苑（きんゑん）の月冴（さ）ゆとても、鞍馬の山に雪降るも、御所の猿辻（さるつじ）猿の頬（ほ）に朝日は照れど、烏（からす）啼（な）く椋（むく）の梢（こずゑ）に日は入れど、君は来まさず。君が御名（みな）得（え）し祐（さち）の井の、井（ゐど）のほとりの常磐木（ときはぎ）や、落葉木（らくえふぼく）の若葉（わかば）して、青葉（あをば）となりて、落葉（おちば）して、年（とし）また年と空宮（くうきう）に年は遷（うつ）りぬ四十五（しじふいつ）。

四十五年の御代（みよ）長く、事稠（しげ）き代の御安息（みやす）無く、六十路（むそぢ）あまり一年（ひととせ）の御顔（みかお）に寄する年の波、御魂（みたま）は慕（した）ふ西の京、吾事終へつと嘘（うそむ）きて、君逝（ゆ）きましぬ東京に。

東下り、京上り、往来（ゆきき）に果つるおん旅や、御跡（おんあと）印（しる）す駅路（うまやぢ）の繰りひろげたる絵巻物（ゑまきもの）、今巻きかへす時は来ぬ。時こそ来つれ、生涯の御戦闘（みいくさ）終（を）へて凱旋（がいせん）の。時こそ来つれ、生涯の御勤勞（みつとめ）果てゝ御安息（おんやす）の。

曩昔（そのかみ）の東下りの御板輿（おんいたごし）を白き柝車（きうしゃ）に乗り換へて、今こそ君は浄土（きよつち）の西の京へと還（かへ）り玉はめ。

（大正元年 九月十三日）

乃木大将夫妻自刃

九月十五日、御大葬（ごたいそう）の記事を見るべく新聞を披（ひら）くと、忽（たちまち）初号活字が眼を射た。

乃木大将夫妻の自殺

余は息（いき）を飲んで、眼を数行の記事に走らした。

「尤だ、無理は無い、尤だ」

斯く呟（つぶや）きつゝ、余は新聞を顔に打掩（うちおお）うた。

*

日清戦争中、山地中將が分捕（ぶんどり）の高価の毛皮の外套を乃木少將に贈ったら、少將は、傷病兵（しょうびょうへい）にやってしまった。此事を新聞で読んだのが、乃木（のぎ）希典（まれすけ）に余のインテレストを持つ様になった最初であった。其れから明治廿九年乃木中將が台湾（たいわん）総督（そうとく）となる時、母堂が渡台の御暇乞に参内（さ

んだい)して、皇后陛下の御問に対し、姥(ばば)は台湾の土にならん為、悴(せがれ)の先途(せんど)を見届けん為に台湾に参(まい)ります、と御答え申上げたと云う記事は、また深く余の心に滲(し)みた。余は此母子が好(す)きになった。明治三十四年中、ゴルドン將軍伝を書く時、余はゴルドンを描(えが)く其原稿紙上に乃木將軍の面影(おもかげ)がちらりちらりと徂(い)ったり徠(き)たりするを禁じ得なかつた。

縁は異(い)なもので、ゴルドン伝を書いた翌々年「寄生木(やどりぎ)」の主人公から突然「寄生木」著作の事を委托(いたく)された。恩人たる乃木將軍の為めにと云う彼の辞(じ)であった。余は例に無く乗地(のりじ)になって引受けた。結果が小説寄生木である。

小説寄生木は、該書(がいしょ)の巻頭にも断(ことわ)って置いた通り、主人公にして原著者なる「篠原良平」の小笠原善平が「寄生木」で、厳密(げんみつ)なる意味に於て余の「寄生木」では無い。寄生木の乃木大將軍夫妻は、篠原良平の乃木大將軍夫妻で、余の乃木大將夫妻では無い。余は厳に原文に拠(よ)って、如何なる場合にも寸毫(すんごう)も余の粉飾(ふんしょく)塗抹(とまつ)を加えなかつた。そこで、寄生木は、南部(なんぶ)の山中から駈(か)け出した十六歳の少年が仙台で將軍の応接間(おうせつま)の椅子に先ず腰かけて「馬鹿ッ！」と大喝(だいかつ)されてから、二十八歳の休職士官が失意失恋故山に悶死(もんし)するまで、其単純な眼に映(えい)じた第一印象の実録である。固より將軍夫妻は良平の恩人である為に、温かい感謝の膜(まく)を隔(へだ)てゝ見たところもある。然し彼は徹頭徹尾(てつとうてつび)単純にして偽(いつわ)ることを得為(えせ)ぬ男で、且如何なる場合にも見且感ずるを得る自然の芸術家であったことを忘れてはならぬ。余は寄生木によって、乃木大將夫妻をヨリ近く識り得た。

篠原良平は「寄生木」の原稿を余に托し置いて、明治四十一年の秋悶死した。而して、恩人乃木將軍が其名を書いてくれた墓碣(ぼかつ)が故山に建てられた明治四十二年十二月小説寄生木が世に出た。即ち將軍は幕下(ばくか)の彼が為め死後の名を石に書き、彼は恩人の為に生前(せいぜん)の断片的記伝を紙の上に立てた訳(わけ)である。

余は寄生木を乃木大將に贈呈(そうてい)しなかつた。然し伝聞(でんぶん)する処によれば、將軍夫妻は読んだそう。將軍は巻中にある某の学資金(がくしきん)は某大佐に渡したかと夫人に問い、夫人が渡しましたと答えた事、夫人は通読し終つて、著者は一度も材料の為に訪われもしなかつたに、よくも斯く精確(せいかく)に書かれた、と云われた事、を聞いた。精確な筈(はず)だ、記憶の好(い)い本人良平が命(いのち)がけで書いたのである。余は將軍夫妻の感想を聞く機会を有(も)たなかつた。然しながら寄生木を読んだ將軍夫妻は、生前(せいぜん)顔を合わすれば棒立(ぼうだち)に立ってよくは口もきけず、幼年学校でも士官学校でも学科はなまけ、病氣ばかりして、晩年には殊に謀叛氣(むほんぎ)を見せて、恩義を弁(わきま)えたらしくもなかつた篠原良平が、案外深い感謝あり、理解あり、同情あり、而して個性あり、痛切な苦悶あり、要

するに一個真面目の靈魂（れいこん）であったことを今更の様に発見したのであろう。兎に角篠原良平の死と「寄生木」とが、寂（さび）しい將軍の晩年に於てまた一の慰藉（いしゃ）となったことは、察（さっ）するに難からぬ。篠原良平が「寄生木」を遺（のこ）した目的の一は達せられたのである。

余は篠原良平の晩年に於て、劍を抛（なげう）つ可く彼に勧告し、彼を乃木將軍から奪（うば）う可く多少の努力をして、彼が悶死の一因を作ったのと、学習院に於て余の為可（すべ）かりし演説が某の注意に因（よ）り院長たる將軍の言によって差止（さしと）められたことを聞いた外、乃木將軍とは一回の対面もせず、一通の書信の往復も為（し）なかった。茫茫（ぼうぼう）たる宇宙に於て、大将夫妻と余をいさゝか繫（つな）ぐものがあるならば、其は「寄生木」である。

然しながら寄生木は、篠原良平の寄生木で、余の寄生木では無い。唯將軍と余の間に一の縁（えん）を作ったに過ぎぬ。乃木將軍夫妻程死花（しにばな）が咲（さ）いた人々は近来（きんらい）絶無（ぜつむ）と云ってよい。大将夫妻は実に日本全国民の崇拜（すうはい）愛慕（あいぼ）の的（まと）となった。乃木文学は一時に山をなして出た。斯上（このうえ）蛇足（だそく）を加うる要はないかも知れぬ。然し寄生木によりて一種の縁を將軍夫妻に作った余には、また余相応（そうおう）の義務が感ぜられる。此義務は余にとって不快な義務では無い。余は如何（いか）なる形（かたち）に於てかこの義務を果したいと思うて居る。

コスモス

今日は夏を憶（おも）い出す様な日だった。午後寒暖計が六十八度に上った。白い蝶（ちょう）が出て舞う。蠅（はえ）が活動する。蟬（せみ）さえ一しきり鳴いた。

今はコスモスの真盛（まさかり）である。濃紅、紅、淡紅、白、庭にも、園にも、畑にも、掃溜（はきだめ）の傍（はた）にも、惜気もなく心（しん）を見せて思いのまゝに咲き盛（さか）って居る。誰か見に来ればよいと思うが、終日誰も来（こ）ぬ。唯主人のみ黄金（こがね）の雨と降る暖かい秋の日を浴（あ）びて、存分に色彩の饗応に預かる。

たまたま屋敷下（やしきした）を荷車挽いて通りかゝった辰（たつ）爺（じい）さんが、「花車（だし）の様だね」とほめて通った。

庭内も、芙蓉、萩、蓮華（れんげ）つゝじは下葉（したば）から色づき、梅桜は大抵落葉し、ドウダン先ず紅に照り初め、落霜紅（うめもどき）は赤く、木瓜（ぼけ）の実（み）は黄に、松はますます緑に、山茶花（さざんか）は香を、コスモスは色を庭に満たして、実に何とも云えぬ好い時候だ。

夕方屋敷の南端にある櫛（けやき）の切株（きりかぶ）に上って眺める。日は何時（いつ）しか甲州の山に落ちて、山は紫に匂（にお）うて居る。白茶色になって来た田圃（たんぼ）にも、白くなった小川の堤（つつみ）の尾花（おばな）にも夕日が光って、眼には見る南村北落の夕けぶり。鳥

啼き、小鳥鳴き、秋（あき）静（しずか）に今日も過ぎて行く。東京の方を見ると、臙脂色（えんじいろ）の空（そら）に煙が幾条（いくすじ）も真直に上って居る。一番南のが、一昨日火薬が爆発（ばくはつ）して二十余名を殺傷（さっしょう）した日黒の火薬庫の煙だ。

（明治四十四年 十月二十三日）

秋さびし

今日（きょう）はさびしい日である。

ダリヤの園を通ると、二尺あまりの茶色（ちゃいろ）の紐（ひも）が動いて居る、と見たは蛇だった。蜥蜴（とかげ）の様な細（ほそ）い頭をあげて、黒い針（はり）の様な舌（した）をペラペラさして居る。殺そうか殺すまいかと躊躇（ちゅうちょ）して見て居る内に、彼は直ぐ其処（そこ）にある径（けい）一寸ばかりの穴（あな）に這入（はい）りかけた。見る中に吸わるゝ様にズルズルと辻（すべ）り込んで了うた。

園内を歩くと、蝉（せみ）のヌケ殻（がら）が幾個（いくつ）も落ちて居る。昨夜は室内で、小さなものゝ臨終（りんじゅう）の呻吟（うめき）の様なかすかな鳴声（なきごえ）を聞いたが、今朝（けさ）見ればオルガンの上に弱（よわ）りはてたスイッチョが居た。彼は未だ死に得ない。而（そう）して死に得る迄（まで）は鳴かねばならぬのである。

自然は老いて行く。座敷（ざしき）の前を蜂（はち）が一疋歩いて行く。両羽（りょうはね）をつまんでも、螫（さ）そうともせぬ。何に弱ってか、彼は飛（と）ぶ力ももたぬのである。そっと地に下ろしたら、また芝生の方へそろそろ歩いて行く。

今日はさびしい日である。

午後は曇（くも）って泣き出しそうな日であった。

午後になって、いやに蒸暑（むしあつ）い空気（くうき）が湛（たた）えた。懶（ものう）い自然の気を感じて、眼ざとい鶴子が昼寝（ひるね）した。掃き溜（はら）には、犬のデカがぐたりと寝て居る。芝生には、猫（ねこ）のトラが眠（ねむ）って居る。

南から風が吹く。暖かい事は六月の風の様で、目を瞑（つぶ）って聞くと、冬も深い凧（こがらし）の響（おと）がする。

今日はさびしい日である。

今は午後四時である。雲を漏（も）れて、西日（にしび）の光がぱっと射（さ）して来た。散りかゝった満庭（まんてい）のコスモスや、咲きかゝった菊や、残る紅の葉鶏頭（はげいとう）や、蜂虻（はちあぶ）の群がる金剛纂（やつで）の白い大きな花や、ぼうっと黄を含んだ芝生や、下葉（したは）の褐色（かっしょく）に凋（しお）れて乾（かわ）いた萩や白

樺や落葉松や、皆斯夕日に寂（さび）しく栄（は）えて居る。鮮やかであるが、泣いて居る。美（うる）わしいが、寂しい。

今日はさびしい日である。

（大正元年 十月二十八日）

展望台に上りて

上

余の書窓（しょそう）から西に眺（なが）むる甲斐（かい）の山脈（さんみゃく）を破（は）して緑色濃（こ）き近村（きんそん）の松の梢（こずえ）に、何時の程からか紅白染分（そめわけ）の旗が翻（ひるがえ）った。機動演習（きどうえんしゅう）の目標（もくひょう）かと思うたら、其れは京王電鉄（けいおうでんてつ）が沿線繁栄策の一として、ゆくゆく東京市の寺院墓地を移す為めに買収（ばいしゅう）しはじめた敷地（しきち）二十万坪を劃（しき）る目標の一つであった。

京王電鉄調布上高井戸間の線路（せんろ）工事（こうじ）がはじまって、土方（どかた）人夫（にんぷ）が大勢（おおぜい）入り込み、鏡花君の風流線にある様な騒ぎが起ったのは、夏もまだ浅い程の事だった。娘が二人辱（はずか）しめられ、村中の若い女は震え上り、年頃（としごろ）の娘をもつ親は急いで東京に奉公に出すやら、無銭飲食を恐れて急に酒樽を隠すやら、土方が真昼中甲州街道をまだ禁菓（きんか）を喰（く）わぬアダム同様無禪（むふんどし）の真裸（まっぱだか）で横行濶歩、夜は何（ど）の様な家へでも入込むので、未だ曾て戸じまりをしたことがない片眼（かため）婆（ばあ）さんのあばら家まで、遽（あわ）てゝかけ金（がね）よ釘（くぎ）よと騒いだりした。其れも工程の抄取（はかど）ると共に、何時（いつ）しか他所（よそ）に流れて往って了うた。やがて起ったのが、東京の寺院墓地移転用敷地廿万坪買収の一件である。

京王電鉄も金が無い。東京の寺や墓地でも引張（ひっぱ）って来て少しは電鉄沿線の景気をつけると共に、買った敷地を売りつけて一儲（ひともう）けする、此は京王の考としてさもありそうな話である。田舎はもとより金が無い。比較的小作料の低廉な此辺の大地主は、地所を荷厄介（にやっかい）にして居る。また大きな地主で些（ちと）派手（はで）にやって居る者に借金が無い者は殆（ほと）んどない。二十万坪買収は、金に渴（かわ）き切った其或人々にとって、早田（ひでりだ）に夕立（ゆうだち）の福音（ふくいん）であった。財政整理の必要に迫られて居ると知られた某々の有力者は、電鉄の先棒となって、盛（さかん）に仲間（なかま）を造りはじめた。金は無論欲（ほ）しい。脅嚇（おどかし）も勿論利（き）く。二十万坪の内八万坪、五十三名の地主の内十九名は、売渡（うりわたし）承諾（しょうだく）の契約書（けいやくしょ）に調印してしまった。踟蹰（ちちゅう）する者もあった。余はある人に斯（こ）う云うた、不用の地所があるなら兎も角、恰好（かっこう）の代地があったら格別、でなければ農が土を手放（てばな）すは魚（うお）の水に離（はな）れるようなものだ、金なんか直ぐ泡（あわ）の様に消えて了う、今更農をやめて転業す

るなぞは十が十墮落（だらく）の原（もと）だ。

売らぬと云う側（がわ）は、人数（にんず）で関係地主の総数（そうすう）五十三人中の三十名、坪数で二十万坪の十二万坪を占めて居る。彼等の云い分はざっと斯様（こう）だ。東京が段々（だんだん）西へ寄って来て、豊多摩（とよたま）荏原（えばら）の諸郡は追々市外宅地や工場等の場所になり、以前専（もっぱ）ら穀作（こくさく）と養蚕（ようさん）でやって居た北多摩郡が豊多摩荏原に代（かわ）って蔬菜（そさい）や園芸品（えんげいひん）を作る様になり、土地の価（あたい）は年々上って来て居る。然るに北多摩郡でも最（もっと）も東京に近い千歳村の僅か五百五十町歩の畑地（はたち）の中、地味（ちみ）も便利も屈指（くっし）の六十余町歩、即ち畑地の一割強を不毛（ふもう）の寺院墓地にして了的のは、惜しいものだ。殊に寺院墓地の如き陰気なものに來られては、陽気な人間は來なくなり、多くなるものは農作物の大敵たる鳥雀の類ばかりだ。廿万坪の内には宅地もある。貧乏鬮（びんぼうくじ）を引当（ひきあ）てた者は、祖先伝來の家屋敷や畑をすて、代地（だいち）と云えば近くて十丁以内にはなく、他郷に出るか、地所が不足では農をよして他に転業しなければならぬ者もあろう。千歳村五百五十戸の中、小作が六割にも上って居る。大面積（だいめんせき）の寺院墓地が出來て耕地減少の結果、小作料は自然騰貴（とうき）する。小作料の騰貴はまだ可（よ）いが、中には小作地が不足して住み馴（な）れた村にも住めなくなり、東京に流れ込んだり、悪くすると法律の罪人（ざいにん）が出來たりする。それから寺院墓地は免租地（めんそち）だから、結局村税の負担が増加する。何も千歳村の活気ある耕地を潰（つぶ）さず共、電車で五分間乃至十分も西に走れば、適當の山林地などが沢山あって、其（その）辺（へん）の者は墓地を歓迎して居る。其方（そち）へ行（い）けばよいじゃないか。反対の理由は、ざっと右の通りだ。尤も中に多少の魂胆（こんたん）もあろうが、大部分は本当に土に生き土に死ぬ自作農の土に対する愛着からである。変化を喜び刺戟（しげき）に生きる都会人には、土に対する本当の農の執着の意味は中々解（げ）せない。真（しん）の農にとって、土はたゞの財産ではない、生命（いのち）其のものである。祖先伝來一切の生命の蓄積して居る土は、其一塊（いっかい）も肉の一片血（ち）の一滴（いってき）である。農から土を奪（うば）うは、靈魂から肉体を奪うのである。換言すれば死ねと云うのである。農を斯（この）土から彼（かの）土に移すのは、靈魂の宿換（やどがえ）を命ずるのである。其多くは死ぬるのである。農も死ななければならぬ場合はある。然し其（それ）は軽々（かるがる）しく断ずべき事ではない。一は田中正造翁に面識（めんしき）なく谷中村（やなかむら）を見ないからでもあろうが、余は従來（じゅうらい）谷中村民のあまり執念深いのを寧ろ氣障（きざ）に思うて居た。六年の田舎住居、多少は百姓の真似（まね）もして見て、土に対する農の心理の幾分を解（げ）しはじめて見ると、余は否（いや）でも曩昔（むかし）の非（ひ）を認（みと）めずには居られぬ。即ち千歳村の墓地問題の如きも、京王電鉄会社や大地主等にとっては利益問題だが、純農者にとっては取りも直さぬ死活問題であるのだ。

然るに京王電鉄は、一方先棒（さきぼう）の村内有力者某々等をして頗

る猛烈に運動せしむると共に、一方田夫野人何事をか仕出来（しでか）さんと高（たか）を括（くく）って高圧的（こうあつてき）手段（しゅだん）に出た。即ち関係地主の過半数は反対であるにも関せず、会社は村長の奥印（おくいん）をもって東京府庁に宛（あ）てゝ墓地新設予定地御臨検願を出して了う。霊場敷地展望台を畑の真中（まんなか）に持て来て建てる。果ては、云う事を聴かねば土地収用法を適用するまでの事だ、電鉄の手で買えば一反五百七十円から五百五十円までゝ買うが、土地収用法がものを云えば一反三百円か高くても三百五十円は越（こ）さない、其（それ）でも好（よ）いか、好ければ今に見ろ。斯様（こん）な調子でのしかゝって来た。

売る者は売れ、俺等（おいら）は売らぬ、と澄（す）まして居た反対側（がわ）の人達も、流石（さすが）に怒（おこ）り出した。腰弁当、提灯持参、草鞋（わらじ）がけの運動がはじまった。村会に向って、墓地（ぼち）排斥（はいせき）の決議を促す申請書を出す。村会に於てはまた、大多数を以て墓地排斥の建議案を通過するぞと意気込（いきご）む。それから連判（れんぱん）の陳情書を東京府庁へ出すとて余にも村民の一人として賛成を求めて来た。昨朝の事である。

下

今日（きょう）余は女兒と三疋の犬とを連れて、柿を給田（きゅうでん）に買うべく出かけた。薄曇りした晩秋の寂しい午後である。

品川堀に沿うて北へ歩（あゆ）む。昨日連判状を持って来た仲間（なかま）の一人が、かみさんと甘藷（さつま）を掘って居る。

「此処（ここ）らも予定地（よていち）の内ですか」

「え、彼（あの）道路からずっとなんですよ。彼処（あすこ）に旗（はた）が立ってますだ」

成程余が書窓（しょそう）から此頃常に見る旗と同じ紅白染分の旗が、路傍の松の梢（こずえ）にヒラヒラして居る。東北の方にも見える。彼（あの）旗が敗北の白旗（しろはた）に変らなかつたなら、此夫婦は来年此処で甘藷を掘ることは出来ぬのである。

余は麦畑に踏込む犬を叱（しか）り、道草（みちくさ）摘（つ）む女兒を促（うなが）し、品川堀に沿うて北へ行く。路傍（みちばた）の尾花は霜枯れて、かさかさ鳴って居る。丁度（ちょうど）七年前の此月である。余は妻と此（この）世（よ）の住家（すみか）を探（さ）がして、東京から歩いて千歳村に来た。而して丁度其日の夕方に、疲（つか）れた足を曳（ひ）きずって、正に此路を通って甲州街道に出たのであった。夕日の残る枯尾花（かれおばな）、何処（どこ）やらに鳴く夕鴉（ゆうがらす）の声も、いとどさすらえ人の感を深くし、余も妻も唯黙（だま）って歩いた。我儕（われら）の行衛は何処（どこ）に落ちつくのであろう？ 余等は各自（てんで）に斯く案じた。余は一個の浮浪（ふろう）書生（しょせい）、筆一本あれば、住居は天幕（てんまく）でも済（す）む自由の身である。それでさえ埒（ねぐら）はなれた小鳥の悲哀（かなしみ）は、其時ヒシと身に浸（し）みた。土から生れて土を食（く）い土を耕（たがや）して終

に土になる土の獣（けもの）の農が、土を奪われ土から追われた時の心は如何（どう）であろう！

品川堀が西へ曲る点（ところ）に来た。丸太を組んだ高櫓（たかやぐら）が畑中に突立って居る。上には紅白の幕を張って、回向院の太鼓櫓（たいこやぐら）を見るようだ。北表面（きたおもて）へ廻（まわ）ると、墨黒々と筆太（ふでぶと）に

霊場敷地展望台

と洋紙（ようし）に書いて張ったのが、少し破れて風にばたばたして居る。品川堀を渡って、展望台の方へ行くと、下の畑で鉢巻（はちまき）をした禿頭（はげ）の爺（じい）さんが堆肥（つくて）の桶（おけ）を担（かつ）いで、媳（よめ）か娘か一人の女と若い男と三人して麦蒔（むぎまき）をして居る。爺さんは桶を下（お）ろし、鉢巻をとって、目礼（もくれい）した。此は昨夕村会議員の一人と訪ねて来た爺さんである。其宅地も畑も所有地全部買収地（ばいしゅうち）の真中（まんなか）に取こめられ、仮令（たとい）収用法（しゅうようほう）の適用が出来ぬとしても、もし唯一人売らぬとなれば袋（ふくろ）の鼠（ねずみ）の如く出口をふさがれるし、売るとなれば一寸の土も残らず渡して去らねばならぬので、最初から非常に憂惧（ゆうぐ）し、殆（ほとん）ど仕事も手につかず、昨日訪（た）ずねて来た時もオドオドした斯老人の容子は余の心（むね）を傷（いた）ましめた。今其畑に来て見れば、直ぐ隣の畑には爺さんを追い払う云わば敵の展望台があたりを睥睨（へいげい）して立って居る。爺さんは昼は其望台の蔭で畑打ち、夜は望台の夢に魘（おそ）わるゝことであろう。爺さんの寿命を日々（にちにち）夜々（やや）に縮（ちぢ）めつゝあるものは、斯展望台である。余は爺さんに目礼して、展望台の立つ隣の畑に往った。茶（ちゃ）と桑（くわ）と二方を劃（しき）った畑の一部を無遠慮に踏み固めて、棕櫚繩（しゅろなわ）素繩（すなわ）で丸太（まるた）をからげ組み立てた十数間の高櫓（たかやぐら）に人は居なかった。余は上ろうか上るまいかと躊躇（ちちゅう）したが、終（つい）に女兒（じょじ）と犬を下に残して片手欄（てすり）を握りつゝ酒樽の薦（こも）を敷いた楷梯（はしご）を上った。北へ、折れて西へ、折れて南へ、三重（じゅう）の楷梯を上って漸く頂上に達した。中々高い。頂（いただき）は八分板を並べ、丈夫に床（ゆか）をかいてある。

余は思わず嗟嘆（さたん）して見廻（みま）わした。好い見晴らしだ。武蔵野の此辺では、中々斯程の展望所は無い。望台を中心としてほゞ大円形（だいえんけい）をなした畑地は、一寸程になった麦の緑縞（みどりじま）、甘藷（さつま）を掘ったあとの紫がかった黒土、べったり緑青（ろくしょう）をなすった大根畑、明るい緑色の白菜畑（はくさいばたけ）、白っぽい黄色の晩陸稻（おくおかぼ）、入乱れて八方に展開し、其周囲には霜（しも）に染（そ）みた雑木林、人家を包む檜（かし）木立（こだち）、丈高い宮の赤松などが遠くなり近くなりくるり取巻（とりま）いて居る。北を見ると、最早（もう）鉄軌（れえる）を敷いた電鉄の線路が、烏山の木立の間に見え隠れ、此方（こなた）のまだ枕木も敷かぬ部分には工夫が五六人

鶴嘴（つるはし）を振（ふ）り上げて居る。西を見れば、茶褐色に焦（こが）れた雑木山の向うに、濃い黛色（たいしよく）の低い山が横長く出没して居る。多摩川（たまがわ）の西岸を縁（ふち）どる所謂多摩の横山で、川は見えぬが流れの筋（すじ）は分明（ぶんみょう）に指さされる。少し西北には、青梅（あおめ）から多摩川上流の山々が淡く見える。西南の方は、富士山も大山も曇った空に潜（ひそ）んで見えない。唯藍色（あいいろ）の雲の間から、弱い弱い日脚（ひあし）が唯一筋斜（はす）に落ちて居る。

やゝ久しく吾を忘れて眺（なが）め入った余は、今京王電鉄が建てた墓地敷地展望台の上に立って居ることに気がついた。余は更に目をあげてあたりを見廻わした。此展望台を中心として、二十万坪六十余町歩の耕地宅地を包囲して、南に東に北に西に規則正しく間隔（かんかく）を置いて高く樹梢に翻って居る十数流の紅白旗は、戦わずして已に勝を宣する占領旗（せんりょうき）かと疑われ、中央に突立ってあたり見下（みお）ろす展望台は、蠢爾（しゅんじ）としてこゝに耕す人と其住家（すみか）とを呑（の）んでかゝって威嚇（いかく）して居る様で、余は此展望台に立つのが恥かしくなった。

雪空の様に曇りつゝ日は早や暮（くる）るに間（ま）もなくなった。何処（どこ）かに鴉（からす）が鳴く。余はさながら不測の運命に魘（おそ）われて悄然（しょうぜん）として農夫の顔其まゝに言（ものい）わぬ哀愁に満ちた自然の面影にやるせなき哀感（あいかん）を誘（さそ）われて、独望台（ぼうだい）にさまざまの事を想うた。都会と田舎の此争は、如何に解決せらるゝであろう乎。京王は終に勝つであろうか。村は負けるであろうか。資本の吾儘（わがまま）が通るであろう乎。労力の嘆（なげ）きが聴かるゝであろう乎。一年両度緑（みどり）になり黄（き）になり命（いのち）を与うる斯二十万坪の活（い）きた土は、終古（しゅうこ）死の国とならねばならぬのであろうか。今憂（うれい）の重荷（おもに）を負（お）うて直下（すぐした）に働いて居る彼爺さん達、彼処（あち）此処（こち）に鳶色に焦（こが）れた樗（けやき）の下檜（かし）の木蔭に平和を夢みて居る幾個（いくつ）の茅舎（ぼうしゃ）、其等（それら）は所謂文明の手に蠅（はえ）の如く蠶虫（みのむし）の宿（やど）の如く払いのけられねばならぬのであろうか。数で云うたら唯（たった）二十万坪の土地、喜憂（きゆう）を繫（か）くる人と戸数と、都の場末の一町内にも足らぬが、大なる人情の眼は唯統計（とうけい）を見るであろうか。東京は帝都（ていと）、寸土（すんど）寸金（すんきん）、生が盛（さか）れば死は退（の）かねばならぬ。寺も移らねばなるまい。墓地も移らずばなるまい。然しながら死にたる骨（ほね）は、死にたる地（ち）に安（やす）んずべきではあるまい乎。寺と墓地とは縁もゆかりもない千歳村の此耕さるべき部分の外に行き得る場所はないのであろう乎。都会が頭なら、田舎は臟腑（ぞうふ）ではあるまい乎。頭が臟腑を食ったなら、終（つい）には頭の最後ではあるまい乎。田舎はもとより都会の恩（おん）を被（き）る。然しながら都会を養い、都会のあらゆる不浄を運（はこ）び去り、新しい生命（いのち）と元気を都会に注（そそ）ぐ大自然の役目を勤むる田舎は、都会に貢献する所がないのであろう乎。都会が田舎の意志と感情を無視して吾儘（わがまま）を通すなら、其れこそ本当の無理である。無理は分離である。分

離は死である。都会と田舎は一体（いったい）である。農が濫（みだり）に土を離るゝの日は農の死である。都（みやこ）が田舎を潰（つぶ）す日は、都自身の滅亡（めつぼう）である。

彼旗を撤（てっ）し、此望台を毀（こぼ）ち、今自然も愁（うれ）うる秋暮の物悲しきが上に憂愁不安の気雲の如く覆（おお）うて居る斯千歳村に、雲霽れてうらうらと日の光（ひかり）射（さ）す復活の春を齎（もた）らすを得ば、其時こそ京王の電鉄も都と田舎を繋（つな）ぐ愛の連鎖、温（あたた）かい血の通（かよ）う脈管（みゃくかん）となるを得るであろう。

（大正元年 十一月八日）

暮秋の日

竜田姫（たつたひめ）のうっとり眼を細（ほそ）くし、またぱっと目を瞪（みひ）らく様な、曇りつ照りつ寂しい暮秋の日。

暦（こよみ）の冬は五六日前に立った。霜はまだ二朝（ふたあさ）三朝（みあさ）、しかも軽いのみしか降（ふ）らない。但先月の嵐が累（るい）をなしたのか、庭園の百日紅、桜、梅、沙羅双樹（さらそうじゅ）、桃、李、白樺、樺、厚朴（ほう）、木蓮の類の落葉樹は、大抵葉を振うて裸になり、柿やトキワカエデの木の下には、美しい潤（ひろ）い落葉（おちば）が落葉の上に重（かさ）なって厚い茵（しとね）を敷いて居る。菊はまだ褪（うつろ）わずして狂うものは狂いそめ、小菊、紺菊の類は、園の此処彼処にさまざまな色を見せ、紅白の茶山花（さざんか）は枝上地上に咲きこぼれて居る。ドウダン、ヤマモミジ、一行寺、大盃、イタヤ、ハツシモ、など云う類（たぐい）の楓（かえで）や銀杏（いちょう）は、深く浅く鮮やかにまた渋（しぶ）く、紅、黄、褐（かち）、茜（あかね）、紫さまざまの色に出で、気の重い常緑木（ときわぎ）や気軽な裸木（はだかぎ）の間を彩（いろ）どる。常緑木の中でも、松や杉は青々とした葉の下に黄ばんだ古葉（ふるは）を簇々（むらむら）と垂（た）れて、自ら新にす可く一吹（いっすい）の風を待って居る。菊、茶山花の香を含んで酒の様に濃い空気を吸いつゝ、余はさながら虻（あぶ）の様に、庭から園、園から畑と徘徊（はいかい）する。庭を歩く時、足下に落葉がかさと鳴る。梅の小枝に妙な物がと目をとめて見ると、蛙（かわず）の干物（ひもの）が突刺してある。此はイタズラ小僧の百舌鳥（もず）めが食料に干（ほ）して置（お）いて其まゝ置き忘れたのである。園を歩く時、大半は種になったコスモスの梢（こずえ）に咲き残った紅白の花が三つ四つ淋（さび）しく迎える。畑には最早大麦小麦が寸余に生えて居る。大根漬菜が青々とまだ盛んな生气（せいぎ）を見せて居る。籬（かき）の外の畑では、まだ晩蒔（おそまき）の麦を蒔いて居る。向うの田圃では、ザクリザクリ鎌の音をさして晩稻（おくて）を蒔（か）って居る。

今は午後四時である。先程からぱっと射（さ）して色と云う色を栄（は）えさして居た日は、雲の瞼（まぶた）の下に隠れて、眼に見る限りの物は沈鬱（ちんうつ）な相（そう）をとった。松の下の大分黄ばんだ芝生に立って、墓地の銀杏（いちょう）を見る。さまで大きくもあらぬ徑（けい）

六寸程の比較的若木（わかぎ）であるが、魚の背骨（せぼね）の一方を削った様に枝は皆北方へ出て、南へは唯一本しか出て居ない。南の枝にも梢にも、残る葉はなくて、黄葉（こうよう）は唯北方に密集して居る。其裸になった梢に、嘴（はし）の大きな瘦鴉（やせがらす）が一羽とまって居る。永く永くとまって居たが、尾羽で一つ梢をうって啞々（ああ）と鳴きさまに飛び立った。黄いろい蝶の舞う様に銀杏の葉がはらはらと飄（ひるが）える。

廻沢の杉森（すぎもり）のあなたを、葬式が通ると見えて、「南無阿弥陀ア仏、南無阿弥陀ア仏」单调な念仏（ねんぶつ）が泣く様に響いて来る。
(大正元年 十一月十日)

二つの幻影

北風が寒く、冬らしい日。

然し東京附近で冬を云々するのは烏澁（おこ）がましい。如何に寒いと云っても、大地が始終真白（まっしろ）になって居るではなし、少し日あたりのよい風よけのある所では、寒中（かんちゅう）にも小松菜（こまつな）が青々（あおあお）して、崖（がけ）の蔭では堇（すみれ）や蒲公英（たんぽぽ）が二月に咲いたりするのを見るのは、珍らしくない。

北へ行かねば、冬の心地は分からぬ。せめて奥州、北海道、樺太（かばふと）、乃至（ないし）大陸の露西亞（ろしあ）とか西比利亞とかでなければ、本当の冬の趣味は分からぬ。秋日々（ひび）に老いて近づく冬の氣息が一刻々々に身に響く頃の一種の恐怖（おそれ）、死に先だつ深い絶望と悲哀は、東京附近の浅薄な冬の真似では到底分からぬ。東京附近の冬は、せいぜい半死半生である。冬が本当の死である国土でなければ、秋の暮の淋し味も、また春の復活の喜も十分には分からぬ。

「おゝ神よ、吾をしてこの春に会うを得せしめ給うを感謝す」と畑で祈ると云う露西亞の老農の心もちには、中々東京附近の百姓はなれぬ。

否（いや）でも応（おう）でも境遇に我等は支配される。我々の邦（くに）では一切の事が兎角徹底せぬわけである。

*

午後散歩、田圃（たんぼ）では皆欣々喜々として晩稻（おくて）を蒔（ま）って居る。

甲斐（かい）の山を見る可く、青山街道から十四五歩、船橋（ふなばし）の方へ上って居ると、東京の方から街道を二台の車が来る。護謨輪（ごむわ）の綺麗な車である。道の左右の百姓達が鎌の手をとどめて見て居る。予は持て居た双眼鏡（そうがんきょう）を翳（かざ）した。前なる透（す）かし幌（ほろ）の内は、丸髷に結って真白（まっしろ）に塗った美しい若い婦人である。後の車には、乳母（うば）らしいのが友禅（ゆうぜん）の美しい着物に包まれた女の児を抱（だ）いて居る。玩具など幌の扇骨（ほね）に結いつけてある。今日は十一月の十五日、七五三の宮詣（みやもう）でに東京に往った帰りに見える。二台の護謨輪（ごむわ）が威勢の好い白

法被（しろはっぴ）の車夫に挽（ひ）かれて音もなくだらだら坂を上って往って了うと、余はものゝ影が余の立つ方に近づきつゝあるに気づいた。骸骨（がいこつ）が来るのかと思うた。其は一人の婆（ばば）であった。両の眼の下瞼（したまぶた）が悉（ことごと）く朱（あけ）に反（そ）りかえって、椎（しい）の実程の小さな鼻が右へ歪（ゆが）みなりにくっついて居る。小さな風呂敷包を頸（くび）にかけて、草履（ぞうり）の様になった下駄（げた）を突かけて居る。余は恐ろしくなって、片寄って婆（ばあ）さんを通した。今にも婆さんが口をきゝはせぬかと恐れた。然し婆さんは、下瞼の朱（あか）く反りかえった眼でじろり余を見たまゝ、余の傍（わき）を通り過ぎて了うた。程なく雑木山に見えなくなった。

余は今しがた眼の前を過ぎた二つの幻（まぼろし）の意味を思いつゝ、山を見ることを忘れて田圃の方へ下りて往った。

（大正元年 十一月十五日）

入営

辰（たつ）爺（じい）さん宅（とこ）の岩公（いわこう）が麻布聯隊に入営する。

寸志の一包と、吾れながら見事（みごと）に出来た聖護院（しょうごいん）大根（だいこ）を三本提（さ）げて、挨拶に行く。禾場（うちば）には祝入営の旗が五本も威勢（いせい）よく立って、広くもあらぬ家には人影（ひとかげ）と人声（ひとごえ）が一ぱいに溢れて居る。土間の入口で、阿爺（ちゃん）の辰さんがせっせと饅頭粉（うどんこ）を捏（こ）ねて居る。是非（ぜひ）上（あが）れと云うのを、後刻とふりきって、大根を土間に置いて帰る。

午後万歳（ばんざい）の声を聞いて、遽（あわ）てゝ八幡（はちまん）に往って見る。最早（もう）楽隊（がくたい）を先頭（せんとう）に行列（けつぎょう）が出かける処だ。岩公は黒紋付（くろもんぎ）の羽織（はおり）、袴（はかま）、靴（くつ）、茶（ちゃ）の中折帽（なかおれぼう）と云う装（なり）で、神酒（みき）の所為（せい）もあろう桜色（さくらいろ）になって居る。岩公の阿爺（ちゃん）は体格（たてがみ）は小さい人の好い爺（じい）さんだが、昔は可なり遊んだ男で、小供まで何処（どこ）かイナセなところがある。

余も行列に加わって、高井戸まで送る。真先（まっさ）きに、紫地に白く「千歳村粕谷少年音楽隊」とぬいた横旗（よこはた）を立てゝ、村の少年が銀笛（ぎんてき）、太鼓（たいこ）、手風琴（てふうきん）なぞピーピードンドン賑（にぎ）やかに囃（はや）し立てゝ行く。入営者の弟の沢ちゃんも、銀笛を吹く仲間（なかま）である。次ぎに送入営の幟（のぼり）が五本行く。入営者の附添人（つきぞえ）としては、岩公の兄貴（あにさま）の村さんが弟と並んで歩いて居る。若い時は、亭主（ていしゅ）が夜遊び（よるあそび）するのでしばしば淋しい留守（留守）をして、宵夜中（よいよなか）小使銭（こづかい）貸せの破落戸漢（ならずもの）に踏み込まれたり、苦勞（くろう）に齡（とし）よりも老（ふ）けた岩公の阿母（おふくろ）が、孫（まご）の赤坊（あかぼう）を負（お）って、草履（ぞうり）をはいて小走りに送って来る。四五日前（よきま）に除隊（じょたい）になった寺本（てらもと）の喜三（きさん）さんも居る。水兵服（すいへいふく）の丈高（たけたか）い男（おとこ）を誰（たれ）かと思うたら、休暇（きゅうか）で横須賀（よこすか）から帰（かえ）って来た萩原（はぎわら）の忠（ただ）さんであった。一昨日（きのう）母者（ははじゃ）の葬式（そうしき）をして沈（しん）んだ顔（かほ）の仁左衛門（にざゑもん）

門さんも来て居る。余は高井戸の通りで失敬して、径路（こみち）から帰った。ふりかえって見ると、甲州街道の木立に見え隠れして、旗影と少年音楽隊の曲（きょく）が次第に東へ進んで行く。

今日は何処（どこ）も入営者の出発で、船橋の方でも、万歳の声が夕日の空に颯（あが）って居た。

（明治四十四年 十一月三十日）

*

辰爺さんが酔うて昨日の礼に饅頭を持って来た。うっかりして居たが、吾家（うち）は組内だから昨日も何角（なにか）の手伝（てつだい）に行かねばならなかったのであった。

爺さんは泣声（なきごえ）して、「岩もね、二週間すると来ますだよ」と云う。「兵隊に出すのが嫌だなンか云うことゝ出来ねえだ。何でも大きくなる時節で、天子様（てんしさま）も国（くに）を広くなさるだから」と云う。

誰が教えたのかしら。

（同 十二月一日）

生死

霜無く、風無く、雲無く、静かな寂（しず）かな小春の日。

昨夜、台所の竈台（へっつくだい）の下の空籠（からかご）の中で、犬のピンがうめいたり叫（さけ）んだりして居たが、到頭四疋子を生んだ。茶色（ちゃいろ）が二疋、黒（くろ）が二疋、あの小さな母胎（ぼたい）からよく四疋も生れたものだ。つい今しがた母胎を出たばかりなのに、小猫（こねこ）の様な啼声（なきごえ）を出して、勢（いきおい）猛（もう）に母の乳にむしゃぶりつく。

子犬の生れた騒ぎに、猫のミイやが居ないことを午過（ひるす）ぎまで気付（きづ）かなかった。「おや、ミイは？」と細君（さいくん）が不安な顔をして見廻（みま）わした時は、午後の一時近かった。総（そう）がかりで家中探がす。居ない。屋敷中探がす。居ない。舌（した）が痛くなる程呼んでも、答が無い。民やをやって、近所を遍（あま）ねく探がさしたが、何処にも居ず、誰も知らぬ、と云う。まだ遠出（とおで）をする猫ではなし、何時（いつ）居なくなつたろうと評議する。細君が暫らく考えて「朝は居ましたよ、葱（ねぎ）とりに往く時私に跟（つ）いて畑なぞ歩いて居ました」と云う。如何（どう）なつたのだろうか？ 烏山の天狗犬（てんぐいぬ）に噛（か）まれたのかも知れぬ。三毛（みけ）は美しい小猫だったから、或は人に抱（だ）いて往かれたかも知れぬ。可愛い、剽軽（ひょうきん）な、伶俐（りこう）な小猫だったに、行方不明とは残念な事をしてうた。ひよっとしたら、仲好（なかよ）くして居たピンに子犬が生れたから、ミイが嫉妬して身を隠したのではあるまいか、などあらぬ事まで思う。

夕食の席で、民やが斯様（こん）な話をした。今日（きょう）午後猫を捜（さが）して居ると、八幡下で嶋田（しぎた）の婆さんと辰さん家（とこ）の婆さんと話して居た。先刻田圃（たんぼ）向うの雑木山の中で、印半纏（しるしばんてん）を着た廿歳許の男と、小ざっぱりした服装（なり）をした二十（はたち）前後の女が居た。男はせっせと手で土を掘（ほ）って居た。女は世にも蒼ざめた顔をして居た。自然薯（じねんじょ）でも掘るのですかい、と通りかゝりの婆さんがきいたら、何とも返事しなかった。程経てまた通ると、先の男女はまだ其処（そこ）に居た。其前八幡山（はちまんやま）の畑の辺をまごまごして居たそうである。多分闇（やみ）から闇にと墮（お）りた胎児（たいじ）を埋めたのであろう。嶋田の婆さんは、自家（うち）の山に其様（そん）な事でもしられちゃ大変だ、と云うて畑の草の中なぞ杖（つえ）のさきでせゝって居たそうだ。

其若い男女が、ひょっとしたらまた其処（そこ）へ来て居るかも知れぬ。あるいは無分別をせぬとも限らぬ。

箸（はし）を措（お）くと、外套（がいとう）引かけて出た。体（からだ）も魂（たましい）も倔強（くっきょう）な民が、私お供（とも）致しましょう、と提灯（ちょうちん）ともして先きに立つ。

八幡下の田圃を突切（つっき）って、雑木林の西側を這（は）う径（こみち）に入った。立どまって良（やや）久（ひさ）しく耳を澄（す）ました。人らしいものゝ気（け）もない。

「何処（どこ）に居るかね、不了簡（ふりょうけん）をしちやいかんぞ。俺（わし）に相談をして呉れんか」

声をかけて置いて、熟（じっ）と聞き耳を立てたが、吾声（わがこえ）の攪乱（かきみだ）した雑木山の静寂（せいじゃく）はもとに復（か）えって、落葉（おちば）一つがさとも云わぬ。霜を含んだ夜気（やき）は池の水の様に凝（こ）って、上半部を蝕（く）い欠（か）いた様な片破（かたわ）れ月が、裸（はだか）になった雑木の梢（こずえ）に蒼白く光って居る。

立とまっては耳を傾（かたむ）け、答（こたえ）なき声を空林（くうりん）にかけたりして、到頭甲州街道に出た。一廻りして、今度は雑木山の東側の径（こみち）を取って返した。提灯は径を歩かして、余は月の光（あかり）を便りに今一度疑問の林に分け入った。株立になった雑木は皆落葉（おちば）して、林の中は月明（つきあかり）でほの白い。櫟（くぬぎ）から檜（なら）と眼をつけ、がさがさと吾が踏（ふ）み分くる足下（あしもと）の落葉にも気をつけ、木を掘ったあとの窪（くぼみ）を注視し、時々立止って耳を澄ました。

居（い）ない。終に何者も居ない。土の下も黙（だま）って居る。
（明治四十二年 十二月二日）

天理教の祭

おかず媼（ばあ）さんが、天理教会秋祭（あきまつり）の案内に来た。

紙の上の天理教（てんりきょう）は見て居るが、教会を覗（のぞ）いた事は未（ま）だ無い。好い機（おり）だ。往って見る。

下足札（げそくふだ）を出して、百畳敷一ぱいの人である。正面には御簾（みす）を捲いて、鏡が飾ってある。太鼓（たいこ）、笙（しょう）、箏（ひちりき）、琴（こと）、琵琶（びわ）なんぞを擁したり、あるいは何ものをも持たぬ手を膝（ひざ）に組んだ白衣（びゃくい）の男女が、両辺に居流れて居る。其白衣の女の中には、おかず媼（ばあ）さんも見えた。米俵が十数俵（ひょう）も神前に積（つ）まれて、奉納者（ほうのうしゃ）の名を書いた奉書紙（ほうしょがみ）が下げてある。

やがて鳴物（なりもの）が鳴り出した。太鼓の白衣氏が撥（ばち）を握（にぎ）って単調な拍子（ひょうし）をとりつゝ「ちょっとはなし、神の云うこと聞いてくれ」と唱（とな）え出した。琴が鳴る。箏（ひちりき）が叫ぶ。琵琶が和（わ）する。

黒紋付木綿の綿入に袴（はかま）を穿（は）いた倔強（くっきょう）な若い男が六人、歌につれて神前に踊りはじめた。一進一退、裏（うら）むき表（おもて）むき、立ったり蹲（しゃが）んだり、黒紋付の袖からぬつと出た逞（たく）ましい両の手を合掌（がっしょう）したりほどいたり、真面目に踊って居る。無骨（ぶこつ）で中々愛嬌（あいきょう）がある。「畚（もっこ）かついでひのきしん」と云う歌のところでは、六人ながら新しい畚を担（にな）って踊った。

鳴物は単調に鳴る。歌は単調につゞく。踊は相も変らぬ手振がつゞく。余は多少あき気味であたりを眺（なが）める。皆近辺の人達で、多少の識った顔もある。皆嬉々（きき）として眺めて聴いて居る。

*

天理教祖は実に偉い婆さんであった。其広大な慈悲心は生きて働き、死んでますます働き、老骨（ろうこつ）地に入つてこゝに数十年、其流れを汲（く）む人の数は実に夥（おびただ）しい数を以て数えられる。仮令（たと）大和の本教会（ほんきょうかい）は立派な建築を興し、中学などを建て、小むずかしい天理教聖書を作り、已に組織病に罹（かか）ったとしても、婆さんから流れ出た活ける力はまだまだ盛に本当の信徒の間に働いて居る。信ずる者は幸福である。仮令（たと）其信仰の為に財産をなくして人の物笑（ものわらい）となり、政府の心配となるとも、信ずる者は幸福である。彼等の多くは無学である。彼等に教理を問うても、彼等は唯にこにこと笑うて、立派な言葉で明かに答える事は出来ぬ。然し信仰を説く者必しも信仰を有（も）つ者でない。信ずる彼等は確（たしか）に其信仰に生きて居るのである。

信仰と生活の一致は、容易で無い。何れの信仰でも雑多（ざった）な信

者はある。世界の信者が其信仰を遺憾（いかん）なく実現したら、世界は夙（とう）に無事に苦んで居る筈（はず）だ。天理教徒にも色々ある。財産を天理様に捧（ささ）げてしまつて、嬉々（きき）として労役者（ろうえきしゃ）の生活をして居る者もある。天理教で財産を耗（す）つて、其報償（むくい）を手あたり次第に徴集（ちょうしゅう）し、助けなき婆さんを窘（いじ）めて店賃（たなちん）をはたる者もある。病気の為に信心して幸に痊（い）ゆれば平気で暴利を貪（むさぼ）つて居る者もある。信徒の労力を吸つて肥（こ）えて居る教師もある。然し斯（この）せち鹹（から）い世の中に、人知れず美しい心の花を咲かす者も随処（ずいしょ）にある。此春妻が三軒茶屋（さんげんぢゃや）から帰るとて、車はなしひよろひよろする程荷物を提（さ）げて歩（ある）いて居ると、畑に働（はたら）いて居た娘が、今しも小学校の卒業式から優等の褒美をもらつて帰る少年を追かけて呼びとめてくれたので、其少年に荷物を分けて持つてもらつて帰つて来た。親切な人々と思つて聞いて見れば、それは天理教信者であつた。

人が平気に踏（ふ）みしだく道辺（みちべ）の無名草（ななしぐさ）の其小さな花にも、自然の大活力は現われる。天理教祖は日本の思いがけない水村山郭（さんかく）の此処其処に人知れず生れて居るのである。

*

斯様な事を思つて居る内に、御神楽歌（おかぐらうた）一卷を唱（とな）え囃（はや）し踊る神前の活動はやんで、やがて一脚の椅子テーブルが正面に据（す）えられ、洋服を着た若い紳士が着席し、木下藤吉郎秀吉が信長の草履取（ぞうりとり）となつて草履を懐（ふところ）に入れて温（あたた）めた事をきいきい声で演説した。其れが果てると、余は折詰（おりづめ）一個をもらい、正宗（まさむね）一合瓶（ごうびん）は辞して、参拾銭寄進（きしん）して帰つた。

耶蘇教は我（が）強（つよ）く、仏教は陰気（いんき）くさく、神道に湿（しめ）りが無い。彼（かの）大なる母教祖（ははきょうそ）の胎内（たいたい）から生れ出た、陽気で簡明切実（せつじつ）な平和の天理教が、土（つち）の人なる農家に多くの信徒を有（も）つは尤である。

（明治四十二年 十二月四日）

渦巻

小春日がつゞく。

十二月は余の大好（だいす）きな月である。絢爛（けんらん）の秋が過ぎて、落つるものは落ち尽（つく）し、枯（か）るゝものは枯れ尽し、見るもの皆乾々（かんかん）浄々（じょうじょう）として、寂（さび）しいにも寂しいが、寂しい中にも何とも云えぬ味（あじ）がある。秋に別れて冬になろうと云う此隙（ひま）に、自然が一寸静座の妙境（みょうきょう）に入る其幽玄の趣（おもむき）は言葉に尽くせぬ。

隣字（となりあざ）の仙左衛門が、根こぎの山豆柿（やまめがき）一本と自然薯（じねんじょ）を持って来てくれた。一を庭に、一を鶏（にわと

り)の柵(さく)に植える。今年(ことし)は吾家(うち)の聖護院(しょうごいん)大根(だいこ)が上出来だ。種をくれと云うから、二本やる。少し話して行けと云うたら、また近所(きんじょ)に鮭(さけ)が出来たからと云うて、急いで帰った。鮭とは、ぶら下がるの謎で、首縊(くびく)りがあったと云うのである。

橋本の敬さんが、実弟の世良田(せらだ)某(ぼう)を連れて来た。五歳(いつつ)の年四谷(よつや)に養子に往って、十年前渡米し、今はロスアンゼルスに砂糖(さとう)大根(だいこん)八十町、セロリー四十町作って居るそうだ。妻(つま)を持ちに帰って来たのである。カンタルーブ、草花の種子をもらう。

此村から外国(がいこく)出稼(でかせぎ)に往った者はあまり無い。朝鮮、北海道の移住者も殆んど無い。余等が村住居の数年間に、隣字の者で下総(しもうさ)の高原に移住し、可なり成功した者が一度帰って来たことがある。何(ど)の家にも、子女の五六人七八人居ない家はないが、それで一向(いっこう)新しい竈(かまど)の殖(ふ)える様子もない。如何(どう)なるかと云えば、女は無論嫁(とつ)ぐが、息子(むすこ)の或者は養子に行く、ある者は東京に出て職を覚える、店(みせ)を出す。何しろ直ぐ近所に東京と云う大渦(おおうず)が巻いて居るので、村を出ると直ぐ東京に吸われてしもうて、移住出稼などに向く者は先ず無いと云うてよい。世良田(せらだ)君なんどは稀有(けう)の例である。

東京に出て相応(そうおう)に暮らして行く者もあるが、春秋の彼岸や盆(ぼん)に墓参に来る人の数は少なく、余の直ぐ隣の墓地でも最早(もう)無縁(むえん)になった墓が少からずあるのを見ると、故郷はなれた彼等の運命が思いやられぬでもない。「家鴨馴知灘勢急、相喚相呼不離湾」何処(どこ)ぞへ往ってしまいたいと口癖(くちぐせ)の様に云う二番目息子の稻公(いねこう)を、阿母(おふくろ)が懸念(けねん)するのも無理は無い。

(明治四十四年 十二月五日)

透視

非常の霜、地皮(ちひ)が全く霜(しも)やけして了うた。

午(ご)の前後はまた無闇(むやみ)と暖(あたたか)だ。凧(こがらし)も黙(だま)り、時雨(しぐれ)も眠(ねむ)り、乾(かわ)いて反(そ)りかえった落葉(おちば)は、木の下に夢(ゆめ)みて居る。烏(からす)が啼(な)いたあとに、隣の鶏(にわとり)が鳴(な)き、雀(すずめ)が去ったあとの楓(かえで)の枝(えだ)に、鷓鴣(みそさざい)がとまる。静かにさす午後(ごご)の日に白く光(ひか)って小虫(こむし)が飛ぶ。蜘蛛糸(くものいと)の断片が日光の道を見せて閃(ひら)めく。甲州の山は小春(こはる)の空(そら)にうっとり霞(かす)んで居る。

落ちついて、はっきりして、寂しい中に暖か味(み)があって、温(あたた)かい中に寂し味(み)があって、十二月は本当に好い月である。

日曜だが、来客もなく静（しずか）なことだ。主と妻と女兒と、日あたりの好（い）い母屋（おもや）の南縁（なんえん）で、日なたぼっこをして遊ぶ。白茶（しらちゃ）天鵞絨（びろうど）の様に光る芝生（しばふ）では、犬のデカとピンと其子のタロウ、カメが遊んで居る。大きなデカ爺（おやじ）が、自分の頭程（あたまほど）もない先月生れの小犬の蚤（のみ）を噛（か）んでやったり、小犬が母の頸輪（くびわ）を啣（くわ）えて引張ったり、犬と猫と仲悪（なかわる）の譬（たとえ）にもするにデカと猫のトラと鼻（はな）突（つき）合わせて互（たがい）に疑（うたが）いもせず、皆悠々と小春の恩光（おんこう）の下（もと）に遊んで居る。「小春」とか「和楽（わらく）」とかの画（え）になりそう。

*

細君が指輪（ゆびわ）をなくしたので、此頃勝手元の手伝（てつだ）いに来る隣字（となりあざ）のお鈴（すず）に頼み、吉（きち）さんに見てもらったら、母家（おもや）の乾（いぬい）の方角（ほうがく）高い処（ところ）のって居る、三日（みっか）稲荷様（いなりさま）を信心すると出て来る、と云うた。

吉さんは隣字の人で、日蓮宗の篤信者（とくしんじゃ）、病気が信心で癒（なお）った以来千里眼を得たと人が云う。吉凶（きつきょう）其他分からぬ事があれば、界限（かいわい）の者はよく吉さんに往って聞く。造作（ぞうさ）なく見てくれる。馬鹿にして居る者もあるが、信ずる者が多い。信ずる者は、吉さんの言（ことば）で病気も癒（なお）り、なくなったものも見出す。此辺での長尾（ながお）郁子（いくこ）、御船（みふね）千鶴子（ちづこ）である。

裏の物置に大きな青大将（あおだいしょう）が居る。吉さんは、其れを先々代の家主のかみさんの霊（れい）だと云う。兎に角、聞く処によれば、これまで吉さんの言が的中（てきちゅう）した例は少なくない。吉さんは人の見得ないものを見る。汽車の轢死人（れきしにん）があった処を吉さんが通ると、青い顔の男女（なんによ）がふらふら跟（つ）いて来て仕方（しかた）がないそうだ。

余の家にも他の若い者並（なみ）に仕事に来ることがある。五十そこらの、瘠（や）せて力があまりなさそうな無口な人である。

我等は信が無い為に、統一が出来ない為に、おのずから明瞭なものも見えず聞こえずして了うのである。信ずる者には、奇蹟は別に不思議でも何でもない筈（はず）だ。

然しながら我等凡夫（ぼんぷ）は必しも人々尽く千里眼たることは出来ぬ。また必ずしも悉く千里眼たるを要せぬ。長尾郁子や千鶴子も評判が立つと間もなく死んで了うた。不信が信を殺したとも云える。また一方から云えば、幽明（ゆうめい）、物心（ぶっしん）、死生（しせい）、神人（しんじん）の間を隔（へだ）つる神秘的一幕（いちまく）は、容易に掲（かか）げぬ所に生活の面白味（おもしろみ）も自由もあって、濫（みだ）りに之

を掲ぐるの報（むくい）は速（すみ）やかなる死或は盲目である場合があるのではあるまいか。命を賭（と）しても此帷幕の隙見（すきみ）をす可く努力せずに居られぬ人を晒（わら）うは吾儕（われら）が鈍（どん）な高慢（こうまん）であろうが、同じ生類（しょうるい）の進むにも、鳥の道、魚の道、虫（むし）の道、また獣（けもの）の道もあることを忘れてはならぬ。

吾儕（われら）は奇蹟を驚異し、透視（とうし）の人を尊敬し、而して自身は平坦な道のあるいて、道の導く所に行きたいものである。

*

夜、鶴子（つるこ）が炬燵（こたつ）に入りながら、昨日東京客からみやげにもらった鉛筆で雑記帳にアイウエオの手習（てならい）をしたあとで、雑記帳の表紙（ひょうし）に「トクトミツルコノデス」と書き、それから

コイヌガウマレマシテ、カワイコトデアリマス

と書いた。これは鶴子女史が生れてはじめての作文だ。細君が其下に記憶の為「ゴネントムツキ」と年齢（とし）をかゝせた。

（明治四十四年 十二月十日）

雪

暮の廿八日は、午食前（ひるめしまえ）から雨になり、降りながら夜に入った。

夜の二時頃、枕辺（まくらべ）近く撞（どす）と云った物音（ものおと）に、余は岸破（がぼ）と匆（は）ね起きた。身繕（みづくろ）いしてやゝしばし寝床（ねどこ）に突立（つった）って居ると、忍び込んだと思った人の容子（ようす）は無くて、戸の外（そと）にサラサラサラサラ忍びやかな音がする。「雪だ！」

先刻（さっき）の物音は、檜（かし）の枝を滑り落ちた雪の響（おと）だったのだ。余は含笑（ほほえ）みつゝまた眠った。

六時、起きて雨戸をあけると、白い光（ひかり）がぱっと眼を射（い）た。縁先（えんさき）まで真白だ。最早（もう）五寸から積って居るが、まだ盛（さかん）に降って居る。

去年は暖かで、ついで雪らしい雪を見なかった。年の内に五寸からの雪を見ることは、余等が千歳村の民になってからはじめてゝある。

余は奥書院（おくしょいん）の戸をあけた。西南を一目に見晴（みは）らす此処（ここ）の座敷は、今雪の田園（でんえん）を額縁（がくぶち）なしの画（え）にして見せて居る。庭の内に高低（こうてい）参差（しんし）とした十数本の松は、何れも忍（しの）び得る限（かぎ）り雪に撓（た）わんで、最早払（はら）おうか今払おうかと思ひ貌（がお）に枝を揺々（ゆらゆら）さして居る。素裸（すっぱだか）になつてた落葉木（らくようぼ

く)は、従順(すなお)に雪の積るに任せて居る。枯萩(かれはぎ)の一叢(ひとむら)が、ぴったりと弓形(ゆみなり)に地に平伏(ひれふ)して居る。余は思わず声を立てゝ笑った。背向(うしろむ)きの石地藏(いしじぞう)が、看護婦の冠る様な白い帽子を被(き)せられ、両肩(りょうかた)には白い雪のエパウレットをかついで澄まして立ってござるのだ。

余は障子をしめて内に入り、仕事にかゝる前に二通の手紙を書いた。筑波山下(つくばさんか)の医師(いし)なる人に一通。東京銀座の書店主人に通。水国(すいこく)の雪景色と、歳晚(さいばん)の雪の都会の浮世絵が幻(まぼろし)の如く眼の前に浮ぶ。手紙を書き終えて、余は書き物をはじめた。障子が段々(だんだん)眩(まぶ)しくなると、時々吃驚(びっくり)する様な大きな響(おと)をさしてドサリ撞(どう)と雪が落ちる。机の傍(そば)では真鍮(しんちゅう)の菓罐(やかん)がチンチン云って居る。

午餐(ごさん)の案内に鶴子が来た。室を出て見ると、雪はぽつりぽつりまだ降って居るが、四辺(あたり)は雪ならぬ光を含んで明るく、母屋(おもや)前(まえ)の芝生は櫛の雫(しずく)で已に斑(まだら)に消えて居る。「何だ、此れっ切りか。春の雪の様だね」

斯(か)く罵(ののし)りつゝ食卓(しょくたく)に就(つ)く。黒塗膳(くろぬりぜん)に白いものが三つ載(の)せてある。南天(なんてん)の紅(あか)い実(み)を眼球(めだま)にした兎(うさぎ)と、竜髭(りゅうのひげ)の碧(あお)い実(み)が眼球(めだま)の鶉(うずら)や、眉を竜髭の葉にし眼を其実にした小さな雪達磨(ゆきだるま)とが、一盤(ひとばん)の上に同居して居る。鶴子の為に妻が作ったのである。

「此(この)達磨(だるま)さん西洋人(せいようじん)よ、だって眼が碧(あお)いんですもの」と鶴子が曰(い)う。

雪で、今日は新聞が来(こ)ぬ。朝は乳屋(ちちや)、午後は七十近い郵便(ゆうびん)配達(はいたつ)の爺(じい)さんが来たばかり。明日(あす)の餅搗(もちつ)きを頼んだので、隣の主人(あるじ)が糯米(もちごめ)を取りに来た。其ついでに、蒸(ふ)かし立ての甘藷(さつまいも)を二本鶴子に呉(く)れた。

余は奥座敷で朝来(ちょうらい)の仕事をつゞける。寒いので、しばしば火鉢(ひばち)の炭(すみ)をつぐ。障子がやゝ翳(かげ)って、丁度(ちょうど)好い程の明(あかり)になった。颯(さあ)と云う音がする。轟(ごう)と云う響(ひびき)がする。風が出たらしい。四時やゝ廻(まわ)ると、妻が茶(ちゃ)を点(い)れ、鶴子が焼栗(やきぐり)を持って入って来た。「雪水(ゆきみず)を沸(わ)かしたのですよ」と妻が曰(い)う。ペンを擱(さしお)いて、取あえず一碗(わん)を傾(かたむ)ける。銀瓶(ぎんびん)と云う処だが、やはり例(れい)の鉄瓶(てつびん)だ。其れでも何となく茶味(ちゃみ)が軟(やわら)かい。手々(てんで)に焼栗を剥(む)きつゝ、障子をあけてやゝしばし外を眺める。北から風が吹いて居る。田圃(たんぼ)向(むこ)うの杉の森を掠(かす)めて、白

い風が弗（ふっ）、弗（ふっ）と幾陣（いくしきり）か斜（はす）に吹き通る。庭の内では、蛾（が）の如く花の様な大小の雪片（せっぺん）が、飛（と）んだり、匆（は）ねたり、狂（くる）うたり、筋斗翻（とんぼがえり）をしたり、ダンスをする様にくるりと廻（まわ）ったり、面白そうにふざけ散らして、身軽（みがる）に気軽（きがる）に舞うて居る。消えかけて居た雪の帽が、また地蔵の頭上に高くなった。庭の主貌（あるじがお）した赤松の枝から、時々サッと雪の滝（たき）が落ちる。

「今夜も降りますよ」斯く云いすて、妻は鶴子と立って往った。

余は風雪の音を聞き聞き仕事をつゞける。一枚も書くと、最早（もう）書く文字がおぼろになった。余はペンを拭（ふ）いて、立って障子をあげた。

蒼白（あおじろ）い雪の黄昏（たそがれ）である。眼の届く限り、耳の届く限り、人通りもない、物音もしない。唯雪が霏々（ひひ）また霏々と限りもなく降って居る。良（やや）久（ひさ）しく眺める。不図縁先（えんさき）を黒い物が通ると思うたら、其（それ）は先月来余の家に入込んで居る風来犬（ふうらいいぬ）であった。まだ小供小供した耳の大きな牝犬（めいぬ）で、何処から如何（どう）して来たか知らぬが、勝手にありついて、追えども逐えども去ろうともせぬ。余の家には雌雄（しゆう）二疋（ひき）の犬が居るので、此上牝犬を飼うも厄介である。わざわざ人を頼んで、玉川向うへ捨てさせた。すると翌日ひょっくり帰って来た。汽車に乗せたらと謂（い）って、荻窪（おぎくぼ）から汽車で吉祥寺（きちじょうじ）に送って、林の中に繫（つな）いで置いたら、頸（くび）に縄きれをぶらさげながら、一週間ぶりに舞（ま）い戻（もど）った。隣字の人に頼んで、二子在の犬好きの家へ世話してもらうつもりで、一先ず其家に繫いで置いてもらうと、長い鎖（くさり）を引きずりながら帰って来た。詮方（せんかた）なくて今は其まゝにしてある。余が口笛（くちぶえ）を吹（ふ）いたら、彼女（かのじょ）はふっと見上げたが、やがて尾を垂（た）れて、小さな足跡（あしあと）を深く雪に残しつゝ、裏の方へ往って了うた。

雪はまだしきりに降って居る。

余は思うともなく今年一年の出来事をさまざまと思ひ浮（うか）べた。身の上、家の上、村の上、自国の上、外国の上、さまざまと事多い一年であった。種々の形（かたち）で世界の各所（かくしょ）に現（あら）わるゝ、人心（じんしん）の昂奮（こうふん）、人間の動揺が、眼（め）まぐるしくあらためて余の心の眼に映（うつ）った。

何処（どこ）に落着く世の中であろう？

余は久しく久しく何を見るときも雪の中を見つめる。

大正元年暮の二十九日は蒼白（あおじろ）う暮れて行く。

おのがじし舞ひ狂ひつるあともなし

世は一色（ひといろ）の雪の夕暮

（大正元年 十二月二十九日）

読者に

(一)

読者諸君。

「みみずのたはこと」の出版は、大正二年の三月でした。それから今大正十二年十二月まで何時しか十年余の月日が立ちました。此十年余の限りない波瀾にも、最近の大震災にも幸に恙（つつが）なく、ここに「みみずのたはこと」の巻末に於て、粕谷の書齋から遙に諸君と相見るを得るは、感謝の至です。

まことに大正の御代になつての斯十余年は、私共に、諸君に、日本に、はた世界にとって、極めて多事多難な十余年でありました。

大正元年暮の二十九日、雪の黄昏を眺めた私の心のやるせない淋しさ――それは世界を掩うて近寄り来る死の蔭の冷（ひい）やりとした歩（あゆ）みをわれ知らず感じたのでした。大正二年「みみずのたはこと」の出版をさながらのきっかけに、日一日、歩一歩、私は死に近づいて来ました。死にたくない。遣（のが）れたい、私は随分もがきました。一家を挙げて秋の三月（みつき）を九州から南満洲、朝鮮、山陰、京畿（けいき）とぶらついた旅行は、近づく運命を躲（かわ）そうとてののたうち廻りでした。然し盃（さかずき）は否応（いやおう）なしに飲まされます。私は阿容阿容（おめおめ）とまた粕谷の旧巢（ふるす）に帰って来ました。

大正三年が来ました。「死」の年です。五月に私の父が九十三歳で死にました。私は父を捨て、「みみずのたはこと」の看板娘であつた鶴子を其父母に返えし、門を閉じ、人を謝して、生きながら墓の中に入りました。八月に独逸を相手の世界戦が始まります。世界は死の蔭に入りました。

其十二月に私は自伝小説「黒い眼と茶色の目」を出しました。私にとって自殺の第一刀です。同時に「生」への安全弁でもありました。然し要するに自他を傷つくる爆弾であつた事も諍（あらず）えません。早速妻が瀕死の大病に罹（かか）り、四ヶ月を病院に送りました。生命を取りとめたが不思議です。

世界が血みどろになつて戦う大正四年、大正五年、大正六年、私は閉門生活をつづけて居ました。懊惱（おうのう）は気も狂うばかりです。傍（かたわら）に妻あり踏むに土あつて、私は狂わず死なざるを得ました。私は真面目に畑仕事をしました。然し文筆の人に鋏のみでは足りません。大正六年の三月「死の蔭に」を出しました。大正二年の秋の逃避旅行の極めて皮相な叙述です。

すべてには限（きり）があります。「死の蔭に」が出で、父の三年の喪（も）が果てる頃から、私はそろそろ死の蔭を出ました。大正七年は私共夫妻の銀婚です。其四月、母の九十の誕辰に私は「新春」を出しました。生の福音、復活の凱歌です。春に「新春」が出で、秋の十一月十一日に、さしも五年に涉（わた）って世界を荒らした大戦がぼったり止んだのであります。

世界が死の蔭を出て、大戦後始末の会議がヴェルサイユに開かれた大正八年一月私共夫妻は粕谷を出でて世界一周の旅に上りました。旅費の前半は「新春」の読者、後半は後（あと）で出た「日本から日本へ」の読者から出たのであります。新嘉坡（シンガポール）まで往った時、私の母が東京で九十一歳で死にました。父を捨てた子は、母の死に目にも会いません。私共は尚（なお）西へ西へと旅をつづけ、何時しか世界を一周して、大正九年の三月日本に帰って来ました。

母なしとなどかは嘆くわれを生みし
国土（こくど）日本（にっぽん）とこしへの母

日本近くなった太平洋船中での私の感懐であります。

帰って丁度一年目の大正十年三月、私共は夫妻共著の「日本から日本へ」を出しました。

中一年置いて、今大正十二年四月に私は「竹崎順子」を出しました。日露戦争中肥後の熊本で八十一で亡くなった私の伯母——母の姉の実伝で、十八年前の遺囑（いしょく）を果したのであります。

それから九月一日の大震にもお蔭で恙（つつが）なく、五十六歳と五十歳のアダム、イヴは、今年七月秋田から呼んだ、デダツ（モンペの方言）を穿（は）いて「奥様、あれ持って来てやろか」と云う口をきく、アイウエオが十分には読めぬ「今」という十四の女中と、Bと名づくる牝猫一疋、淋しい忙しい生活をつづけて居ります。

*

世界一周から帰村した三日目の夜、私共は近所の人々を呼んでおみやげ話をしました。ざっと行程を話したあとで、私は曰いました。世界を一周して見て、日本程好い処はありません。日本では粕谷程好い処はありません。諸君が手を拍（たた）いて喝采（かつさい）しました。

お世辞ではありません。全然（まったく）です。

私は九州肥後の葦北（あしきた）郡水俣（みなまた）という海村に生れ、熊本で成長し、伊予の今治、京都と転々（てんてん）して、二十二歳で東京に出で、妻は同じ肥後の菊池郡隈府（わいふ）という山の町に生れ、熊本に移り、東京に出で、私が二十七妻が二十一の春東京で一緒（いっしょ）になり、東京から逗子、また東京、それから結婚十四年目の明治四十年に初めて一反五畝の土と一棟（ひとむね）のあばら家を買って夫妻此粕谷に引越して来ました。戸籍まで引いたは、永住の心算（つもり）でした。然し落ち着きは中々出来ないものです。村居七年目に出した「みみずのたはこと」は、開巻第一に臆面（おくめん）もなく心のぐらつきを告白して居ます。永住方針で居たが、果して村に踏みとどまるか、東京に帰るか、もっと山へ入るか、分からぬと言うて居ます。其挙句（あげく）が前述（ぜんじゅつ）の通り十年のドウドウ廻（めぐ）りです。私は自分の幼稚な吾儘（わがまま）と頑固な気まぐれから、思うようにならぬと謂（い）うて

は第一自分自身がいやになり、周囲がいやになり、日本がいやになり、世界がいやになり、到頭生きる事がいやになり、自己を脱（ぬ）けたい、何処ぞへ移りたい、面倒臭い、いっそ死んでのけたいとまで思いつめ、落ちつく故郷を安住の地をひたもの探がし廻ったのでした。然し駄目でした。一足飛びに自分が聖人にもなれません。一から十まで気に入るような人間にも会えません。またじっくりと身に合うような出来合いの理想郷は此世にありません。然らば如何（どう）する？だらしなく無為に朽（く）ちるか。太く短く反逆の芝居を打って一思いに花やかな死を遂げるか。さもなくば自己に帰って、客観的には謙（へりくだ）ってすべてに頭わるる神を見、主観的には自己を核（かく）にして内にも外にも好きな世界を創造すべく努めるか。私は其一を撰ばねばならなくなりました。而して到頭自己に帰りました。「盍反其本（なんぞそのもとかえらざる）」で、畢竟（ひっきょう）其本に、自己に、わが衷（うち）に在（いま）す神、やがてすべてに在す神――に帰ったのであります。帰れば其処が故郷でした。安住の地でした。私の母の歌に

西、東、北の果までたづねても
みなみ（南、――皆身（みなみ））にかへる地獄極楽

というのがありますが、正（まさ）にそれです。皆身にかえる外はありません。私も五十年来さまざまの旅をしつくし、駄目を押し、終に世界を一周（ひとめぐり）して来て見て、いよいよ自己に、而して自己の住む此処日本粕谷にしっかりと腰を据えたのであります。

十七年前、村入当時私は東隣の墓地の株に加入を勧められました。私は生返事して十数年を過ごしました。今年ある村の寄合の場で、私は斯く言いました。

「私共もいよいよ粕谷の土になる事にきめました。何分よろしく」

「世界で日本、日本で粕谷」に拍手喝采した諸君は、此時破顔一笑、会心（かいしん）のさざめきを以て酬（むく）うてくれました。

いよいよ私共も粕谷の土になるにきめました。東隣の墓地は狭いが、四千坪近い所有地は何処にやすらうも自由です。墓地をきめると云う事は、旅行しない意味では無論ありません。何処で死ぬか、私共は知りません。唯何処で死んでもいづれ粕谷の土です。

泊（とまり）がきまると、行手（ゆくて）を急ぐ要はありません。のろのろ歩きましょう。一步は一步の楽（たのしみ）です。父は九十三、母は九十一、何卒（どうか）私共もあやかりたい。先頃の大地震に、私はある人に言いました。「借金もちは、天道様（てんとうさま）が中々殺さぬよ」。私も夥（おびただ）しい借金もちです。五十年来幾度となく死地を脱して斯く生かされて居るのも、あの因業爺（いんごうおやじ）が「分厘までも」払わさずには置かぬ心底がまざまざと読まれます。私も昔は借金とも思わず無暗（むやみ）に重（かさ）ねた時代がありました。借金と気がついて急に悄気（しよげ）た時期もあります。わが借金は棚（たな）にあげ、他（ひと）の少々の貸金をはたって歩いた時もあります。山なす借金、所詮（しよせん）払えそうもないので、ドウセ毒皿だ、クソ、ドシドシ使い込

んでやれ、踏倒して逃げてやれ、と悪度胸（わるどきょう）を据（す）えた時もあります。然しもう潔（いさぎよ）く観念しました。返えします。奇麗に返えします。成る事なら利子をつけて返えします。返えさずに居れなくなりました。返えすが樂にさえ悦喜にさえなって来ました。目下整理中です。総（そう）じて義務が道楽にならねば味がない。借金返えしも渋面（じゅうめん）つくって、さっさと返えしては曲（きょく）が無い。『人生は嚴肅也、芸術は快活也。』真面目（まじめ）に計算しましょう。笑顔（えがお）で払いましょう。其為にこそ私共は生れて来、生きて来たのです。

(二)

私共が粕谷に越して来ての十七年は、やはり長い年月でした。村も大分変りました。東京が文化が大勝（おおまた）に歩いて来ました。「みみずのたはこと」が出た時、まだ線路工事をやって居た京王電鉄が新宿から府中まで開通して、朝夕の電車が二里三里四里の遠方から東京へ通う男女学生で一ぱいになったり、私共の村から夏の夕食後に一寸九段下あたりまで縁日を冷（ひ）やかに往って帰る位何の造作（ぞうさ）もなくなったのは、もう余程以前の事です。私共の外遊中に、名物巢鴨の精神病院がつい近くの松沢に越して来ました。嬉（うれ）しいような、また恐（こわ）いような気がします。隣字（となりあざ）の烏山には文化住宅が出来ました。別荘式住宅も追々建ちます。思いがけなく藪陰から提琴（ヴァイオリン）の好い音が響いたり、気どったトレモロが聞こえたりします。燈台下暗かった粕谷にも、昨秋から兎に角電燈がつかしました。私共が村入当時二十七戸の粕谷が、新家が出来たり、村入があったり、今は三十三戸です。このあたりもう全くの蔬菜村です。東京が寄って来た事が知れます。現に大東京の計画中には、北多摩郡でも一番東部の千歳村、砧（きぬた）村の二村が包含される事になって居ます。此処までお出と私共が十七年前逃げ出した東京を手招きした訳でもないが、東京の方から追いかけて来るのを見れば、切っても切れぬ情縁がやはりあるものと見えます。もう私共は今の粕谷が東京の中心になっても、動きません。村が蔬菜村になって、水瓜などは殆んど番がいらぬまで普通になりました。水瓜好きの私共には特別の恩恵です。農家も追々豊になり、此頃では荷車挽きに牛を飼（か）わぬ家は稀です。本文の「不浄」にも書いた通り、荷出しや下肥引きに村の人々が汗みずくになって、眼を悪くして重い車を引くのを気にして居た私共に、牛車は何と云ううれしい変化でしょう。牛の牟々（もうもう）程農村を長閑（のどか）にするものではありません。道路も追々よくなります。村役場も改築移転し、烏山にも小学が出来、もとの塚戸小学校も新築されて私共に近くなりました。運動時間などはわぁわぁと子供の声が潮（うしお）の如く私の書齋に響いて来ては、子無しの私共に力をつけます。

台湾を取り、樺太の半を収（おさ）め、朝鮮を併（あわ）せ、南満洲に手を出し、布哇（ハワイ）を越えて米国まで押寄する日本膨脹の雛型（ひながた）でもあるように、明治四十年の二月に一反五畝の地面と一棟のあばら家から創（はじ）めた私共の住居（すまい）も、追々買い広げて、今は山林宅地畑地を合わせて四千坪に近く、古家ながら茅葺（かやぶき）の四棟（よむね）もあって、廊下、雪隠、物置、下屋一切を入れて建坪が

百坪にも上ります。村の人となつて程なく、二尺余の杉苗を買って私は母屋（おもや）の南面に風よけの杉籬（すぎかき）を結（ゆ）いました。西の端に唯一本木鋏（きばさみ）を免れた其杉苗が、今は高さ二丈五尺、幹（みき）の太（ふと）さは目通り一尺五寸六分になりました。十七年の杉の成長としては思わしくありませんが、二尺の苗の昔を思えば隔世（かくせい）の感があります。私共の村住居（むらずまい）の年標（ねんひょう）として、私は毎々（まいまい）お客に此杉の木を指（ゆびさ）します。年標の杉が太り、屋敷も太りました。巻頭の写真にも其面影は覗（うかが）われます。一町二反余の地主で、文筆による所得税を納めるので、私も今は衆議院議員選挙権の所有者です。已に一回投票というものをして見ました。それは兎に角私も粕谷の住人としてももう新参ではありません。住居の雅名（がめい）が欲（ほ）しくなったので、私の「新春」が出た大正七年に恒春園（こうしゅんえん）と命名しました。台湾の南端に恒春と云う地名があります。其恒春に私共の農園があるという評判がある時立って其処に人を使うてくれぬかとある人から頼まれた事があります。思もかけない事でしたが、縁喜（えんぎ）が好（よ）いので、一つは「永久に若い」意味をこめて、台湾ならぬ粕谷の私共の住居を恒春園と名づけたのであります。恒春園は荒れました。四千坪の大部分は樹木と萱（かや）、雑草で、畑は一反足らずです。外遊中は人気（ひとけ）がないので野兎（のうさぎ）が安心して園に巣をつくりました。此頃ではペン多忙で、滅多（めった）に鋤（くわ）は取りません。少しばかりの野菜は、懇意な農家に頼んで居ます。金になると云う上からは、恒春園は零（ぜろ）です。毎年堆肥（たいひ）温床用（おんしょうよう）の落葉を四円に売ります。四千坪の年収が金四円です。庭園は荒れに荒れ、家も大分ふるびて、雨漏りがします。明治四十二年の春に買った一棟（ひとむね）なぞは、萱沢山（かやたくさん）の厚さ二尺程にも屋根を葺（ふ）いて、一生大丈夫の気で居ましたら、何時しか木蔭から腐って、骨が出ました。家屋でも、身体（からだ）でも、修繕なしにやって往けよう筈はありません。四十と三十四で東京から越して来た私共夫妻が、五十六と五十になって、眼が薄くなったり、物忘れをしたり、五体の何処かが絶えず修補を促（うなが）します。私共も肝油を飲んだり、齒科眼科に通ったり、腸胃の為に弦斎さんのタラコン散を常薬にして居ます。身体の修繕斯通りで、家屋のそれも決して忘れた訳ではありません。全く住宅と衣服は出来合いで済まされません。洋服の利は分かって居ます。私共も外遊以来一切和服の新調をやめ——以前から碌（ろく）に和服という和服もなかったのですが——内にも外にも簡易な洋服生活です。住居はこれからです。古家ばかり買い込んで、小人数には広過ぎ、手長足長、血のめぐりの悪い此住居を取毀（とりこわ）し、しっくりとした洋式住宅を建てよう心算は夙（とく）に出来て居ますが、実現がまだ出来ません。畳の上に椅子テエブル、障子を硝子にしたり、井を米国式軽快なポンプにしたり、書齋に独逸暖炉を据えたり、室内電話を使ったり、心ばかりの進出をして居ます。先頃の地震でいっそ一思いに潰（つぶ）れるか、焼けるかしたら、借金してもバラック位新築せねばならなかつたでしょうが、無理さすまいとてか、地震は御愛想に私共の壁を崩し戸障子の建てつきを悪くしただけで往ってしまったので、当分現状維持です。然し新造が見えすいて居る住居に、大工左官を入れるも馬鹿らしいので、地震後一月あまり私は毎日鎚と鋸と釘抜と釘とを持って、壁の大崩れに板や古障子を

打ちつけ、妻や女中が古新聞で張って、兎や角凌いで居ます。書齋も母屋（おもや）も壁の亀裂（ひわれ）もまだ其ままで、母屋に雨のしと降る夜はバケツをたゞく雨漏りの音に東京のバラックを偲（しの）んで居ます。

(三)

九月一日の地震に、千歳村は幸に大した損害はありませんでした。甲州街道筋（すじ）には潰れ半潰れの家も出来、松沢病院では死人もありましたが、粕谷は八幡様の鳥居が落ちたり、墓石が転（ころ）んだ位の事で、私の宅なぞが損害のひどかった方でした。村の青年達が八幡様の鳥居を直した帰途（かえり）に立寄って、廊下の壁の大破（たいは）を片づけたり、地蔵様を抱（だ）き起したりしてくれました。後（あと）は前述の如く素人大工で済ませて置きます。九月一日の午餐と夕食は、母屋の庭の株（かぶ）立ちの山楓（やまもみじ）の蔭でしたためました。今夜十二時前後に大震が来るかも知れぬ、世田ヶ谷の砲兵聯隊で二発大砲が鳴ったら、飛び出してくれ、という不思議な言いつぎが来て、三日の夜の十一時半から二時頃まで、庭の櫨（かしわ）の木に提灯（ちょうちん）つるして天の河の下で物語りなどして過ごした外は、唯一夜も家の外には寝ませんでした。四日にはもう京王電車が一部分通います。五日には電燈がつきます。十日日には東京の新聞がぼつぼつ来ました。十一日には郵便が来ました。村の復旧は早い。済まぬ事ですが、震災の百ヶ日も過ぎて私共は未だ東京を見ません。然し程度の差こそあれ、私共も罹災者（りさいしゃ）です。九月一日、二日、三日と三宵に涉（わた）り、庭の大椎（おおしい）を黒（くろ）く染めぬいて、東に東京、南に横浜、真赤に天を焦（こが）す猛火の焰（ほのお）は私共の心魂（しんこん）を悸（おのの）かせました。頻繁な余震も頭を狂わせます。来る人、来る人の伝うる東京横浜の惨状も、累進的に私共の心を傷（いた）めます。関心する人々の安否を確（たしか）むるまでは、何日も何日も待たねばなりませんでした。大抵は無事でした。然し思いかけない折に、新聞が相識る人の訃（ふ）を伝えたのも二三に止まりません。すべてが戦時気分でした。然（そう）です。世界戦に日本は手（た）ずさわるとは云う条（じょう）、本舞台には出ませんでした。戦争過ぎて五年目に、日本は独舞台で歐洲中原の五年にわたる苦艱（くげん）を唯一日の間に嘗めました。あの大战に白耳義（ベルギー）以外何処（どこ）の国が日本のようにぐいと思ふさま国都を衝（つ）かれたものがありましたでしょうか。欧羅巴に火と血を降らせたのは人間わざでしたが、日本の受けた鞭（むち）は大地震です。日本は人間の手で打たれず、自然の手でたたかれました。「誰か父の懲（こ）らしめざる子あらんや」と云う筆法（ひっぽう）から云えば、災禍（さいか）の受け様（よう）にも日本は天の愛子であります。ところで此愛子の若いことがまた夥（おびただ）しい。強そうな事を言うて居て、まさかの時は腰がぬけます。真闇（まっくら）に逆上（ぎゃくじょう）します。鮮人騒ぎは如何でした？ 私共の村でもやはり騒ぎました。けたたましく警鐘が鳴り、「来たぞウ」と壮丁の呼ぶ声も胸を轟かします。隣字の烏山では到頭労働に行く途中の鮮人を三名殺してしまいました。済まぬ事差（はず）かしい事です。

斯様（こん）な中にもうれしい事はやはりありました。粕谷の人々が相

談して、九月の六日に水瓜、玉蜀黍（とうもろこし）、茄子（なす）、夏大根、馬鈴薯（じゃがいも）などを牛車十一台に満載（まんさい）して、東京へお見舞をしました。村の青年達がきりっとした装（なり）をして左腕に一樣に赤い布を巻き、牛車毎に「千歳村青年会粕谷支部」と書いた紙札を押立て、世話方数名附添うて、朝早く粕谷から練（ね）り出した時、私は思わず青年会の万歳を三唱しました。慰問隊は専ら麴町区に活動して、先方の青年団の協力の下に、水瓜を截（き）り、馬鈴薯をつかみ、手ずから罹災の人々に頒（わか）ち、玄米と味噌で五日過した人々を「生き返える」と悦ばしたそうです。其報告が私共を喜ばせました。斯くてこそ田舎、十七年前都落ちした私共も都に会わず顔があります。

中一日置いて、九月の八日には千歳村全体から牛車六十台の見舞車が、水気沢山の畑のものをまだ余燼（よじん）の熱い湯き切った東京に持って行きました。私も村人甲斐に馬鈴薯百貫を出しました。私の直接労働の果（み）ではありません。金にして貳拾円です。

東京の焼け出されが、続々都落ちして来ます。甲州街道は大部分繃帯（ほうたい）した都落ちの人々でさながら縁日のようでした。途中で根（こん）竭（つ）きて首を縊（くく）ったり、倒れて死んだ者もあります。寿永（じゅえい）の昔の平家都落ち、近くは維新当時の江戸幕府の末路を偲（しの）ぶ光景です。村の何（ど）の家にも避難者の五人三人収容しました。私共の家にも其母者が粕谷出身の縁故から娘の一人を預かりました。田舎が勝ち誇る時が来ました。何と云うても人間は食うて生きる動物です。生きものに食物程大切なものではありません。食物をつくる人は、まさかの時にびくともしない強味があります。東京のあるお邸（やしき）の旦那は、平生権高（けんたか）で、出入りの百姓などに滅多に顔見せたこともありませんでした。今度の震災で、家は焼け残ったが、早速食う物がありません。見舞に来た百姓に旦那がお辞儀の百遍もして、何でもよいから食う物を、と拝（おが）むように頼んだものです。ある避難の家族は、麦（むぎ）がまずいと云うて、「贅沢な」と百姓から、頭ごなしに叱りつけられました。去五月の末まで私共の家に働いて居た隣字のS女の家（やといめ）の傭女（やといめ）が水瓜畑に働いて居ると、裏街道を都落ちの人と見えて母子づれが通りかゝり、水瓜を一つ無心しました。傭人の遠慮して小さなのを一つもいでやると、悦んでそれを持って木蔭に去りました。やがてS女が来たので、傭女は其話をして、あの水瓜は未熟だったかも知れぬと言います。S女は直ぐ大きなよく出来たのをもいで、後追いかけてきました。都落ちの母子は木蔭で未熟の水瓜を白い皮まで喰い尽して居た所でした。「斯様（こんな）にうまい水瓜をはじめて食べました」とS女に悦びをのべたのでした。こんな時にこそ都会住者も自然の懐（ふところ）のうれし味をしみじみ思い知ります。田舎の懐を都に開かせ、都の頭（ず）を自然に下げさせる――震災の働きの一つはこれでした。

それは東京に住む東京人に限りません。十七年来村住居の私共だって、米麦つくらぬ美的百姓は同様です。「或る百姓の家」を出した江渡幸三郎君のような徹底した百姓と、私共のように米麦を買って暮らす村落住者の相違は、斯様な時に顕（あら）われます。私共では年来取りつけの東京四谷

の米屋の米を食います。震災で直ぐ食料の心配が来ました。不時の避難客で、早速村の糧食不足となります。東京には玄米の配給があっても、田舎は駄目です。当時私共の家族は、夫妻に、朝鮮から遊びに来て居た二十歳（はたち）になる妻の姪（めい）、七月に秋田から呼んだ十四の女中、それから焼け出されの十七娘、外に猫一疋でした。丁度収穫を終えたばかりの馬鈴薯と畑に甘藷があるので、差迫っての餓死は兎に角、粒食（りゅうしょく）は直ぐ危くなりました。私共夫妻は朝夕パンで、米飯は午食だけです。パンが切れる。ふかしパンをつくる。メリケン粉は二升以上売ってはくれず、それも直ぐ尽きました。砂糖も同様です。ついでに蠟燭も同断です。朝は粥にして、玉蜀黍（とうもろこし）で補（おぎな）い、米を食い尽し、少々の糯米（もちごめ）をふかし、真黒い饅頭粉（うどんこ）や素麺（そうめん）や、畑の野菜や食えるものは片端（かたっぱし）から食うて、粒食の終はもう眼の前に来ました。いよいよ馬鈴薯、甘藷に落ちつく外ありません。其処に前頭（ぜんけん）のS女が見舞に来ました。彼女は本文「次郎桜」の主人公には季（すえ）の妹で、私共の外遊帰来三年間恒春園に薪水の労を助けた娘です。其長姉Y女も、私共の外遊前二年足らず私共の為に働いてくれたのでした。S女に相談すると、翌日の夕、彼女の長兄のI君が一担（いったん）の食糧を運んでくれました。I君は「次郎桜」の兄者（あにじゃ）で、十七年前私共が千歳村へ引越す時、荷車引いて東京まで加勢に来てくれた村の耶蘇信者四人の其一人、本文に「角田（つのだ）勘五郎（かごろう）の息子（むすこ）」とあるのがそれです。其頃は十六七のここにこした可愛い息子でした。それが適齢になって兵役に出で、満洲守備に行き、帰って結婚してもう四人の子女の父、郷党（きょうとう）のちゃきちゃきです。I君が担（にな）うて来てくれたは、白米一斗、それは自家の飯米（はんまい）を分けてくれたのでした。それから水瓜、甘藍（キャベツ）、球葱（たまねぎ）、球葱は此辺ではよく出来ませんが、青物市場であまり廉（やす）かったからI君が買って来たその裾分（すそわ）けという事でした。玄米でも饅頭粉でもよかった、「働く人の食料を分けてもらうのは気の毒」と私が申すと、「働くから上げられるのです」とI君が昂然（こうぜん）と応（こた）えました。これは確に一本参りました。全くです。働くから自ら養い他を養う事が出来るのです。私共は唯二つ残って居た懐中汁粉（かいちゅうじるこ）をI君に馳走して、色々話しました。千歳村移転当時の話からI君は其時私が諸君に向い、「東京も人間が多過ぎる、あまり頭に血が寄ると日本も脳充血になる、だから私は都を出でて田舎に移る」と申した事を私に想い出さしてくれました。兎に角私共はよくぞ其時都落ちをしました。でなければ私はもうとくに青山あたりの土になって居たかも知れません。十七年を過して、此処（ここ）に斯く在（あ）る事は、本当に感謝です。I君の贈物は肝腎（かんじん）な時に来て、大切なツナギになりました。その一斗の米が終る頃は、四谷の米屋の途（みち）も開けました。

私は最初「みみずのたはこと」の広告に、斯様な告白をしました。

『著者は田舎を愛すれども、都会を捨つる能わず、心窃（ひそか）に都会と田舎の間に架する橋梁（きょうりょう）の其板の一枚たらん事を期す。』

不徹底な言い分のようなのですが、それが私の実情でした。今とても同然です。私は土を愛し、田舎を愛し、土の人なる農を愛しますが、私の愛は都市にも海にもあらゆる人間と其営（いとな）みとを忘るゝ事は出来ません。私は慾張りです。私は一切を愛します。総（そう）じて血のめぐりの好い生体（せいたい）は健全です。病は偏（へん）です。不仁が病です。脳貧血のわるいは、脳充血のわるいに劣りません。私共の農村移住は随分吾儘な不徹底なものでしたが、それですら都鄙の間に通う血の一縷（いちる）となったと思えば、自ら慰むるところがあります。「みみずのたはこと」は自嘲気分を帯びた未熟な産物ですが、大正二年以来十年間に版を改むる百〇七、拾余万部を売り尽し、私共の耳目に触るゝ反響から見るも、農村を自愛させ、すべてに農村を愛さす上に幾分の効があったと知る事は、私共にとって大なる悦喜であります。

私も以前は農村に住んで農になり切れず、周囲に同化しきれぬきまり悪さを「美的百姓」などと自から茶かして居ました。然し其懊惱（おうのう）はもう脱（ぬ）けました。私共は粕谷に腰を据えました。私共は農村に骨を埋（うず）めます。然し私共は所謂農ではありません、私共の鋤はペンです。土は米麦も、草木もそだてます。畑の真中にだって、坊主にされながら赤松が立って居たり、碌に実が生（な）らぬ柿の木さえ秋は美しく紅葉し、裸になっては平気に烏（からす）をとまらして居るではありませんか。私共は九州の土に生れて、彼方此方と移植され、到頭此粕谷へ来た雌雄相生の樹です。随分長い間ぐらついて居ましたが、到頭根づきました。もうちょっとやそっとの風雨が来ても、びくともする事ではありません。あたりの邪魔にならぬ限り伐（き）って薪（まき）にもされず成長をつづける事が出来ようと思えます。

(四)

村の寄合などに稀（たま）に出て、私は諸君の頭の白くなったに毎々（まいまい）驚かされます。驚く私自身が諸君に驚かるゝ程齡（とし）をとりました。全く十七年は短い月日ではありません。私共が引越当年生れた赤ン坊が、もう十七になるのです。赤ン坊が青春男女になり、青年が一人前になり、男女ざかりが初老になり、老人が順繰（じゅんぐ）り土の中に入るも自然の推移（うつり）です。「みみずのたはこと」が出てから十年間に、あの書に顔を出して居る人々も、大分（だいぶん）故人になりました。

今年の六月には、村の牧師下曾根（しもぞね）信守（のぶもり）君を葬りました。六十九歳でした。下曾根さんは旧幕名家の出、伊豆韮山（にらやま）の江川太郎左衛門と相並んで高島秋帆門下の砲術の名人であった下曾根金之丞は父でした。砲術家の三男に生れた下曾根さんは、夙（つと）に耶蘇教信者となり、父とは違った意味の軍人一耶蘇教伝道師になりました。先（せん）にも数年間調布町に住んで伝道し、会堂が建つばかりになって、会津へ転任して行きました。其後調布の耶蘇教が衰微（すいび）し、会堂は千歳村の信者が引取り、粕谷に持って来ました。本文の初に、私共が初めて千歳村に来て見た会堂がそれです。随分見すばらしい会堂でした。村住居はしても、会堂の牧師になる事を私が御免蒙ったので、信者の人々

は昔馴染（むかしなじみ）の下曾根さんをあらためて招聘（しょうへい）したのでした。下曾根さんは其時もう五十を過ぎ、耳が遠く、招かれても働きは思うように出来ぬと断ったそうですが、養老の意味で、たって来てもらったとの事です。私共が村入りの二月（ふたつき）日に下曾根さんは来て、信者仲間の歓迎会には私共も共々お客として招かれたのでありました。私共に代って貧乏籤（びんぼうくじ）をひいてくれた下曾根さんは、十七年間会堂裏（うら）に自炊（じすい）生活（せいかつ）をつづけました。下曾根さんは独身で、身よりも少なく、淋しい人でした。寄る年と共にますます耳は遠くなり、貧乏教会の牧師で自身の貯金も使い果たした後は、随分（ずいぶん）惨（みじめ）な生活でした。私は個人的に少許（すこし）の出金を気まぐれに続けたばかりで、会堂には一切手も足も出ませんでした。下曾根さんは貧しい羊の群を忠実に牧して、よく職務を尽しました。砲術家の出だけに明晰（めいせき）な頭脳の持主でしたが、趣味があって、書道を嗜（たしな）み、俳句を作り、水彩画をかいたり、園芸を楽しんだり、色々に趣味をもって自ら慰めて居りました。乏（とぼ）しい中から村の出金、教会としての中央への義務寄金も心ばかりはしました。亡（な）くなる前には、自身の履歴、形見分けの目録、後の処分の事まで明細に書き遺（のこ）し、洗（あら）うが如き貧しさの中から葬式万端（ばんたん）の費用を払うて余剰（あまり）ある程の貯蓄をして置いた事が後で分かりました。信仰ある、而して流石（さすが）に武士の子らしい嗜（たしなみ）です。下曾根さんは私共の東隣（ひがしどなり）の墓地に葬られました。其葬式には最初私共に千歳村を教えた「先輩の牧師」も東京から来て、「下曾根信守之墓」「我父の家には住家多し」と云う墓標の文字も其人の筆で書かれました。

其葬式には、塚戸小学校の前校長H君も来て居ました。Hさんは越後の人、上野（うえの）の音楽学校の出で、漢文が得意です。明治二十九年に千歳村に来て小学校長となり、在職二十五年の長きに及びました。村人として私共より十二年も前です。私共夫妻が最初千歳村に来て、ある小川の流に菜（な）を洗う女の人に道問うた其れはH夫人であったそうです。私共が外遊から帰って来ると、H君は二十五年の小学校奉仕を罷（や）めて、六十近く新に進出の路を求めねばならぬ苦境に居ました。其後帝大に仕事を見出し、日々村から通うて居ましたが、このたび都合により吉祥寺の長男の家と一つになると謂（い）うて告別に来たのは、つい此新嘗祭の当日でした。地下に他郷に古い顔馴染（かおなじみ）が追々遠くなるのは淋しいものです。

村の名物が段々無くなります。本文の「葬式」に出た粕谷で唯一人の丁髷（ちょんまげ）の佐平（さへい）爺（じい）さんも亡くなり、好人の幸さんも亡くなりました。文ちゃんの爺（じい）さんも亡くなりました。文ちゃんは稼（かせ）ぎ人（にん）で、苦しい中から追々工面（くめん）をよくし、古家ながら大きな家を建て、其家から阿爺（おやじ）の葬式も出しました。「斯様（こん）な家から葬式を出してもらうなんて、殿様だって出来ねえ事だ」と皆が文ちゃんの孝行をほめました。「腫物」に出た石山の婆さんも本家で亡くなりました。それは大正七年でしたが、其前年の暮（くれ）に「腫物」の女主人公、莫連（ばくれん）お広（ひろ）も亡くな

りました。お広さんは石山新家を奇麗に潰（つぶ）して了うた後、馴染（なじみ）の親分と東京に往って居ました。「草とりしても、東京ではおやつに餅菓子が出るよ」なんか村の者に自慢して居ました。其内親分がある寡家（ごけ）に入り浸（びた）りになって、お広さんが其処に泣きわめきの幕を出したり、かかり子の亥之吉が盲啞学校を卒業して一本立になっても母親を構（かま）いつけなかつたり、お広さんの末路は大分困難になって来ました。金に窮すると、石山家に来ては、石山さんの所謂『四両五両といたぶって』行きました。到頭腎臟（じんぞう）が悪くなり、水腫（みずばれ）が出て、調布在の実家で死にました。死ぬまで大きな声で話したりして、見舞に往った天理教信者のおかず媼（ばあ）さんを驚かしたものです。離縁になってなかつたので、お広さんの体（からだ）は矢張石山さんが引取って、こっそり隣の墓地に葬りました。葬式の翌日往って見ると、新しい土饅頭（どまんじゅう）の前に剥（は）げ膳が据（す）えられ、茶碗の水には落葉が二枚浮いて居ました。白木の位配に「新円寂慈眼院恵光大姉（しんえんじゃくじげんいんえこうだいし）」と書いてあります。慈眼院恵光大姉——其処に現われた有無の皮肉に、私は微笑を禁じ得ませんでした。而して寂（さび）しい初冬の日ざしの中に立って、莫連お広の生涯を思い、もっと良い婦人（おんな）になるべき素質をもちながら、と私は残念に思うのでありました。お広さんが死んで、法律上にもいよいよ鰥（やもお）になった厚い唇の久（ひさ）さんは真白い頭をして、本家で働いて居ます。啞の巳代吉は貧しい牧師の金を盗んだり、五宿の女郎を買ったりして居ましたが、今は村に居ません。盲の亥之吉も、季（すえ）の弟も居ません。一人女（ひとりむすめ）のお銀は、立派に莫連の後を嗣いで、今は何処ぞに活躍して居ます。

お広さんを愛したり捨てたりした親分七右衛門爺（じい）さんは、今年亡（な）くなり、而してやはり隣の墓地に葬られました。大きな男でしたが、火葬されたので、送葬（そうそう）の輿（こし）は軽く、あまりに軽く、一盃機嫌で昇（か）く人、送る者、笑い、ざわめき、陽気な葬式が皮肉でした。可惜（あたら）男（おとこ）をと私はまた残念に思うのでありました。

「村入」の条に書いた私共の五人組の組頭（くみがしら）浜田の爺さんも、今年の正月八十で亡くなりました。律義な爺さんの一代にしっかり身上（しんしょう）を持ち上げ、偕白髪（ともしらが）の老夫婦、子、孫、曾孫の繁昌を見とどけてのめでたい往生でした。いつも莞爾々々（にこにこ）して、亡くなる前日まで縄（なわ）を緇（な）うたりせつせと働いて居ました。入棺前、別れに往って見ると、死顔（しがお）もにこやかに、生涯労働した手は節（ふし）くれ立って土まみれのまま合掌して居ました。これは代田（だいた）街道（かいどう）側（わき）の墓地に葬られました。

それから与右衛門さんとお婆さん、「信心なんかしませんや」と言うて居たお婆さんも亡くなりました。根気のよいお婆さんで、私も妻も毎々（まいまい）話しこまれて弱ったものです。居なくなつて、淋しくなりました。「否（いな）と云へど強（し）ふるしひのがしひがたり、ちかごろ聞かずにわれ恋（こ）ひにけり」と万葉（まんよう）の歌人が曰（い）うた

通りです。私共が外遊から帰ると、お婆さんは「四国（しこく）西国（さいごく）しなすったってねえ」と感にたえたように妻に云うて居ましたが、今は彼女自身遠く旅立ってしまいました。彼女は文ちゃんの爺さんが葬られて居る北の小さな墓地に葬られました。其処にはお婆さんには孫、与右衛門さんには嗣子（あととり）であったきつい気の忠（ちゅう）さん、海軍の機関兵にとられ、肺病になって死んだ忠さんも葬られて居ます。

草履作りが名人の莞爾々々（にこにこ）した橋本のお爺さん、お婆さん、其隣の大尽の杉林のお婆さん、亡くなった人々も二三に止まりません。年寄りが逝（ゆ）くのは順ですが、老少不定の世の中、若い者、子供、赤ン坊の亡くなったのも一人や二人でありませぬ。前に言うた忠さん、それから千歳村墓地敷地買収問題の時、反対側（がわ）の頭目（とうもく）となって草鞋（わらじ）がけになって真先に働いたしっかり者の作さんも亡くなりました。半歳立たぬに、作さんの十六になる一人女も亡くなりました。私共が粕谷へ引越しの前日、東京からバケツと草箒（くさぼうき）持参で掃除に来た時、村の四辻（よつつじ）で女の子を負（おぶ）った色の黒い矮（ちいさ）い六十爺さんに道を教えてもらいました。お爺さんは「村入」で「わしとおまえは六合の米よ、早く一しょになればよい」と中音（ちゅうおん）に歌うた寺本の勘さん、即ち作さんの阿爺（おとっさん）で、背の女兒は十六で亡くなった其孫女でした。

まだ気の毒な亡者（もうじゃ）も、より気の毒な生き残りも二三あります。

それ等を外にしては、石山さん、勘爺さん、其弟の辰爺さん、仁左衛門さん、与右衛門さん、武太さん、田圃向うの信心家のお琴婆さん、天理教のおかず婆さん、其他の諸君も皆無事です。土の下、土の上、私共の択んだ故郷粕谷は上にも下にも追々と栄えて行きます。都落ちして其粕谷にすでに十七年を過ごして、私が五十六、妻が五十、頭は追々白くなって、気は恒春園の恒に若く、荒れた園圃と朽ち行く家の中にやがて一陽来復の時を待ちつゝ日一日と徐に私共の仕事をすすめて居ます。

書きたい事に切りがありませんが、其は他日の機会に譲って、読者諸君の健康を祝しつつここに一先（ひとま）ず此手紙の筆を擱（さしお）きます。

大正十二年十二月三十日

東京府 北多摩郡千歳村 粕谷
恒春園に於て 徳富健次郎

附録

ひとりごと

蝶の語れる

吾（われ）、毛虫（けむし）たりし時、醜（みにく）かりき。吾、蝶（てふ）となりて舞（ま）へば人（ひと）美（うつく）しと讚（ほ）む。人の美しと云ふ吾は、曩（その）昔（かみ）の醜かりし毛虫ぞや。

吾、醜かりし時、人（ひと）吾（われ）を疎（うと）み、忌（い）み、

嫌ひて避け、見る毎（ごと）に吾を殺さんとしぬ。吾、美しと云はるゝに到れば、人（ひと）争（あそ）うて吾を招く。吾れの変れる乎（か）。人の眼（まなこ）なき乎。

吾、醜しと見られし時、吾（わが）胸（むね）のいたみて、さびしく泣きたることいかばかりぞや。其（その）時（とき）君（きみ）独（ひと）り吾を憐みぬ。

君、吾が毛虫たりし時、吾を憐みて捨てざりき。故に蝶となれる吾は、今翼（つばさ）ある花となりて、願はくは君が為に君の花園に舞はん。

旅の日記から 熊の足跡

勿来（なこそ）

連日（れんじつ）の風雨（ふうう）でとまった東北線が開通したと聞いて、明治四十三年九月七日の朝、上野（うえの）から海岸線の汽車に乗った。三時過ぎ関本（せきもと）駅で下り、車で平潟（ひらがた）へ。

平潟は名だたる漁場（りょうば）である。湾の南方を、町から当面（とうめん）の出島（でしま）をかけて、蝦蛄（しゃこ）の這（は）う様にずらり足杭（あしくい）を見せた栈橋（さんばし）が見ものだ。雨あがりの漁場、唯もう腥（なまぐさ）い、腥い。静海亭（せいかいてい）に荷物を下ろすと、宿の下駄傘を借り、車で勿来関址（なこそせきあと）見物に出かける。

町はずれの隧道（とんねる）を、常陸（ひたち）から入って磐城（いわき）に出た。大波小波韃々（どうどう）と打寄する淋しい浜街道（はまかいどう）を少し往って、唯有（とあ）る茶店（さてん）で車を下りた。奈古曾（なこそ）の石碑（せきひ）の刷物（すりもの）、松や貝の化石、画（ゑ）がきなど売って居る。車夫（くるまや）に鶴子（つるこ）を負（おぶ）ってもらい、余等は滑（すべ）る足元（あしもと）に気をつけ気をつけ鉄道線路を踏切って、山田の畔（くろ）を関跡（せきあと）の方へと上る。道も狭（せ）に散るの歌に因（ちな）んで、芳野桜（よしのざくら）を沢山植えてある。若木（わかき）ばかりだ。路（みち）、山に入って、萩、女郎花（おみなえし）、地榆（われもこう）、桔梗（ききょう）、苧萱（かるかや）、今を盛りの満山（まんざん）の秋を踏み分けて上（のぼ）る。車夫（くるまや）が折ってくれた色濃い桔梗の一枝（ひとえだ）を鶴子は握（にぎ）って負（おぶ）られて行く。

浜街道の茶店から十丁程上ると、関の址（あと）に来た。馬の脊（せ）の様な狭い山の上のやゝ平凹（ひらくぼ）になった鞍部（あんぶ）、八幡（はちまん）太郎（たろう）弓かけの松、鞍かけの松、など云う老大（ろうだい）な赤松黒松が十四五本、太平洋の風に吹かれて、翠（みどり）の梢（こずえ）に颯々（さっさつ）の音を立てゝ居る。五六百年の物では無い。松の外に格別古い物はない。石碑は嘉永（かえい）のものである。茶屋（ちゃや）がけがしてあるが、夏過ぎた今日、もとより遊人（ゆうじん）の影も無く、茶博士（さほかせ）も居ない。弓弭（ゆはず）の清水（しみず）を掬（むす）んで、弓かけ松の下に立って眺める。西（にし）は重疊（ち

ようじょう)たる磐城の山に雲霧(くもぎり)白く渦(うず)まいて流れて居る。東は太平洋、雲間(くもま)漏(も)る夕日の鈍(にぶ)い光(ひかり)を浮べて唯とろりとして居る。鯉舟(かつおぶね)の櫓拍子(ろびょうし)が仄(ほの)かに聞こえる。昔奥州へ通う浜街道は、此山の上を通ったのか。八幡太郎も花吹雪(はなふぶき)の中を馬で此処(ここ)を通ったのか。歌は残って、関の址と云う程の址はなく、松風(まつかぜ)ばかり颯々(さっさつ)と吟(ぎん)じて居る。人の世の千年は実に造作(ぞうさ)もなく過ぎて了う。茫然(ぼうぜん)と立って居ると、苧草(かりくさ)を背(せ)一(いっ)ぱいにゆりかけた馬を追うて、若い百姓(ひやくしょう)が二人峠の方から下りて来て、余等の前を通って、また向(むこう)の峰(みね)へ上って往った。

日の暮(くれ)に平瀧の宿に帰った。湯はぬるく、便所はむさく、魚は鮮(あたら)しいが料理がまずくて腥(なまぐさ)く、水を飲もうとすれば瀉臭(かたくさ)く、加之(しかも)夥(おびただ)しい蚊(か)が真黒(まっくろ)にたかる。早々(そうそう)蚊帳(かや)に逃(に)げ込(こ)むと、夜半(よなか)に雨が降り出して、頭(あたま)の上に漏(も)って来るので、遽(あわ)てて床(とこ)を移(うつ)すなど、わびしい旅の第一夜であった。

浅虫

九月九日から十二日まで、奥州(おうしゅう)浅虫(あさむし)温泉滞留(たいりゅう)。

背後(うしろ)を青森行の汽車が通る。枕(まくら)の下で、陸奥湾(むつわん)の緑玉潮(りょくぎょくちょう)がぴたぴた言(ものい)う。西には青森の人煙指(ゆびさ)す可く、其背(うしろ)に津軽(つがる)富士の岩木山が小さく見えて居る。

青森から芸妓連(げいしゃづれ)の遊客が歌うて曰く、一夜(いちや)添(そ)うてもチマはチマ。

五歳(いつつ)の鶴子初めて鴟(かもめ)を見て曰く、阿母(おかあさん)、白い鳥(からす)が飛んで居るわねえ。

旅泊(りよはく)のつれづれに、浜から拾(ひろ)うて来た小石で、子供一人成人(おとな)二人でおはじきをする。余が十歳の夏、父母に伴(ともな)われて舟で薩摩境(さつまざかい)の祖父を見舞に往った時、唯(たった)二十五里の海上を、風が悪くて天草の島に彼此十日も舟(ふな)がかりした。昔話も聞き尽し、永い日を暮らしかねて、六十近い父と、五十近い母と、十歳の自分で、小石を拾(ひろ)うておはじきをした。今日(きょう)不器用な手に小石を数えつゝ、不図其事を思い出した。

海岸を歩けば、帆立貝(ほたてがい)の殻(から)が山の如く積んで居る。浅虫で食ったものゝ中で、帆立貝の柱の天麩羅(てんぷら)はうまいものであった。海浜随処に玫瑰(まいかい)の花が紫に咲き乱れて汐風に香(かお)る。

野糞（のぐそ）放（ひ）る外（そと）が浜辺（はまべ）や玫瑰花（まいくわいくわ）

大沼

（一）

津軽（つがる）海峡を四時間に駛（は）せて、余等を青森から函館へ運んでくれた梅ヶ香丸は、新造の美しい船であったが、船に弱い妻は到頭酔うて了うた。一夜函館埠頭（ふとう）の朴（きと）旅館に休息しても、まだ頭が痛いと言う。午後の汽車で、直ぐ大沼へ行く。

函館停車場は極（ごく）粗朴（そぼく）な停車場である。待合室では、真赤に喰（くら）い酔うた金欄（きんらん）の袈裟（けさ）の坊さんが、仏蘭西人らしい髯（ひげ）の長い宣教師を捉（つかま）えて、色々管（くだ）を捲いて居る。宣教師は笑いながら好（い）い加減（かげん）にあしらって居る。

札幌（さっぽろ）行の列車は、函館の雑沓（ざつとう）をあとにして、桔梗、七飯（なないい）と次第に上って行く。皮をめくる様に頭が軽くなる。臥牛山（がぎゅうざん）を心（しん）にした巴形（ともえなり）の函館が、鳥瞰図（ちょうかんず）を展（の）べた様に眼下に開ける。「眼に立つや海青々と北の秋」左の窓（まど）から見ると、津軽海峡の青々とした一帯の秋潮（しゅうちょう）を隔て、遙（はるか）に津軽の地方が水平線の上に浮（う）いて居る。本郷へ来ると、彼酔僧（すいそう）は汽車を下りて、富士形の黒帽子を冠（かぶ）り、小形の緑絨氈（みどりじゅうたん）のカバンを提（さ）げて、蹣跚（まんさん）と改札口を出て行くのが見えた。江刺（えさし）へ十五里、と停車場の案内札に書いてある。函館から一時間余にして、汽車は山を上り終え、大沼駅を過ぎて大沼公園に来た。遊客（ゆうかく）の為に設けた形（かた）ばかりの停車場である。こゝで下車。宿引（やどひき）が二人待って居る。余等は導（みちび）かれて紅葉館の旗（はた）を艫（とも）に立てた小舟に乗った。宿引は一礼（いちれい）して去り、船頭は軋（ぎい）と櫓声（ろせい）を立て、漕（こ）ぎ出す。

黄金色（こがねいろ）に藻の花の咲く入江（いりえ）を出ると、広々とした沼の面（おも）、絶えて久しい赤禿（あかはげ）の駒が岳が忽眼前に躍（おど）り出た。東の肩からあるか無いかの煙（けぶり）が立上（のぼ）って居る。余が明治三十六年の夏来た頃は、汽車はまだ森までしかかゝって居なかった。大沼公園にも粗末（そまつ）な料理屋が二三軒水際（みぎわ）に立って居た。駒が岳の噴火も其後の事である。然し汽車は釧路（くしろ）まで通うても、駒が岳は噴火しても、大沼其ものは旧（きゅう）に仍（よ）って晴々（はればれ）した而して寂（しず）かな眺である。時は九月の十四日、然し沼のあたりのイタヤ楓（かえで）はそろそろ染（そ）めかけて居る。処々檜（なら）や白樺（しらかば）にからんだ山葡萄（やまぶどう）の葉が、火の様に燃えて居る。空気は澄み切って、水は鏡の様だ。夫婦島（めおとじま）の方に帆船が一つ駛（はし）って居る。櫓声静に我舟の行くまゝに、鴨（かも）が飛び、千鳥（ちどり）が飛ぶ。やがて

舟は一の入江に入って、紅葉館の下に着いた。女中が出迎える。夥（おびただ）しくイタヤ楓の若木を植えた傾斜を上って、水に向う奥の間（ひとま）に案内された。

都の紅葉館は知らぬが、此紅葉館は大沼に臨（のぞ）み、駒が岳に面し、名の如く無数の紅葉樹に囲まれて、瀟洒（さっぱり）とした紅葉館である。殊に夏の季節も過ぎて、今は宿もひっそりして居る。薪（まき）を使った鉱泉に入って、古めかしいランプの下、物静かな女中の給仕で沼の鯉（こい）、鮒（ふな）の料理を食べて、物音一つせぬ山の上、水の際（きわ）の静かな夜の眠（ねむり）に入った。

真夜中（まよなか）にごろごろと雷が鳴った。雨戸の隙（すき）から雷が光った。而して颯（ざあ）と雨の音がした。起きて雨戸を一枚繰（く）って見たら、最早（もう）月が出て、沼の水に螢（ほたる）の様に星が浮いて居た。

（二）

明方（あけがた）にはまたぼつぼつ降って居たが、朝食（あさめし）を食うと止んだ。小舟で釣（つり）に出かける。汽車の通うセバットの鉄橋の辺（あたり）に来ると、また一しきりざあと雨が来た。鉄橋の蔭（かげ）に舟を寄せて雨宿（あまやど）りする間もなく、雨は最早過ぎて了うた。此辺は沼の中でもやゝ深い。小沼の水が大沼に流れ入るので、水は川のように動いて居る。いくら釣っても、目（め）ざす鮒（ふな）はかゝらず、ゴタルと云う魛（はぜ）の様な小魚（こざかな）ばかり釣れる。舟を水草（みずくさ）の岸に着（つ）けさして、イタヤの薄紅葉（うすもみじ）の中を彼方（あち）此方（こち）と歩いて見る。下生（したばえ）を奇麗に払った自然の築山（つきやま）、砂地の踏心地（ふみごこち）もよく、公園の名はあっても、あまり人巧（じんこう）の入って居ないのありがたい。駒が岳のよく見える処で、三脚を据（す）えて、十八九の青年が水彩写生（すいさいしゃせい）をして居た。駒が岳に雲が去来（きょらい）して、沼の水も林も倏忽（たちまち）の中に翳（かげ）ったり、照ったり、見るに面白く、写生に困難らしく思われた。時が移るので、釣を断念し、また舟に上って島めぐりをする。大沼の周囲（めぐり）八里、小沼を合せて十三里、昔は島の数が大小百四十余もあったと云う。中禅寺の幽凄（ゆうせい）でもなく、霞が浦の淡蕩（たんとう）でもなく、大沼は要するに水を淡水にし松を檜（なら）白樺（しらかば）其他の雑木にした松島である。沼尻は瀑（たき）になって居る。沼には鯉、鮒、鱒（どじょう）ほか産しない。今年銅像を建てたと云う大山島、東郷島がある。昔此辺の領主であったと云う武家の古い墓が幾基（いくつ）も立って居る島もあった。夏は好い遊び場であろう。今は寂しいことである。それでも、学生の漕（こ）いで行く小さなボートの影や、若い夫婦の遊山舟（ゆさんぶね）も一つ二つ見えた。舟を唯有（とあ）る岸に寄せて、殊（こと）に美しい山葡萄の紅葉を摘んで宿に帰った。

午後は画（え）はがきなど書いて、館の表門から陸路停車場に投函（とうかん）に往った。軟（やわ）らかな砂地に下駄（ふ）み込んで、葦

(あし) やさまざまの水草の茂(しげ)った入江の仮橋を渡って行く。やゝ色づいた樺(かば)、檜、イタヤ、などの梢(こずえ)から尖(とが)った頭の楮(あか)い駒が岳が時々顔を出(だ)す。寂(さび)しい景色である。北海道の気が総身(そうみ)にしみて感ぜられる。

夕方館の庭から沼に突き出た岬(みさき)の鼻で、細君が石に腰かけて記念に駒が岳の写生をはじめた。余は鶴子と手帖の上を見たり、附近(あたり)の林で草花を折ったり。秋の入り日の瞬(またた)く間に落ちて、山影水光(さんえいすいこう)見るが中に変って行く。夕日の名残(なごり)をとどめて楮(あか)く輝やいた駒が岳の第一峰が灰がかかった色に褪(さ)めると、つい前の小島も紫から紺青(こんじょう)に変って、大沼の日は暮れて了うた。細君はまだスケッチの筆を動かして居る。黯青(あんせい)に光る空。白く光る水。時々ポチャンと音して、魚がはねる。水際(みぎわ)の林では、宿鳥(ねどり)が物に驚いてがさがさ飛び出す。ブヨだか蚊だか小さな声で唸(うな)って居る。

「到頭出来なかった」ぱたんと画具箱(えのぐばこ)の蓋(ふた)をして、細君は立ち上った。鶴子を負(お)う可く、蹲(しゃが)んで後(うしろ)にまわす手先に、ものが冷(ひ)やりとする。最早露が下りて居るのだ。

札幌へ

九月十六日。大沼を立つ。駒が岳を半周(はんしゅう)して、森に下って、噴火湾(ふんかわん)の晴潮を飽(あ)かず汽車の窓から眺める。室蘭通(むろらんがよ)いの小さな汽船が波にゆられて居る。汽車は駒が岳を背(うしろ)にして、ずうと噴火湾に沿(そ)うて走る。長万部(おしゃまんべ)近くなると、湾を隔(へだ)てゝ白銅色の雲の様なものをむらむらと立てゝ居る山がある。有珠山(うずさん)です、と同室の紳士は教えた。

湾をはなれて山路にかゝり、黒松内(くろまつない)で停車(ていしゃ)蕎麦(そば)を食う。蕎麦の風味が好い。蝦夷(えぞ)富士と心がけた蝦夷富士を、蘭越(らんごえ)駅で仰ぐを得た。形容端正、絶頂まで樹木を纏(まと)うて、秀潤(しゅうじゅん)の黛色(たいしよく)滴(したた)るばかり。頻(しきり)に登って見たくなかった。車中知人〇君の札幌(さっぽろ)農科大学に帰るに会った。夏期休暇に朝鮮漫遊して、今其帰途である。余市(よいち)に来て、日本海の片影(へんえい)を見た。余市は北海道林檎(りんご)の名産地。折からの夕日に、林檎畑は花の様な色彩を見せた。あまり美しいので、売子(うりこ)が持て来た網囊入(あみぶくろいり)のを二囊買った。

〇君は小樽(おたる)で下り、余等は八時札幌に着いて、山形屋に泊った。

中秋

十八日。朝、旭川(あさひがわ)へ向けて札幌を立つ。

石狩(いしかり)平原は、水田已に黄(き)ばんで居る。其間に、九月中旬まだ小麦の収穫をして居るのを見ると、また北海道の気もちに復(か)

えった。

十時、汽車は隧道（とんねる）を出て、川を見下ろす高い崖上（がいじょう）の停車場にとまった。神居古潭（かむいこたん）である。急に思立って、手荷物諸共（もろとも）遽（あわ）てゝ汽車を下りた。

改築中で割栗石（わりぐりいし）狼藉（ろうぜき）とした停車場を出て、茶店（さてん）で人を雇うて、鶴子と手荷物を負（お）わせ、急勾配（きゅうこうばい）の崖を川へ下りた。暗緑色（あんりょくしょく）の石狩川が汪汪（おうおう）と流れて居る。両岸から鉄線（はりがね）で吊（つ）ったあぶなげな仮橋が川を跨（また）げて居る。橋の口に立札がある。文言（もんごん）を読めば、曰く、五人以上同時に渡（わた）る可からず。

恐（お）ず恐ず橋板を踏むと、足の底（そこ）がふわりとして、一足毎（ひとあしごと）に橋は左右に前後に上下に揺（ゆ）れる。飛驒（ひだ）山中、四国の祖谷（いや）山中などの藤蔓（ふじづる）の橋の渡り心地がまさに斯様（こんな）であろう。形ばかりの鉄線（はりがね）の欄（てすり）はあるが、つかまってゆるゆる渡る気にもなれぬ。下の流れを見ぬ様にして一息（ひといき）に渡った。橋の長さ二十四間。渡り終って一息ついて居ると、炭俵（すみだわら）を負うた若い女が山から下りて来たが、佇（たたず）む余等に横目をくれて、飛ぶが如く彼吊橋（つりばし）を渡って往った。

山下道（やましたみち）を川に沿うて溯（さかのぼ）ること四五丁余、細い煙突から白い煙を立てゝ居る木羽茸（こっばぶき）のきたない家に来た。神居古潭の鉱泉宿である。取りあえず裏二階の無縁畳（へりなしだたみ）の一室に導かれた。やがて碁をうって居た旭川の客が帰って往ったので、表二階の方に移った。硫黄の臭（におい）がする鉱泉に入って、二階にくつろぐ。麦稈帽（むぎわらぼう）の書生三人、庇（ひさし）髪（かみ）の女学生二人、隣室（となりま）に遊びに来たが、次ぎの汽車で直ぐ帰って往った。石狩川の音が颯々（さあさあ）と響く。川向うの山腹の停車場で、鎚音（つちおと）高く石を割って居る。轟（ごう）と云う響をこだまにかえして、稀（まれ）に汽車が向山を通って行く。寂しい。昼飯に川魚をと注文したら、石狩川を前に置（お）いて、罐詰（たけのこ）の筍（たけのこ）の卵（たまご）とじなど食わした。

飯後（はんご）神居古潭を見に出かける。少し上流の方には夫婦岩（めおといわ）と云う此辺の名勝があると云う。其方へは行かず、先刻（さつき）渡った吊橋の方に往って見る。橋の上手（かみて）には、檜（なら）の大木が五六本川面（かわづら）へ差かゝって居る。其蔭（かげ）に小さな小屋がけして、杣（そま）が三人停車場改築工事の木材を挽（ひ）いて居る。橋の下手（しもて）には、青石岬々（がが）たる岬角（こうかく）が、橋の袂から斜（はす）に川の方へ十五六間突出（つきで）て居る。余は一人尖（とが）った巖角（がんかく）を踏み、荊棘（けいきょく）を分け、岬（みさき）の突端に往った。岩間には其処（そこ）此処（ここ）水溜（みずたまり）があり、紅葉した蔓草（つるくさ）が岩に搦（から）んで居る。出鼻（でびし）に立って眺める。川向う一帯、直立三四百尺もあろうかと思

わるゝ雑木山（ぞうきやま）が、水際から屏風（びょうぶ）を立てた様に聳（そび）えて居る。其中腹を少しばかり切り拓（ひら）いて、こゝに停車場が取りついて居る。檣（ほぼしら）の様な支柱を水際の崖（がけ）から隙間（すきま）もなく並べ立てゝ、其上に停車場は片側（かたかわ）乗って居るのである。停車場の右も左も隧道（とんねる）になって居る。汽車が百足（むかで）の様に隧道を這（は）い出して来て、此停車場に一息（ひといき）つくかと思うと、またぞろぞろ這い出して、今度は反対の方に黒く見えて居る隧道の孔（あな）に吸（す）わるゝ様に入っていく。向う一帯の雑木山は、秋まだ浅くして、見る可き色もない。眼は終に川に落ちる。丁余（ちょうよ）の上流では白波（しらなみ）の瀬をなして騒いだ石狩川も、こゝでは深い青黝（あおぐろ）い色をなして、其処（そこ）此処に小さな渦（うず）を巻き巻き彼吊橋の下を音もなく流れて来て、一部は橋の袂（たもと）から突出た巖（いわ）に礙（さまた）げられてこゝに淵（ふち）を湛（たた）え、余の水は其まゝ押流して、余が立って居る岬角（こうかく）を摩（す）って、また下手対岸の蒼黒い巖壁（がんぺき）にぶつかると、全川の水は捩（ね）じ曲（ま）げられた様に左に折れて、また滔々（とうとう）と流して行（ゆ）く。去年の出水には、石狩川が崖上（がけうえ）の道路を越して鉱泉宿まで来たそうだ。此（この）窄（せま）い山の峽（かい）を深さ二丈もある泥水が怒号（どごう）して押下った当時の凄（すさま）じさが思われる。今は其れ程の水勢は無いが、水を見つめて居ると流石（さすが）に凄（すご）い。橋下の水深は、平常（ふだん）二十余尋（ひろ）。以前は二間もある海の鯨（さめ）がこゝまで上って来たと云う。自然児（しぜんじ）のアイヌがさゝげた神居古潭（かむいこたん）の名も似（に）つかわしく思われる。

夕飯後（ゆうめしご）、ランプがついて戸がしまると、深い深い地の底（そこ）にでも落ちた様で、川音がますます耳について寂しい。宿から萩（はぎ）の餅を一盃（ひとはち）くれた。今宵（こよい）は中秋（ちゅうしゅう）十五夜であった。北海道の神居古潭で中秋に逢（あ）うも、他日の思出の一であろう。雨戸を少しあけて見たら、月は生憎（あいにく）雲をかぶって、朦朧（もうろう）とした谷底を石狩川が唯颯（さあ）、颯（さあ）と鳴って居る。

名寄

九月十九日。朝神居古潭（かむいこたん）の停車場から乗車。金欄（きんらん）の袈裟（けさ）、紫衣（しえ）、旭川へ行く日蓮宗の人達で車室は一ぱいである。旭川で乗換（のりか）え、名寄（なよろ）に向う。旭川からは生路である。

永山（ながやま）、比布（びっぷ）、蘭留（らんる）と、眺望（ながめ）は次第に淋しくなる。紫蘇（しそ）ともつかず、麻でも無いものを茹（ゆ）って畑に乾（ほ）してあるのを、車中の甲乙（たれかれ）が評議して居たが、薄荷（はっか）だと丙が説明した。

やがて天塩（てしお）に入る。和寒（わっさむ）、剣淵（けんぶち）、士別（しべつ）あたり、牧場かと思わるゝ広漠（こうぼく）たる草地一面霜

枯（しもが）れて、六尺もある虎杖（いたどり）が黄葉美しく此処其処に立って居る。所謂泥炭地（でいたんち）である。車内の客は何れも惜しいものだと舌鼓（したつづみ）うつ。

余放吟して曰く、

泥炭地耕すべくもあらぬとふさはれ美し虎杖（いたどり）の秋

土別では、共楽座（きょうらくざ）など看板を上げた木葉茸（こっぱぶき）の劇場が見えた。

午後三時過ぎ、現在の終点駅名寄着。丸石旅館に手荷物を下ろし、茶一ぱい飲んで、直ぐ例（れい）の見物に出かける。

旭川平原をずっと縮（ちぢ）めた様な天塩川の盆地（ぼんち）に、一握（ひとにぎ）りの人家を落した新開町。停車場前から、大通りを鍵（かぎ）の手に折れて、木羽茸が何百か並んで居る。多いものは小間物屋、可なり大きな真宗（しんしゅう）の寺、天理教会、清素（せいそ）な耶蘇教会堂も見えた。店頭（みせさき）で見つけた真桑瓜（まくわうり）を買って、天塩川に往って見る。可なりの大川、深くもなさそうだが、川幅一ぱい茶色の水が颯々（さあさあ）と北へ流れて居る。鉄線（はりがね）を引張った渡舟がある。余等も渡って、少し歩いて見る。多いものはブヨばかり。倒れ木に腰かけて、路をさし覆う七つ葉の蔭で、真桑瓜を剥（む）いた。甘味の少ないは、争われぬ北である。最早（もう）日が入りかけて、薄（うす）ら寒く、秋の夕（ゆうべ）の淋しさが人少なの新開町を押かぶせる様に四方から包んで来る。二（ふた）たび川を渡って、早々宿に帰る。町の真中（まんなか）を乗馬の男が野の方から駈（かけ）を追うて帰って来る。馬蹄（ばてい）の音が名寄中（なよろじゅう）に響き渡る。

宿の主人は讚岐（さぬき）の人で、晩食（ばんめし）の給仕に出た女中は愛知の者であった。隣室（となりま）には、先刻（さっき）馬を頼んで居た北見の農場に帰る男が、客と碁をうって居る。按摩（あんま）の笛が大道を流して通る。

春光台

明治三十六年の夏、余は旭川まで一夜泊（いちやどまり）の飛脚旅行（ひきゃくりょこう）に来た。其時の旭川は、今の名寄よりも淋しい位の町であった。降りしきる雨の中を車で近文（ちかぶみ）に往って、土産話（みやげばなし）にアイヌの老酋（ろうしゅう）の家を訪うて、イタヤのマキリなぞ買って帰った。余は今車の上から見廻（みまわ）して、当年のわびしい記憶を喚起（よびおこ）そうとしたが、明治四十三年の旭川から七年前の旭川を見出すことは成功しなかった。

余等は市街を出ぬけ、石狩川を渡り、近文のアイヌ部落を遠目に見て、第七師団の練兵場（れんぺいじょう）を横ぎり、車を下りて春光台（しゅんこうだい）に上った。春光台は江戸川を除いた旭川の瀉（こう）の台（だ

い)である。上川(かみかわ)原野を一目に見て、旭川の北方に連墨の如く蟠居(ばんきょ)して居る。丘上(おかうえ)は一面水晶末の様な輝々(きらきら)する白砂、そろそろ青葉の縁(ふち)を樺(かば)に染(そ)めかけた大きな榊樹(かしわのき)の間を縫うて、幾条の路がうねって居る。直ぐ眼下(がんか)は第七師団である。黒んだ大きな木造(もくぞう)の建物、細長い建物、一尺の馬が走ったり、二寸の兵が歩(ある)いたり、赤い旗が立ったり、喇叭(らっぱ)が鳴ったりして居る。日露戦争凱旋(がいせん)当時、此丘上(おかのうえ)に盛大な師団招魂祭(しょうこんさい)があって、芝居、相撲、割れる様な賑合(にぎわい)の中に、前夜恋人(こいびと)の父から絶縁の一書を送られて血を吐く思の胸を抱いて師団の中尉寄生木(やどりぎ)の篠原良平が見物に立まじったも此春光台であった。

余は見廻わした。丘の上には余等の外に人影も無く、秋風がばさりばさり榊(かしわ)の葉を揺(うご)かして居る。

春光台腸(はらわた)断(た)ちし若人(わこうど)を
偲(しの)びて立てば秋の風吹く

余等は春光台を下(お)りて、一兵卒に問うて良平が親友(しんゆう)小田中尉の女気無(おんなげな)しの官舎を訪い、暫(しば)らく良平を語った。それから良平が陸軍大学の予備試験に及第しながら都合上後廻わしにされたを憤(いきどお)って、硝子窓(がらすまど)を打破ったと云う、最後に住んだ官舎の前を通った。其は他の下級将校官舎の如く、板塀(いたべい)に囲われた見すばらしい板葺(いたぶき)の家で、垣(かき)の内には柳が一本長々と枝(えだ)を垂(た)れて居た。失恋の彼が苦しまぎれに渦巻の如く無暗に歩き廻った練兵場は、曩日(のうじつ)の雨で諸処水溜りが出来て、紅と白の苜蓿(うまごやし)の花が其処此処に叢(むら)をなして咲いて居た。

釧路

(一)

旭川に二夜(ふたよ)寝て、九月二十三日の朝釧路(くしろ)へ向う。釧路の方へは全くの生路である。

昨日石狩岳(いしかりだけ)に雪を見た。汽車の内も中々寒い。上川(かみかわ)原野を南方へ下って行く。水田が黄ばんで居る。田や畑の其処(そこ)此処(ここ)に焼(や)け残りの黒い木の株(かぶ)が立って居るのを見ると、開(ひら)け行く北海道にまだ死に切れぬアイヌの悲哀(かなしみ)が身にしみる様だ。下富良野(しもふらの)で青い十勝岳(とちかだけ)を仰ぐ。汽車はいよいよ夕張と背合わせの山路(やまじ)に入って、空知川(そらちがわ)の上流を水に添(そ)うて溯(さかのぼ)る。砂白く、水は玉よりも緑である。此辺は秋已に深く、万樹(ばんじゅ)霜(しも)を閲(けみ)し、狐色になった樹々(きぎ)の間に、イタヤ楓(かえで)は火の如く、北海道の銀杏なる桂は黄の焰(ほのお)を上げて居る。旭川から五時間余走って、汽車は狩勝(かりかつ)駅に来た。石狩(いしかり)十勝(とちか)の境(さかい)である。余は窓から首を出して左の

立札（たてふだ）を見た。

狩勝停車場 海拔一千七百五十六呎（フィート）、一二
狩勝トンネル 延長参千九呎（フィート）六吋（インチ）
釧路百十九哩（まいる）八分（ぶ）
旭川七十二哩三分
札幌百五十八哩六分
函館三百三十七哩五分
室蘭二百二十哩

三千呎（フィート）の隧道（とんねる）を、汽車は石狩から入って十勝へ出た。此れからは千何百呎の下りである。最初蝦夷松楸松の翠（みどり）に秀（ひい）であるいは白く立枯（たちか）るゝ峰を過ぎて、障るものなき辺（あたり）へ来ると、軸物の大俯瞰図のするすると解けて落ちる様に、眼は今汽車の下りつゝある霜枯（しもがれ）の萱山（かややま）から、青々とした裾野につゞく十勝の大平野を何処までもずうと走って、地と空（そら）と融（と）け合う辺（あたり）にとまった。其処（そこ）に北太平洋が潜（ひそ）んで居るのである。多くの頭が窓から出て眺める。汽車は尾花（おばな）の白く光る山腹を、波状を描（か）いて蛇の様にのたくる。北東の方には、石狩、十勝、釧路、北見の境上（きょうじょう）に蟠（わだかま）る連嶺（れんれい）が青く見えて来た。南の方には、日高境の青い高山（こうざん）が見える。汽車は此等の山を右の窓から左の窓へと幾回か転換して、到頭平野に下りて了うた。

当分は櫛（かしわ）の林が迎えて送る。追々大豆畑が現われる。十勝は豆の国である。旭川平原や札幌深川間の汽車の窓から見る様な水田は、まだ十勝に少ない。帯広（おびひろ）は十勝の頭脳（ずのう）、河西（かさい）支庁（しちょう）の処在地（しよざいち）、大きな野の中の町である。利別（としべつ）から芸者（げいしゃ）雛妓（おしゃく）が八人乗った。今日網走線（あばしりせん）の鉄道が湊別（りくんべつ）まで開通した其開通式に赴くのである。池田駅は網走線の分岐点（ぶんぎてん）、球燈、国旗、満頭飾（まんとうしょく）をした機関車なども見えて、真黒な人ばかりだ。汽車はこゝで乗客の大部分を下ろし、汪々（おうおう）たる十勝川の流れに暫（しばら）くは添うて東へ走った。時間が晩（おく）れて、浦幌（うらほろ）で太平洋の波の音を聞いた時は、最早車室（しゃしつ）の電燈がついた。此処から線路は直角をなして北上し、一路断続（だんぞく）海の音を聞きつゝ、九時近くくたびれ切って釧路に着いた。車に揺られて、十九日の欠月（けつげつ）を横目に見ながら、夕汐（ゆうしお）白く漫々（まんまん）たる釧路川に架した長い長い幣舞橋（ぬさまいばし）を渡り、輪島屋（わじまや）と云う宿に往った。

（二）

あくる日飯（めし）を食うと見物に出た。釧路町は釧路川口の両岸に跨（またが）って居る。停車場所在の側（かわ）は平民町で、官庁、銀行、重なる商店、旅館等は、大抵橋を渡った東岸にある。東岸一帯は小高い丘（おか）をなして自（おのず）から海風（かいふう）をよけ、幾多の人家

は水の畔（はた）から上段かけて其蔭（かげ）に群（むら）がり、幾多の舟船は其蔭に息うて居る。余等は弁天社から燈台の方に上った。釧路川と太平洋に挾（はさ）まれた半島の岬端で、東面すれば太平洋、西面すれば釧路湾、釧路川、釧路町を眼下に見て、当面（とうめん）には海と平行して長く延（ひ）いた丘（おか）の上、水色に冴えた秋の朝空に間（あわい）隔（へだ）てゝ二つ列（なら）んだ雄阿寒（おあかん）、雌阿寒（めあかん）の秀色を眺める。湾には煙立つ汽船、漁舟が浮いて居る。幣舞橋には蟻（あり）の様に人が渡って居る。北海道東部第一の港だけあって、氣象頗雄大である。今日（きょう）人を尋（たず）ぬ可く午前中に釧路を去らねばならぬので、見物は匆々（そこそこ）にして宿に帰る。

茶路

北太平洋の波の音の淋しい釧路の白糠（しらぬか）駅で下りて、宿の亭主を頼み村役場に往って茶路（ちゃろ）に住むと云うM氏の在否（ざいひ）を調（しら）べて貰（もら）うと、先には居たが、今は居ない、行方（ゆくえ）は一切分からぬと云う。兎も角も茶路に往って尋ねる外はない。妻児（さいじ）を宿に残して、案内者を頼み、ゲートル、運動靴、洋傘（かさ）一柄（いっぺい）、身軽に出かける。時は最早（もう）午後二時過ぎ。茶路までは三里。帰りはドウセ夜に入ると云うので、余はポケットに懐中電燈（かいちゅうでんとう）を入れ、案内者は夜食の握飯（にぎりめし）と提灯（ちょうちん）を提げて居る。

海の音を背（うしろ）に、鉄道線路を踏切（ふみき）って、西へ檜（やり）の柄（え）の様に真直（まっすぐ）につけられた大路を行く。左右は一面じめじめした泥炭地（でいたんち）で、反魂香（はんごんこう）の黄や沢桔梗（さわぎきょう）の紫や其他名を知らぬ草花が霜枯（しもが）れかゝった草を彩どって居る。煙草（たばこ）の火でも落すと一月も二月もぷすぷす燻（くすぶ）って居ます、と案内者が云う。路の一方にはトロッコのレールが敷かれてある。其処（そこ）此処（ここ）で人夫がレールや枕木（まくらぎ）を取りはずして居る。

「如何（どう）するのかね」

「何、安田（やすだ）の炭鋤（たんこう）へかゝってたんですがね。エ、二里ばかり、あ、あの山の陰（かげ）になってます。エ、最早廢（よ）しちゃったんです」

案内者は斯（こう）云って、仲に立った者が此レールを請負（うけお）って、一間ばかりの橋一つにも五十円の、枕木一本が幾円のと、不当な儲（もうけ）をした事を話す。枕木は重にドス櫓（なら）で、北海道に栗は少なく、釧路などには栗が三本と無いが、ドス櫓（なら）は堅硬（けんこう）にして容易に朽（く）ちず栗にも劣らぬそうである。

案内者は水戸（みと）の者であった。五十そこらの気軽（きがる）そうな男。早くから北海道に渡って、近年白糠に来て、小料理屋をやって居る。

「随分（ずいぶん）色々な者が入り込んで居るだろうね」

「エ、其（そ）りゃ色々な手合（てあい）が来てまさァ」

「随分破落戸（ならずもの）も居るだろうね」

「エ、何、其様（そう）でもありませんが。——一人（ひとり）困った奴（やつ）が居ましてな。よく強淫をやりアがるんです。成る可く身分の好い人のかみさんの娘だのをいくんです。身分の好い人だと、成丈外聞のない様にしますからな。何時（いつ）ぞやも、農家の娘でね、十五六のが草苺（くさか）りに往ってたのを、奴（やつ）が捉（つらま）えましてな。丁度其処に木を伐（き）りに来た男が見つくて、大騒（おおさわ）ぎになりました。——其奴ですか。到頭村から追い出されて、今では大津に往って、漁場（りょうば）を稼（かせ）いで居るってことです」

山が三方から近く寄って来た。唯有（とあ）る人家（じんか）に立寄って、井戸の水をもらって飲む。桔槔（はねつるべ）の釣瓶（つるべ）はバケツで、井戸側（いどがわ）は径（わたり）三尺もある桂（かつら）の丸木の中をくりぬいたのである。一丈余もある水際（みずぎわ）までぶっ通らしい。而して水はさながら水晶（すいしょう）である。まだ此辺までは耕地（こうち）は無い。海上のガス即ち霧が襲うて来るので、根菜類（こんさいるい）は出来るが、地上に育（そだ）つものは穀物蔬菜何も出来ず、どうしても三里内地に入らねば麦も何も出来ないのである。

鹿の角を沢山背負（せお）うて来る男に会った。茶路川（ちゃろかわ）の水涸（か）れた川床が左に見えて来た。

二里も来たかと思う頃、路は殆（ほと）んど直角に右に折れて居る。最早（もう）茶路の入口だ。路傍に大きな草葺の家がある。

「一寸休んで行きましようかな」と云って、案内者が先に立って入る。

大きな炉（ろ）をきって、自在（じざい）に大薬罐の湯がたぎって居る。煤（すす）けた屋根裏からつりさげた藁苞（わらつと）に、焼いた小魚（こざかな）の串（くし）がさしてある。柱には大きなぼんぼんが掛（かか）って居る。広くとった土間の片隅は棚になって、茶碗（ちゃわん）、皿（さら）、小鉢（こぼち）の類（るい）が多くのせてある。

額の少し禿げた天神髯（てんじんひげ）の五十位の男が出て来た。案内者と二三の会話がある。

「茶路は誰を御訪（おたず）ねなさるンですかね」

余はMの名を云った。

「あ、Mさんですか。Mさんなれば最早茶路には居ません。昨年越ししました。今は釧路に居ます。釧路の西幣舞町（にしぬさまいまち）です。葬儀屋（そうぎや）をやっています。エ、エ、俺（わたし）とは極（ごく）懇意（こんい）で、つい先月も遊びに往って来ました」

と云って、主は戸棚（とだな）から一括（いっかつ）した手紙はがきを取り出し、一枚ずつめくって、一枚のはがきを取り出して見せた。まさしく其人の名がある。

「かみさんも一緒（いっしょ）ですかね？」

実は彼は内地の郷里に妻子を置いて、渡道（とどう）したきり、音信不通（いんしんふつう）だが、風のたよりに彼地で妻を迎えて居ると云うこ

とが伝えられて居るのであった。

「エ、かみさんも一緒に居ます。子供ですか、子供は居ません。たしか大きいのが満洲（まんしゅう）に居るとか云うことでしたっけ」

案外早く埒（らち）が明（あ）いたので、余は礼を云って、直ぐ白糖（しらぬか）へ引かえした。

「分かってようございました。エ、彼（あの）人（ひと）ですか、たしか淡路（あわじ）の人だと云います。飯屋（めしや）をして、大分儲けると云うことです」と案内者は云うた。

白糖の宿に帰ると、秋の日が暮れて、ランプの蔭（かげ）に妻児（さいじ）が淋しく待って居た。夕飯を食って、八時過ぎの終列車で釧路に引返えす。

北海道の京都

釧路で尋ねるM氏に会って所要を果し、翌日池田を経て湊別（りくんべつ）に往って此行第一の目的なる関寛翁訪問を果し、滞留六日、旭川一泊、小樽一泊して、十月二日二たび札幌に入った。

往きに一昼二夜、復えりに一昼夜、皮相（ひそう）を瞥見（べっけん）した札幌は、七年前に見た札幌とさして相違を見出す事が出来なかった。耶蘇教（やそきょう）信者が八万の都府（とふ）に八百からあると云う。唯（ただ）一台来た自動車を市の共議で排斥したと云う。二日の夜は独立教会でT牧師の説教を聞いて山形屋に眠り、翌日はT君、O君等と農科大学を見に往った。博物館で見た熊の胃から出たアルコール漬の父親の手子供の手は、余の頭を痛くした。明治十四五年まで此札幌の附近にまだ熊が出没したと思えば、北海道も開けたものである。宮部（みやべ）博士の説明で二三植物標本を見た。樺太（かばふと）の日露国境の辺で採取（さいしゅう）して新に命名された紫のサカイツ、ジ、其名は久しく聞いて居た冬虫夏草（とうちゅうかそう）、木の髓（ずい）を腐らす猿の腰かけ等。それから某君によりて昆虫の標本を示され、美しい蝶、命短い蜉蝣（ふゆう）の生活等につき面白い話を聞いた。榆（にれ）の蔭うつ大学の芝生、アカシヤの茂る大道の並木、北海道の京都札幌は好（よ）い都府である。

余等は其日の夜汽車で札幌を立ち、あくる一日を二たび大沼公園の小雨（こさめ）に遊び暮らし、其夜函館に往って、また梅が香丸で北海道に惜しい別れを告げた。

津軽

青森に一夜明（あか）して、十月六日の朝弘前（ひろさき）に往った。

津軽（つがる）は今林檎（りんご）王国の栄華時代である。弘前の城下町を通ると、ケラを被（き）て目かご背負うた津軽女（つがるめ）も、草履はいて炭馬をひいた津軽男も、林檎喰（く）い喰い歩いて居る。代官町（だいかんまち）の大一と云う店で、東京に二箱仕出す。奥深（おくぶか）い店は、林檎と、箱と、巨鋸屑（おがくず）と、荷造りする男女で一ぱいであった。

古い土族町、新しい商業町、場末（ばすえ）のボロ町を通過して、岩木川（いわきがわ）を渡り、城北三里板柳（いたやぎ）村の方へ向うた。まだ雪を見ぬ岩木山は、十月の朝日に桔梗の花の色をして居る。山を繞（めぐ）って秋の田が一面に色づいて居る。街道は断続楡樟（まるめろ）の黄（き）な村、林檎の紅い畑を過ぎて行く。二時間ばかりにして、岩木川の長橋を渡り、田舎町には家並（やなみ）の揃（そろ）うて豊らしい板柳村に入った。

板柳村のY君は、林檎園の監督をする傍、新派の歌をよみ文芸を好む人である。一二度粕谷の茅廬にも音ずれた。余等はY君の家を一夜厄介（やっかい）になった。文展（ぶんてん）で評判の好かった不折（ふせつ）の「陶器づくり」の油絵、三千里の行脚（あんぎゃ）して此処にも滞留（たいりゅう）した碧梧桐「花林檎」の額、子規、碧、虚の短冊、与謝野夫妻、竹柏園社中の短冊など見た。十五町歩の林檎園に、撰屑（よりのくず）の林檎の可惜（あたら）転（ころ）がるのを見た。種々の林檎を味わうた。夜はY君の友にして村の重立たる人々にも会うた。余はタァナァ水彩画帖をY君に贈り、其フライライフに左の出たらめを書きつけた。

林檎朱（あけ）に楡樟（まるめろ）黄なる秋の日を
岩木山下（いわきさんか）に君とかたらふ

あくる朝は早く板柳村を辞した。岩木川の橋を渡って、昨夜会合した諸君に告別し、Y君の案内により大急ぎで舞鶴城へかけ上り、津軽家祖先の甲冑（かっちゅう）の銅像の辺から岩木山を今一度眺め、大急ぎで写真をとり、大急ぎで停車場にかけつけた。Y君も大鰐（おおわに）まで送って来て、こゝに袂（たもと）を分（わか）った。余等はこれから秋田、米沢、福島を経（へ）て帰村す可く汽車の旅をつづけた。

紅葉狩

紅葉

嫁（とつ）いで京都に往って居る季（すえ）の女（むすめ）の家を訪うべく幾年か心がけて居た母と、折よく南部（なんぶ）から出て来た寄生木（やどりぎ）のお新お糸の姉妹を連れて、余の家族を合せて同勢（どうぜい）六人京都に往った。松茸（まつだけ）に晩（おそ）く、紅葉には盛りにちと早いと云う明治四十三年の十一月中旬。

京都に着いて三日目に、高尾（たかお）檜尾（まきのお）梅尾（とがのお）から嵐山（あらしやま）の秋色を愛ずべく、一同車を連（つら）ねて上京の姉の家を出た。堀川（ほりかわ）西陣（にしじん）をぬけて、坦々（たんたん）たる白土の道を西へ走る。丹波から吹いて来る風が寒い。行手には唐人（とうじん）の冠（かむり）を見る様に一寸青黒い頭（あたま）の上の頭をかぶった愛宕山（あたごやま）が、此辺一帯の帝王貌（がお）して見下ろして居る。御室（おむろ）でしばらく車を下りる。株立ちの矮（ひく）い桜は落葉し尽して、からんとした中に、山門（さんもん）の黄が勝った丹塗（にぬり）と、八分の紅を染めた楓（もみじ）とが、何とも云えぬ趣（おもむき）をなして居る。余は御室が大好きである。直ぐ向う

のならびが岡の兼好（けんこう）が書いた遊びずきの法師達が、児（ちご）を連れて落葉に埋（うず）めて置いた弁当を探して居やしないか、と見廻（みま）わしたが、人の影はなくて、唯小鳥の囀（さえず）る声ばかりした。

車は走せて梅が畑へ来た。柴車（しばぐるま）を挽（ひ）いて来るおばさんも、苧田（かりた）をかえして居る娘も、木綿着ながらキチンとした身装（みなり）をして、手甲（てっこう）かけて、足袋はいて、髪は奇麗（きれい）に撫（な）でつけて居る。労働が余所目（よそめ）に美しく見られる。日あたり風あたりが暴（あ）らぐ、水も荒く、軽い土が耳の中鼻の中まで舞（ま）い込（こ）む余の住む武蔵野の百姓女なぞは中々、斯（こ）う美しくはして居られぬ。八年前余は独歩（どっぽ）嵐山から高尾に来た時、時雨（しぐれ）に降られて、梅が畑の唯有（とあ）る百姓家に跑（か）け込んで簞（みの）を借りた。山吹の花さし出す娘はなくて、婆（ばあ）さんが簞を出して呉れたが、「おべゝがだいなしになるやろ」と云うので、余は羽織（はおり）を裏返えしに着て、其上に簞を被（は）おり、帽子を傾けて高尾に急いだ。瓢箪（ひょうたん）など肩にして芸子と番傘の相合傘（あいあいがさ）で帰って来る若い男等が、「ヨウ、勘平猪打（ししうち）の段か」などゝ囃（はや）した。

いよいよ高尾に来た。車を下りて、車夫（くるまや）に母を負うてもらい、白雲橋を渡って、神護寺内（じんごじない）の見晴らしに上った。紅葉（もみじ）はまだ五六分と云う処である。かけ茶屋の一に上（あ）がって、姉が心尽しの弁当を楽（たの）しく開いた。余等はまた土皿投（かわらけな）げを試みた。手をはなれた土皿は、ヒラヒラヒラと宙返（ちゅうがえ）りして手もとに舞い込む様に此方（こなた）の崖に落ち、中々谷底（たにそこ）へは届（とど）かぬ。色々の色に焦（こ）がれて居る山と山との間の深い谷底を清滝川（きよたきがわ）が流れて居る。川下が堰（せ）きとめられて緑礬色（りょくばんいろ）の水が湛え、褐色（かっしょく）の落葉が点々として浮いて居る。

「水を堰（せ）いて如何（どう）するのかな」

「水力電気たら云うてな、あんたはん」と茶を持って来たおばこのかみさんが云う。

余は舌鼓（したつづみ）をうった。

余等は高尾を出て、清滝川に沿うて遡（さかのぼ）り、槇の尾を経て、梅の尾に往った。

梅（とが）の尾は高尾に比して瀟洒（しょうしゃ）として居る。高尾から唯少し上流に遡（さかのぼ）るのであるが、此処の楓（もみじ）は高尾よりも染（そ）めて居る。寺畔の茶屋から見ると、向う山の緑青（ろくしょう）で画（か）いた様な杉の幾本（いくもと）に映（うつ）って楓の紅が目ざましく美しい。斯梅の尾の寺に、今は昔先輩の某が避暑（ひしょ）して居たので、余は同窓（どうそう）の友と二三日泊りがけに遊びに来たものだ。其は余が十二の夏であった。余等は毎日寺の下の川淵（かわぶち）に泳（およ）ぎ、三度三度南瓜（とうなす）で飯を食わされた。村から水瓜（すいか）をかうて来て、川に浸（ひた）して置いて食ったりした。余

は今記念の為に、川に下りて川水の中から赤い石と白い石とを拾（ひろ）った。清滝川は余にとりて思出（おもいで）多い川である。梅尾に居た年から八年程後、斯少し下流愛宕（あたご）の麓（ふもと）清滝の里に、余は脚気（かっけ）を口実に、実は学課をなまけて、秋の一月を遊び暮らし、ミゼラブルばかり読んで居たことがある。

梅の尾から余等は広沢（ひろさわ）の池を経（へ）て嵐山に往った。広沢の池の水が乾（ほ）されて、鮒（ふな）や、鱒（どじょう）が泥の中にばたばたして居た。

嵐山の楓は高尾よりもまだ早かった。嵐山其ものと桂川（かつらがわ）とは旧に仍って美しいものであったが、川の此岸（こなた）には風流に屋根は萩（はぎ）で葺（ふ）いてあったが自働電話所が出来たり、電車が通い、汽車が通い、要するに殺風景（さっぷうけい）なものになり果てた。最早三船の才人（さいじん）もなければ、小督（こごう）や祇王（ぎおう）祇女仏御前（ほとけごぜん）もなく、お半長右衛門すらあり得ない。

「暮れて帰れば春の月」と蕪村（ぶそん）の時代は詩趣満々（ししゅまんまん）であった太秦（うずまさ）を通過して帰る車の上に、余は満腔（まんこう）の不平を吐（は）く所なきに悶々（もんもん）した。

斯く云う自分も其仲間だが、何故（なぜ）我日本国民は斯く一途（いちず）になるであろう乎。彼は中々感服家で、理想実行家である。趣味の民かと思うたら、中々以て実利実功の民である。東叡山を削平（さくへい）して、不忍（しのぼず）の池を埋めると意気込み、西洋人の忠告によって思いとまった日本人は、其功利の理想を盛に上方（かみがた）に実行して居る。億万円にも代えられぬ東山の胴（どう）をくりぬいて琵琶湖の水を引張（ひっぱ）って見たり、鴨東（おうとう）一帯を煙と響（おと）と臭（におい）に汚（けが）してしまったり、狭（せま）い町内に殺人電車をがたつかせたり、嵐山へ殺風景（さっぷうけい）を持込（もちこ）んだり、高尾の山の中まで水力電気でかき廻（ま）わしたり、努力、実益、富国、なんかの名の下に、物質的偏狂人（へんきょうじん）の所為（しよい）を平気にして居る。心ある西洋人は何と見るだろう乎（か）。

京都、奈良、伊勢、出来ることなら須磨明石舞子をかけて、永久日本の美的博物館たらしむ可きで、其処（そこ）に煙突の一本も能う可くば設（もう）けたくないものである。再び得難い天然を破壊し、失い易き歴史の跡（あと）を一掃して、其結果に得る所は何であろう乎。殺風景なる境と人と、荒寥（こうりょう）たる趣味の燃え屑（くず）を残すに過ぎないのであるまい乎。

日本国は譬（たと）えば主人が無くて雇人が乱暴する家の様だ。邦家千年の為にはかる主脳と云うものがあるならば、斯様（こん）な馬鹿げた仕打はせまい。余は日本を愛するが故に、日本が無趣味の邦（くに）となり果つるを好まぬ。余は京畿（けいき）を愛する故に、所謂文明に乱暴されつゝある京畿を見るのが苦痛である。

義仲寺

三井寺で弁慶の力餅を食って、湖上の風光を眺める。何と云っても琵琶湖は好い。

「彼（あれ）が叡山（えいざん）です。彼が比良です。彼処（あすこ）に斯（こ）う少し湖水に出っぱった所に青黒（あおぐろ）いものが見えましよう——彼が唐崎（からさき）の松です」

余は腰（こし）かけを離れて同行の姉妹（しまい）に指（ゆびさ）した。時計を見れば、最早二時過ぎて居る。唐崎の松を遠見で済（す）まして、三井寺を下り、埠頭（はとば）から石山行の小蒸汽に乗った。

丁度八年前の此月である。今朝鮮に居る義兄と、余は同車して唐崎の松に往った。彼は夫婦仲好の呪（まじない）と云って誰でも探すと笑いつゝ、松に攀（よ）じ上り、松葉の二対（つい）四本一頭に括（くく）り合わされたのを探し出してくれた。それから車で大津に帰り、小蒸汽で石山に往って、水際（みぎわ）の宿で鯉（ひがい）と蜆（しじみ）の馳走になり、相乗車で義仲寺（ぎちゅうじ）に立寄って宿に帰った。秋雨（あきさめ）の降ったり止んだり淋しい日であった。

斯様（こん）な事を彼が妹なる妻に話す間に、小蒸汽は汽笛を鳴らしつゝ湖水を滑べって、何時見ても好い水から湧いて出た様な膳所（ぜぜ）の城を掠（かす）め、川となるべく流れ出した湖（みずうみ）の水と共に鉄橋をくゞり、瀬田（せた）の長橋を潜（くぐ）り、石山の埠頭（はとば）に着いた。

手荷物を水畔（すいはん）の宿に預けて、石山の石に靴や下駄の音をさせつゝ、余等は石を拾（ひろ）い、紅葉を拾いつゝ、石山寺に詣（まい）った。うど闇（くら）い内陣の宝物も見た。源氏之間（げんじのま）は嘘でも本当にして置きたい様な処であった。余等は更に観月堂（かんげつどう）に上った。川を隔てゝ薄桃色に禿（は）げた雞冠山を眺め、湖水の括（くく）れて川となるあたりに三上山（みかみやま）の蜈蚣（むかで）が這（は）い渡る様な瀬田の橋を眺め、月の時を思うて良（やや）久（ひさ）しく立去りかねた。

秋の日は用捨なく傾（かたむ）いた。今夜は宇治ときめたので、余等は山を下ると、川畔（かわばた）の宿にも憩（いこ）わず、車を雇うた。二人乗（ににんのり）が二台。最早上方でなければ滅多に二人乗は見られぬ。姉妹は生れてはじめてである。

姉妹を乗せた車は先きに、余等三人を乗せた車は之につゞいて、瀬田川（せたがわ）の岸に沿（そ）いつゝ平な道を馬場の方へ走る。日は入りかけて、樺色（かばいろ）に曛（くん）じた雲が一つ湖天に浮（う）いて居る。湖畔の村々には夕けぶりが立ち出した。鴉（からす）が鳴く。粟津（あわづ）に来た時は、並樹の松に碧（あお）い靄（もや）がかゝった。

「此れがねえ、木曾（きそ）義仲（よしなか）が討死した粟津が原です」

と余は大きな声して先きの車を呼んだ。ふりかえった姉妹の顔も、唯ぼんやりと白かった。

車は一走（ひとはし）りして、燈火（ともしび）明（あか）るい町の唯有（とあ）る家の前に梶棒（かじぼう）を下ろした。

「何だ」

「義仲寺どす」

余は呆気（あっけ）にとられた。八年前秋雨（あきさめ）の寂しい日に来て見た義仲寺は、古風な巷（ちまた）に嵌（はさ）まって、小さな趣ある庵（いおり）だった。

余は舌鼓（したつづみ）うって、門をたゞいて、強（しい）て開けてもらって内に入った。内は真闇（まっくら）である。車夫に提灯（ちょうちん）を持って来させて、妻や姉妹に木曾殿（きそどの）とばせをの墓を紹介（しょうかい）した。

外には汽関車の響や人声が囂々（ごうごう）と騒いで居る。

宇治の朝

宇治（うじ）に着いたのが夜の九時。万碧楼（まんぺきろう）菊屋に往って、川沿いの座敷に導かれた。近水楼台先得月、と中井桜洲山人の額（がく）がかゝって居る。

此処（ここ）は余にも縁浅からぬ座敷である。余の伯父はすぐれた大食家（たいしょくか）で、維新の初年こゝに泊って鰻（うなぎ）の蒲焼（かばやき）を散々に食うた為、勘定に財布（さいふ）の底をはたき、淀川の三十石に乗る銭（ぜに）もないので、頬冠（ほおかむり）して川堤を大阪までてくてく歩いたものだ。伯父の血をひいた余とても御多分に洩（も）れぬ。八年前の秋、此万碧楼に泊った余は、霜枯時（しもがれどき）の客で過分の扱（あ）いを受け、紫縮緬（むらさきちりめん）の夜具など出された。御馳走（ごちそう）も伯父の甥たるに恥（は）じざる程食うた。食うてしまったあとで、墓口（がまぐち）を覗（のぞ）いて見た余は非常に不安を感じた。そこで翌朝宿の者には遊んで来ると云い置いて、汽車で京都に帰った。少し都合もあって其日は行かれず、電報、手紙も臆劫（おっくう）だし、黙って打置（うちお）き、あくる日になって宇治に往った。万碧楼では喰逃（くい）げが帰って来たと云う顔をして、茶代も少し奮発（ふんぱつ）したに關せず、紫縮緬の夜具は雲がくれて、あまり新しくもない木綿の夜具に寝かされた。主の方では無論覚えて居る由もない。余は独笑坪（えつぼ）に入った。

腰硝子（こしがらす）の障子を立てたきり、此座敷に雨戸はなかった。二つともした燭台（しょくだい）の百目蠟燭の火は瞬（またた）かぬが、白い障子越しに颯々（さあさあ）と云う川瀬の響（おと）が寒い。障子をあけると、宇治の早瀬（はやせ）に九日位の月がきらきら碎（くだ）けて居る。ピッピッピッ千鳥（ちどり）が鳴（な）いて居る。

*

朝起きて顔を洗うと、余は宿の襦袍（どてら）を引かけ、一同は旅の着物になって、茶ものまず見物に出かけた。宇治橋は雪の様な霜（しも）だ。ザクリザクリ下駄の二の字のあとをつけて渡る。昔太閤様（たいこうさま）は此処から茶の水を汲ませたものだ、と案内者の口まねをしつゝ、彼出張った橋の欄間（らんま）によりかゝって見下ろす。矢を射る如き川面（かわづら）からは、真白に水蒸気が立って居る。今も変らぬ柴舟（しばぶね）が、見る見る橋の下を伏見（ふしみ）の方へ下って行く。朝日山から朝日が出かゝった。橋を渡ってまだ戸を開けたばかりの通円茶屋（つうえんぢや）の横手から東へ切れ込み、興聖寺（こうしょうじ）の方に歩む。美しい黄の色が眼を射ると思えば、小さな店に柚子（ゆず）が小山と積んである。何と云う種類（しゅるい）か知らぬが、朱欒（ざぼん）程もある大きなものだ。旅先（たびさき）ながら看過（みすご）し難くて、二銭五厘宛で五個買い、万碧楼に届けてもらう。

興聖寺の石門（せきもん）は南面して正に宇治の急流（きゅうりゅう）に対して居る。岩を截（き）り開いた琴阪とか云う嶮道（とうどう）を上って行く。左右の崖（がけ）から紅に黄に染みた槭（もみじ）が枝をさしのべ落葉を散らして、頭上は錦（にしき）、足も錦を踏んで行く。一丁も上って唐風（からふう）の小門に来た。此処から来路（らいろ）を見かえると、額縁（がくぶち）めいた洞門（どうもん）に劃（しき）られた宇治川の流れの断片が見える。金剛不動の梵山（ほんざん）に跏趺（ふざ）して、下界流転（るてん）の消息は唯一片、洞門を閃（ひら）めき過ぐる川水の影に見ると云う趣。心憎（こころにく）い結構の寺である。

橐駝師（うえきや）が剪裁（せんさい）の手を尽した小庭を通過して、庫裡（くり）に行く。誰も居ない。尾の少し欠（か）けた年（とし）古（ふ）りた木魚と小槌（こづち）が掛けてある。二つ三つたゝいたが、一向出て来ぬ。四つ五つ破（わ）れよと敲（たた）く。無作法の響（おと）がやっとな奥に通じて、雛僧（すうそう）が一人出て来た。別に宝物（ほうもつ）を見るでもなく、記念に画はがきなど買って出る。

雲上（うんじょう）から下界に降る心地して、惜しい嶮道（とうどう）を到頭下り尽した。石門を出ると、川辺に幾艘の小舟が繫（つな）いである。小旗など立てた舟もある。船頭が上って来て乗れとすゝめる。

「如何（どう）だ、舟で渡って見ようか」

「えゝ、渡りましょう」

一同舟に乗った。

川上を見ると、獅子飛（ししと）び、米漉（こめかし）など云う難所に窘（いじ）められて来た宇治川は、今山開け障（さわ）るものなき所に流れ出て、弩（いしゆみ）をはなれた箭（や）の勢を以て、川幅一ぱいの勾配（こうばい）ある水を傾けて流して来る。紅に黄に染めた上流兩岸の山は、碧（あお）い朝靄（あさもや）を被（き）て、山蔭の水も千反（せんたん）の花色綸子（はないろりんず）をはえたらん様に、一たび山蔭を出て朝日が射（さ）すあたりに来ると、水も目がさめた様に麗々（れいれい）

と光り渡って、滔々（とうとう）と押し流して来る。瀬の音がごうごうごう、ざあざあざあと川面（かわつら）一面に響く。

「好いなァ」思わず声をあげる。

船頭は軋々（ぎいぎい）と櫓の響（おと）をさせて、ほゞ山形（やまなり）に宇治川を渡す。

「何て綺麗な水でしょう」妻は舷側（ふなばた）の水を両手に掬（すく）い上げて川を讚（ほ）める。鶴子が真似（まね）る。

平等院（びょうどういん）の岸近く細長い島がある。浮島と云うそうだ。島を蔽（おお）う枯葭（かれよし）の中から十三層の石輪塔（せきりんとう）が見える。

「あの塔は何かね、先には見かけなかった様だが」

「近頃掘り出したんです。宝塔（ほうとう）たら云うてナ、あんたはん」と船頭が説明する。水は早し、川幅（かわはば）は一丁には越えぬ。惜しと思うまに渡してしまつて、舟は平等院上手（かみて）の岸についた。

舟賃（ふなちん）を払うて、其処（そこ）に三つ四つ設けられた茶店の前を過ぎて、美（うつく）しい紅葉を拾（ひろ）いつゝ余等は平等院に入った。

嫩草山の夕

奈良は奠都（てんと）千百年祭で、町は球燈（きゅうとう）、見せ物、人の顔と声とで一ぱいであった。往年（おうねん）泊（とま）った猿沢池（さるさわのいけ）の三景楼に往たら、主が変（かわ）つて、名も新猫館（しんねこかん）と妙なものに化（ば）けて居る。うんざりしたが、思い直して、こゝに車を下りた。

茶一碗（わん）、直ぐ見物に出かける。

上方客（かみがたきやく）、東京っ子、芸者、学生の団体、西洋人、生きた現代は歴史も懐古も詩も歌も蹂躪（じゅうりん）して、鹿も驚いた顔をして居る。其雑沓（ざつとつ）の中を縫（ぬ）うて、先ず春日祠（かすがし）に詣（もう）でた。田舎みやげの話し草に、若宮前で御神楽（おかぐら）をあげて、ねじり廊（ろう）の横手を通ると、種々の木の一になって育って居る木がある。寄木（やどりぎ）、と札を立てゝある。大阪あたりの娘らしいのが、「良平（りょうへい）さんよ」と云う。お新さんがお糸さんと顔見合わせて莞爾（にっこり）した。お新さんは窃（そつ）と其内の椿の葉を記念の為にちぎった。

嫩草山（わかくさやま）の麓の茶屋に来た頃は、秋の日が入りかけた。草履（ぞうり）をはいた娘子供が五六人、たらたらと滑（すべ）る様に山から下りて来た。

「如何（どう）だ、上って見ようか」

「え、上りましょう」

足の悪いお新さんと鶴子を茶店（ちゃみせ）に残して、余は靴（くつ）のまゝ、二人の女は貸草履に穿（は）き更（か）えて上りはじめた。

名を聞いてだに優にやさしい嫩草山は、見て美しく思うてなつかしい山である。八年前の十一月初めて奈良に来た夕（ゆうべ）、三景楼の二階から紺青（こんじょう）にけぶる春日山に隣りして、貂（てん）の皮もて包んだ様な暖かい色の円満（ふっくら）とした嫩草山の美しい姿を見た時、余の心は如何様（どんな）に躍（おど）ったであろう。丁度詔（あつら）えたように十五夜のまん丸な月が其上に出て居た。然し其時は遽（あわ）たゞしい旅、山に上るも果（はた）さなかった。今はじめて其懐（ふところ）を辿（たど）るのである。

霜枯（しもが）れそめた矮（ひく）い薄（すすき）や苧萱（かるかや）や他の枯草の中を、人が踏みならした路が幾条（いくすじ）か麓（ふもと）から頂（いただき）へと通うて居る。余等は其一を伝うて上った。打見たよりも山は高く、思うたよりも路は急に、靴の足は滑りがちで、約十五分を費やして上り果てた時は、額（ひたい）も背（せな）も汗（あせ）ばんで居た。頂はやゝ平坦（へいたん）になって、麓からは見えなかった絶頂が、まだ二重になって背（うしろ）に控（ひか）えて居る。唯一つある茶店は最早（もう）店をしまいかけて、頂には遊客（ゆうかく）の一人もなかった。

余等（よら）は額の汗を拭（ぬぐ）うて、嫩草山の頂から大和の国の国見をすべく眼を放（はな）った。

夕（ゆうべ）である。

日はすでに河内（かわち）の金剛山（こんごうせん）と思うあたりに沈んで、一抹（いちまつ）殷紅色（あんこうしよく）の残照（ざんしょう）が西南の空を染めて居る。西生駒（いこま）、信貴（しぎ）、金剛山、南吉野から東多武峰（とうのみね）初瀬（はつせ）の山々は、大和平原をぐるりと囲（かこ）んで、蒼々（そうそう）と暮れつゝある。此暮山（ぼざん）の屏風（びょうぶ）に包まれた大和の国原（くにはら）には、夕けぶり立つ紫の村、黄ばんだ田、明るい川の流れ、神武陵、法隆寺、千年二千年の昔ありしもの、今生けるものゝ総（すべ）てが、夜の安息に入る前に、日に名残を惜んで居る。

余等は麓の方に向うて、「おゝい」と声をかけた。一つの影が縁台（えんたい）をはなれて、山をのぼりはじめた。それは鶴子を負（お）うた車夫であった。やがて上りついて、鶴子は下り立った。

余等は更に眺（なが）めた。最早麓に一人残ったお新さんの影もよくは見えない。

直ぐ後の方でがさがさと草が鳴ったと思うたら、夕空（ゆうぞら）に映（うつ）って大きな黒い影が二つぬうと立って居る。其れは鹿であった。

足の下で、奈良（なら）の町の火が美しくつき出した。蜂（はち）の群（む）れの唸（つぶやき）の様な人声物音が響く。
ぼうん！

麓の方で晩鐘（いりあい）が鳴り出した。其鐘の音（ね）に促（うな）がさるゝかの如く、鴉（からす）が啞（あ）と鳴いて、山の暮から野の黄昏（たそがれ）へと飛んで行く。

余等は今一度眼を平原（へいげん）に放った。最早日の名残も消えて、眼に入る一切のものは蒼（あお）い靄（もや）に包まれた。

大和は今暮るゝのである。

底本：「みみずのたはこと（上）」岩波文庫
「みみずのたはこと（下）」岩波文庫

底本の親本：「みみずのたはこと」岩波書店 1933（昭和8）年刊
入力：奥村正明、小林繁雄 校正：小林繁雄
2002年9月27日作成 2003年5月25日修正

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。
入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。